昭和八年五月二十日印刷納本
昭和八年六月一日發行
每月一回一日發行

精神分析

〔東京精神分析學研究所・編輯〕

昭和八年六月

第貳號

東京 不二出版社 日本橋

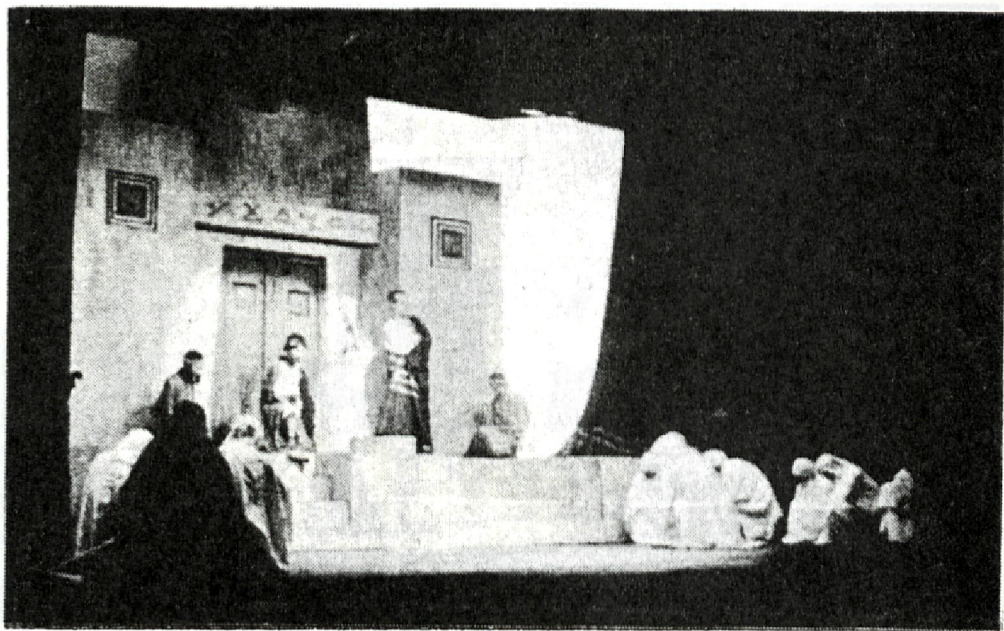
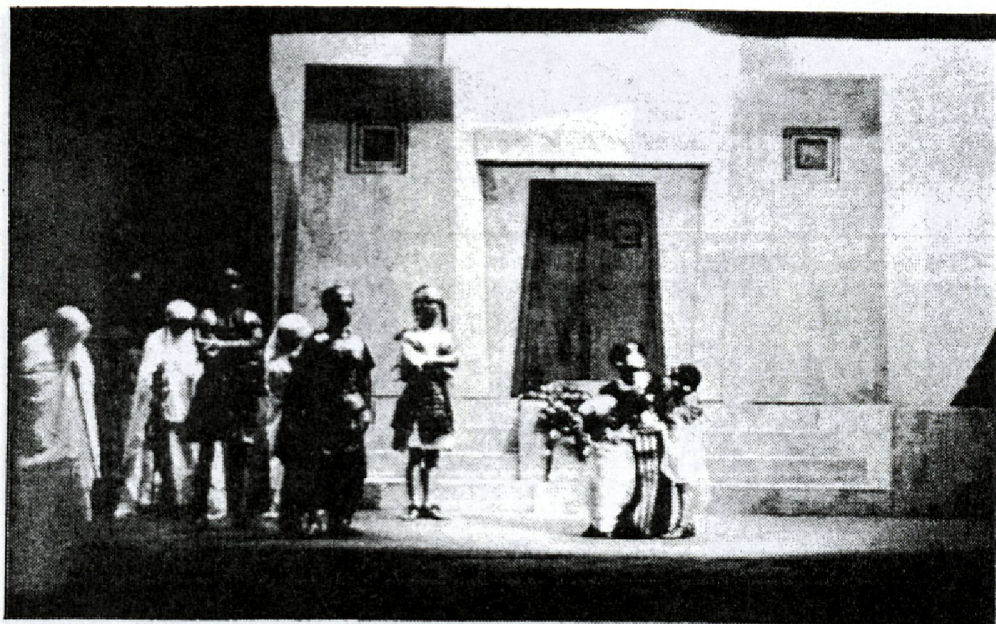
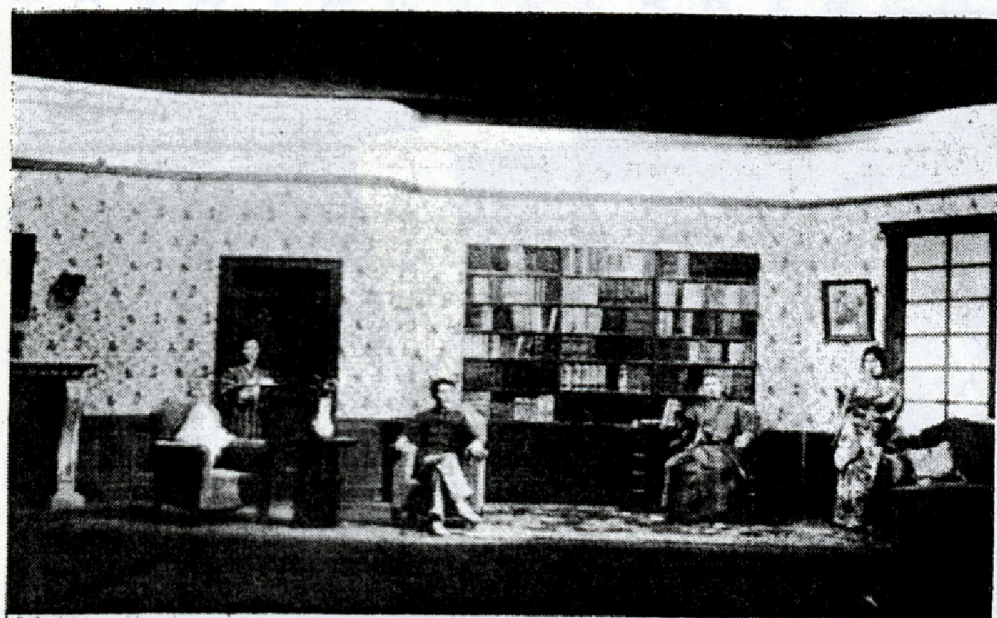
本研究所客員名簿 （いろは順）

所属	氏名
東北帝國大學教授、醫學博士	早坂長一郎
東京帝國大學心理學研究室內	日本心理學會
警視廳勤務、醫學士	金子準二
東洋大學教授	高島平三郎
東京高等學校教授、文學博士	塚原政次
東京文理科大學教授	內田勇三郎
能率研究所長	上野陽一
廣島文理科大學教授、文學博士	久保良英
東北帝國大學、病理學教室、醫學士	山村道雄
東北帝國大學教授、醫學博士	丸井清泰
東京帝國大學、千葉醫科大學囑托	マルクワルト女史
東京市四谷、慶應義塾大學病院	神經科教室
醫學博士	雨宮保衛
東北帝國大學助教授	木村廉吉
成女高等女學校長	宮田修
日本女子大學內	兒童心理研究所
名古屋醫科大學教授 醫學博士	杉田直樹

「エディポス王」舞臺面（第一）

「エディポス王」舞臺面（第二）

「エディポス王」舞臺面（第三）

「養父」舞臺面

精神分析

昭和八年六月號

AUFFÜHRUNG ZUR FREUD-FEIER

Im Tokio Institut für Psychoanalyse fand am 20sten und 21sten April eine Aufführung zur Feier des 77 sten Geburtstages von Prof. Dr. Sigm. Freud in der Asahi-Halle statt, und zwar schon einige Tage vor seinem Geburtstage, am 6sten, Mai. Es wurden K. Ohtskis „ Der Pflgevater, " und Sophokles „ König Ödipus " nach der Übersetzung von Showo Matsui aufgeführt.

Vor der Theateraufführung wurden Vorlesungen über Psychoanalyse und die Stücke von Seiya Hasegawa, Yaekichi Yabe und Showo Matsui gehalten. Die Stücke wurden an beiden Abenden mit grossem Erfolg gegeben. Diese Aufführung zur Geburtstagsfeier bedeutete andererseits auch eine Feier zur Vollendung der Übersetzung der 10 Bände von Freuds Gesammelten Schriften (Shunyodo Verlag) und zur neuen Herausgabe dieser „ Zeitschrift für Psychoanalyse." (K. O.)

犯罪と罪障感との關係

—八つ切事件の場合—

矢部八重吉

話はいさゝか舊聞に屬しても問題は常に新しい。八つ切事件の慘虐さが鋸や、鋏で死体を切離したと云ふ形をとり、そしてその動機が罪跡を晦ます爲であつたとすると、我々に全く合點のゆかない節が出て來る。罪跡を晦ますためならば、もつと簡便な、そして有効な手段がありさうに思はれる。且つ普通人は出來るなら避けたい、あゝ云ふ慘たらしい處置を採らずとも他に種々なやり口があつたらうと考へられる。人間の凡ゆる考はその一思一慮と雖も、その言動即ち一言一句と雖も、一擧一動と同樣に決して偶然ではなく、常に嚴然たる因果律に支配されるものである事を豫想する科學としての精神分析は、心の働きについてその不明な動因を明かにしようと努めて居る。今この技法の見地からして八つ切事件を觀察して見るに、犯人が全く自覺して居らない——勿論他人にも普通の場合窺知出來ない——動機がある事が推知出來る。此の動機は直接知覺出來ない心の領域、即ち無意識裡に宿つてゐるものと看做されよう。無意識裡の動機は直接意識される事なく言動に現れる事が屢々ある。殊に異常な出來事——その原因が他動的であらうと、又は自動的であらうと——に遭遇した時に言動に現はれ易いのである。例へば該事件の中心人物長谷川市太郎が爲した告白中、死体を八つ切にした動機として次の樣な話しがある。

『どうも世界一の事を仕出かして濟みません、お蔭で胸の痛みも忘れる様になりました。實は千葉を殺したもの丶、彼はルンペン時代の名殘りか、手足ともひどいひぜんにかゝり、その上、手には火傷の跡があるのでそのまゝ死体を遺棄しては直ぐに足がつくと思ひ、種々思案した擧句、二階に居た齒科の學生が持つて居た書籍「犯罪科學」の拷問、慘殺篇を讀み八つ切りのヒントを得たのです、最初一寸殘酷だなと思ひましたが生來私はどんな事でもやり遂げる性質で、意を決したら案外樂にやれました。然し始め首を後部から鋸で引き愈々首が落ちる瞬間のアノ何とも形容出來ぬ異様な音は今でもはつきり耳の底に殘つて居り、時々ぞつとします。』

此の告白に據れば、目的は罪跡の消滅にあつた。が、これは意識されて居つた動機である。それ以外に意識されない、即ち無意識裡にあつた動機を精神分析的に見て、窺う事が出來る。

無意識裡の動機はどう云ふ處から知れるかと云ふに、それは余計な事や要點を外れた事を喋つたり、口滑りや、辻褄が合はぬ事で察知出來る。所謂問うに陷ちず語るに陷ちると云ふた様な懺悔で解る。例へば『どうも世界一の事を仕出かして濟みません。』と云ふ言葉は、罪狀の過大さの自覺と、それに對する詫言ではあるが、その裏面には偉い事をしたと云ふ誇りが認められる。此の誇りは我々人間の共有性である自惚と同一の無意識の心に基いて居る。此れはまた偉い事をしたのを多數の人に知られたいと云ふ賣名心として現はれる。我々は皆悉く此の心が強い。好し惡しに拘はらず可成多數の人、世界中の人に名を知られたいのである。が、此の賣名心を更に深く無意識裡の動機に辿ると、人類の最も深遠なる信念即ち靈魂不滅の願望に觸れるのである。それは我々の無意識裡の心の或る部分では名は魂魄の一部であると云ふ強い念慮が猶まだ働いて居るからである。魂魄は他人の心に宿る事に依り生殘り得る。名を廣く知られる事は靈魂不滅を確保する事であり、廣く知られゝば知られる程益々その確實さが高められる。人は一代名は末代、と云ふ事を無意識裡の心から見ると、肉は一代で朽ちるとも靈は無窮である、と云ふ意味になるのであらう。

我々は皆生を惜まず、名を惜むものである。それ故に芳名を竹帛に垂れるを得ねば悪名を千載に遺しても可いのである。此れ世に楠氏があり、石川五右衛門がある所以であらう。が、それ程偉くならなかつたら情死して浮名を流しても可いのである。何れも等しく靈魂不滅の信念の表現と見られるであらう。

八つ切のヒントを得たのは、二階に居た醫學生の持つて居た『犯罪科學』の「拷問惨殺篇」からだと云ふて居る。が、斯様な記事を耽讀するものは世の中には無數である。その中には犯罪的傾向を持ち、又は現にその衝動に駈られて居るものも多數あらう。然るにかの長谷川市太郎に限りそれがヒントとなり、惨酷な行爲に出るに至つたと云ふ事は、その主要な動因が外界にあつたのでなく、彼自身の心の中にあつたのでなければならない。これは彼れが有する虐待性であつたと説明した處で、此の説明は極めてありふれたものだ。そこで考慮を更に一歩進めて、彼が此の特殊の行爲の、即ち死体を八つ切りにした無意識裡の動機に就いて分析的に考察して見よう。

我々の個体は元來他の個体に屬してゐて、それから分離したものである、分離後の個体からは分離前のものは母体と呼ばれる。即ち我々の分離の初型は出產であつた。出產は我々が初めて体驗した愛別離苦であつた。此の愛別離苦が峻烈であると、その後それに似た經驗に對する恐怖と豫感とが強くなる。初兒は自分の体軀に屬する附加物、例へば四肢、齒牙、指等を切り又は失ふ事を非常に恐れる。小供に對し特に脅威となるものは舌及性器の切斷である。舌を拔くと云ふ閻魔、臍を取ると稱せられる雷は、性器の象徵を奪うものとされる。と云ふのは、舌、臍、その他体軀の重要なる、又は實際重要でないものでも重要視されるもの、例へば頭髮、爪等は性器の代償と看做されるからである。斯くして初兒が抱く前記の恐怖は去勢恐怖と呼ばれるのである。

恐怖が強いと自分に代つて他人がそれに惱むのを欲する様になる。惱みは他人も等しく惱む事から輕くなる。此れ同情の基く處である。同情は他人と苦悶を共分する事である。が、之れは合意の場合である。一方で欲しないものを

他から強ひる場合、即ち無理同情と云ふものがある。去勢恐怖が強いと、それを他に強ひようとする心持、他人を去勢しようとする烈しい衝動が起きる。之を去勢願望と云ふ。去勢願望は復讐心を驅立てる。そして復讐心は此の場合嫉妬、失戀に因つて高められる。嫉妬、失戀の對手は常に被惨虐者たる機會多く、去勢願望の犠牲となり易いのである。去勢願望は男子よりも婦人に強い。それはどう云ふ譯かと云ふに、去勢恐怖は多くの場合、現實に土臺がない瞑想、空想、又はそれに因る豫期に止まるが、婦人の場合この空想は現實に土臺を有して居る。それは男子に於ける様に去勢が單に脅威されて居るのみでなく、既遂されて居る――女子は既に性器を奪はれてしまつて居る――と云ふ事實に基くからである。去勢は何故行はれたか、幼き女兒はこれは或る罪過を贖ふ爲めだと空想する場合が多い。幼兒の空想は無意識裡の心となつて成熟後迄残る。『女は罪が深い』と云ふ様な考は此の無意識裡の心に基くのであらう。婦人の有する去勢恐怖が前記の理由からして去勢願望と代つたものが、彼の有名なサロメ劇で表象されて居る。彼女は失戀させた戀人の首を飽迄望んで止まなかつたのである。世に毒婦、妖婦と云ふものがあるのも、此の理由からであらう。去勢恐怖が強い爲め、サロメが出て、毒婦、妖婦が幅を利かす様に、男子が此の恐怖に強く襲はれると残忍な行爲に出るのである。兇行者の心持は所謂『恐いもの見たさ』である。此の心理は無意識裡にある願望が意識されて居る氣咎めと同時に知覺された時に起るものである。此れは市太郎の自白中左の言葉が能く叙述して居る。『……愈々首が落ちる瞬間のアノ何とも形容出來ぬ異様な音は、今でもはつきり耳の底に残つて居り、時々ぞつとします……。』

残忍な行爲を他人に施すと云ふ去勢願望、その裏面にある去勢恐怖は、元來は宗教で云ふ罪障感に因して居る。此の罪障感の基礎は勿論現實にない場合が多い。罪障感に對する膺懲の期待が、即ち恐怖である。膺懲の期待が過大となり恐怖が増してくると、その苦痛、緊張（はりつめ）から逃れようとする心持が起る。此の心持が贖罪願望となつて現はれる。

贖罪は苦業で果される。苦悶を求むる事が罪障消滅となり、重荷を卸す事となり、そして享樂の能力を増す事となる。が、享樂は新たに罪を作る事となり、再び贖罪の必要を生ずる。此れを無限に繰返してゐるものが、苦悶を樂しむ被虐性者である。被虐性者は既述の心理により、それを他人に強ひる事となる。此の場合虐待性者となる。即ち被虐性、虐待性は本を探れば一つであり、此の向け方――自分に向けた時に被虐性、他人に向けた時に虐待性――に依り何れにか定まるのである。八つ切犯人市太郎が殘虐行爲を示した事は虐待性を發露したのであるが、彼れの告白中『世界一の事を仕出かして濟みませんお蔭で胸の痛みも忘れる樣になりました。』と云ふ謝罪の言葉は法の捌きを受け、苦役に服したいと云ふ贖罪願望を現はし、被虐性者の本分を示して居るものと見られよう。膺懲期待、及びその恐怖の動因は幼兒時代には外界にあつた。これは父母及年長者の脅威であつたが、父母及年長者の躾けは內界、即ち心の內にそれを植附け、成熟するに從ひ、各自の心の中の働きとなつた。これ良心の本源である。であるから膺懲期待、その恐怖及び去勢恐怖は、各自がその心の中に宿す良心に對する期待、恐怖と看做されやう。即ち、良心の呵責は恐怖、苦痛、緊張を表はし、それより逃れんとする贖罪願望を生ずるのである。これは犯人が見たと稱する次ぎの夢に現はれて居る。『兇行後大して考へもしませんでしたが、夜になると千葉の物凄い形相が目につき捻ぢ鉢卷で起き上り、彼の亡靈と鬪ひ續け同居人に發見され、却つて驚かしたことも二度や三度ではありませんでした。何しろ近頃は八百屋、酒屋の小僧さんまで靴を穿いてゐるので今度こそは檢擧か？　とその都度ハツとしました。』

總ての夢は――假令それが恐怖や嫌惡に滿ちて居る時と雖も――無意識裡の心の側から見る時には、願望實現又はその滿足である事は精神分析して見ると解る。市太郎の良心は被害者の亡靈を招き、それに謝罪せしめようとして贖罪を强ひてゐるのである。これ贖罪願望の滿足である。が、滿足は未だ充分でない。彼は警官の逮捕を期待し、更に滿足を徹底したいのである。次の告白は、『世界一の事をした』と云ふ市太郎の自惚を更に露骨に現はしてゐる。

『新聞も毎日繰り返し讀んで居りました。包んだボロの裁縫が下手だと書いてありましたが、母も妹も縫物は上手な方でこれはをかしいと思ひました。それにいわしのうろこはたしかに火鉢の灰に交つてゐた筈ですが、問題の猫の毛は鼠の毛の間違ひでせう。要するに旦那方（係官）は考へ過ぎた樣です。まあ「船頭多くして船山へ上る」と云つた形ですね。』

此れに依り、彼れは自分の犯罪の巧妙なるに比し警官の無能なるを嘲けつて居ることが分る。尙次の言葉は更に深く、彼の賣名心の凄い程度を示して居る。

『妹のとみだけは助けて戴けないでせうか。女給にでもなれば「八つ切」の妹と云ふので好奇心をそゝり客を呼ぶでせう。さうすれば母も助かります、何卒お願ひします。』

『……「八つ切」の妹と云ふので云々』と云ふのは、『世界一の事をした』と云ふのと共に彼れの自負心を露はして居る。贖罪は苦悶で遂げられる。苦悶で最も應はしいものは兇行現狀を再三繰返し見せしめ、良心の呵責（贖罪願望）を強める事である。犯人の弟で共犯人たる長太郎は次の樣な夢を見て居る。

『昨夜（十月三十一日）も友達と手をつないで遊びに行く途中、握られて居た腕がすつぽり拔けた夢を見ました、いやなものです。』

之れは手足を切斷した場面が夢で繰返されたのである。拔けた腕は自分のである。殘虐行爲が主客轉倒して示されて居る。虐待性が被虐性として現はれて居る。兩者共無意識裡の心では一つのものである。何れの場合でも苦悶の表現、贖罪願望の滿足である。市太郎の妹とみの夢も同じく贖罪願望を表はして居る。

『あの夜（兇行當夜）の事は思ひ出したくもありません。寢さへすれば千葉が枕許にスウーと立ち上り、怨めし相に私の顏を見てゐると間もなく巡査が來て私の咽喉を絞め附ける、その苦しさにうなされて目が覺める――そんな

事は殆んど毎晩續く夢でした。いゝえ今留置所の中でもよく見る夢です。』

彼女はこの夢で警官の襲撃を期待して居つた。警官は彼女の良心の外界に於ける代表者である。被害者千葉の姿は彼女に兇行場面を追憶せしめ、良心の呵責を強め、苦悶によりこの呵責を輕めんとするのである。警官は呵責し、そして苦悶に基き贖罪せしむるのである。即ち警官の襲撃は彼女の贖罪願望を滿すのである。去勢恐怖が強く、ひいて他人に對する去勢願望（即ち虐待性）が烈しく挑發されると、この願望が遂げられると否とに拘はらず、罪障感が無意識裡の心に惹起されるのである。と云ふのは、無意識裡の心には願うた事、念じた事、思うた事とそれを行爲に示した事との區別がないからである。無意識裡の心では、願はかければ遂げられ、念ずれば人を殺し、思へばそれを實現し得ると考へられてゐるのである。これを精神分析の術語で『念慮の全能』と稱し、古代の魔術、その他凡ゆる迷信の土臺となつたのである。此れ去勢願望はこれを抱いただけで、それを遂行したのと同樣な罪障感が生ずる所以である。現實に殘虐な犯行をなした者は、既に過去に於て念慮の全能により空想的犯罪者であつた。彼等は前科者である。前科者は罪障感に滿ちて居る。贖罪は盡きない。繰返し〱贖罪を求むるのである。贖罪は刑に服し苦業する事で果される。かくして彼等は罪念の強い爲め反つて罪を犯すに至るのである。そして犯行は彼等の本懷である。それを遂げた事は彼等の滿足の一つである。この心持は八つ切犯行者三人の態度で窺はれる。浦川捜査課長は語つて居る。

『三人とも留置所の規則を嚴守し、我々の顏を見さへすれば神妙な態度で挨拶をする。一見悔悟して居る樣ではあるが、自分等が殘虐極まる罪を犯したとは考へてゐないらしい。それに凄い情景を自白するにも笑を浮べるなど、まだ〱調べはこれからだ。』

斯樣な態度は犯行者の無意識の心をよく表はして居る。彼等は殘虐極まる罪を犯したとは考へてゐないらしい。それは逮捕により既に贖罪願望滿足の望を得て居るからである。（完）

日支紛爭調査委員の心理狀態

長谷川誠也

（一）

世界列國の注意を引寄せたリットン報告書は、委員團の認識不足を暴露したものだと言ふ非難は、わが國論の一致するところである。新聞や雜誌に現れた多くの批評に據ると、これは偏見、矛盾、誤解、曲解を含むもの、支那に同情し過ぎてゐるもの、誇大妄想の甚しいもの、本來の使命から脱線した空想を述べたものとしか思はれない。私は政治、外交、法律、經濟などの問題に關しては、全くの門外漢であるから、これらの批評が果して的中してゐるか否かを判斷する識見もなく、また參考材料をも持たない。しかし、常識または良識だけに據つて、報告書を念入りに通讀して見ると、委員團の心理は强健、順正に働き續けたのではなく、或場合には、しどろもどろの步調であつた跡が、明白に殘つてゐるから、上記のやうな世評は一時の憤慨や、單純なショーヴィニズムから發した嘲罵であるとは考へられない。

報告書に幾多の長所あることは明らかだが、全くの素人として、これを見ても、諸所に認識不足、自家撞着、考究

不備、解釋偏倚などと非難されても、辯明し得ないやうな記述がある。これは、この重大問題に關する「若干の省察と考察」（外務省發表の邦文假譯の緒論、以下の引用文は皆この譯に據る）に干與してはならない心理過程、詳しく言へば、何等の檢討をも經ない先入觀念や、無意識的（あるひは潛在意識的）感想が、彼等の意識に侵入して、その順調な働きを妨害したからではあるまいか。だから若し今日、委員團の一人々々が冷靜な心理をもつて、特に第九及び第十の二章を讀み返へすならば、いづれも不滿足を感ずると共に、こんな現實離れのした解決案を提出した彼等自身の心理過程を、恥しく思ふのではなからうかと想像される。

私は委員團が公平の觀察をなし、無私の判斷を下さうと努力したことについて、些少の疑ひをもさし挾むものではないが、彼等の無意識的心理過程が報告書に累を及ぼした點について管見を述べて見たいと思ふ。

（二）

先づ委員團の頭腦には、西洋の文化が東洋のそれよりも優秀であるといふ傳統的觀念が潛在してゐると共に、その文化の結晶たる國際聯盟は、東洋後進國間の紛議を解決する權威と能力とを有する、といふ信念が深い根を張つてゐるのだ。フロイド派の術語を借用すれば、ナーシシズムといふべき無意識的心理傾向が、省察や考察の隱れた土臺石となつて、終に報告書をゆがめてしまつたのだ。

彼等自身の意識には、かやうな觀念も、信念も明晰な輪廓をもつて浮き出してゐなかつたらうが、さやうな心理のあつたことは、報告書の文面に、自然に露出してゐる。例へば、「日本に依る西洋思想の同化は未だ完全ならざるやも知れず」（第一章）と言ひ、あるひは、最近に至つて日本國民は「西洋文明の妥協的方法を蔑視して、古代日本の道德に依存することを主張」（第四章）してゐると言ひ、あるひは「青年日本」（第九章）といふ語を用ゐてゐる處がそれ

だ。かやうな言説は、彼等が一段高い處から、わが國の文化を無意識的に見くだしてゐるのでなければ、出て來ないものだ。前の二引用文を合せて見ると、彼等の頭には次ぎの感想のあることが判明する。世界の平和は西洋文明に依つて維持されるのに、日本國民は今日その文明を蔑視するやうになつたから、東洋の平和が破れたのだと。かやうに、彼等の感想を洗ひ晒して見ると、その心理の昏迷が明白に現れる。なほ「青年日本」といふ語は、或場合には賞讃の意味を含むけれども、この場合には、その反對に、むしろ「青二才」の代用語のやうに感ぜられる。委員團は、明らかにこの意味をもつて、この語を使つたのではなからうが、われ〳〵から見れば、わが國を生意氣な弱輩と睨んでゐる無意識的心理が、この語となつて迸出したものとしか思はれない。一體、嚴肅であるべき筈のこの種の文章に、こんな語を用ゐても差支へないものかどうか、それすら疑問である。

委員團が支那を觀察して、意識的に後進國と見てゐることは、到る處に現れてゐる。「現代支那は其國民生活の有らゆる方面に於て過渡的證跡を示しつゝ進展しつゝある國家なり」(第一章)とか、「國家的統一の缺如」(同上)とか、「西洋に於ける組織の特徴たる團躰に對する忠實の觀念未だ發達せざる支那」(同上)とか、「支那人の認むる共同生活上の義務は國家に對するよりは寧ろ家族、地方又は個人に對するものなり。西洋の所謂愛國心は支那にては今日漸く感得せられ始めたるに過ぎず」(第六章第一節)とか言ふやうな觀察は、かの國狀を正確に認識したものであらうがその用語の間には、西洋優秀といふ委員團の自負の念が、おのづから露出してゐる。序に言ふ、かやうな觀察から「支那の內部的改造に對する一時的國際協力」(第九章)といふ解決案が作られたのだが、この案は「昨年九月支那を理事國として選擧」(第一章)した國際聯盟總會の面目を踏み潰すものだ、と言ふ點について、委員團は氣付いたらうか。若し氣付かなかつたとすれば、彼等の頭はどうかしてゐたのだ。

次ぎに委員團の無意識中には、わが國が侵略者であつて、發達途上の弱い支那を苦しめてゐると言ふ感想がある。

彼等は「支那が過渡期には必ず伴はるべき有らゆる政治的紛糾、社會的混亂、及分裂的傾向を有する發展途上にある國家」(第九章)だから、これに同情して、保護を與へなければならぬと思つてゐるのだ。支那に同情を寄せることは決して間違つた心理ではない。いや、第三者として見れば、同情したくなるのが自然だらう。しかし、その同情が、今日の紛爭問題について偏頗な、不徹底な考察を成立させるやうでは、支那を相手とするわが國の一人民として默してゐるわけにはゆかない。委員團とても、支那に對して偏倚な同情を寄せるつもりはなかつたらうが、他方において、わが國を侵略者またはジンゴイストと見る無意識的作用があつた爲に、純正なるべき筈の同情が、何時とはなしに濁つてしまつたのだらう。

「日本の有する問題の核心に、近代支那の政治的發展及其進みつゝある將來の傾向に關する危惧の存することを認識せざるを得ず。此の危惧は右支那の發展を制御し且其の進路を日本の經濟的利益を確保すると共に同帝國の防衛に對する軍略的要求を滿足せしむる方向に向けしむる目的を有する行動に導きたり」(同上)と言ふ觀察は、わが國が既往に於いて「膨脹政策」(第一章)を取つたやうに、將來に於ても、またこれを取るだらうといふ見方を、初めから念頭に置いたから構成されたので、若しわが國に、自衛の外には侵略的野心がなかつたといふ見方を前提とするか、あるひは冷靜な科學者のやうな心理をもつて、今日までの日支關係を研究したならば、わが國は支那の將來よりも、むしろ現在の混沌狀態について危惧の念を懷いてゐるだけで、その健全な發達を希望するのみでなく、そのためには、援助を惜まない意思すらある、と見なければならなかつた筈だ。委員團は「日本は支那の國民的感情の再興を認め同情を以て之を歡迎するやも知れず」(第九章)と豫想してゐるが、これは齒に衣を着せた言ひ方で、わが國の政策を曲解しない限り、わが國は、支那が堅實な國家統一を目的とし、「相互信頼の精神」(第十章)を示すならば、「之を歡迎するやも知れず」ではなく、心底から悦ぶに相違ないと書かなければならぬ筈だ。

委員團の頭には、わが國が、余程前から滿洲占領を目的として、軍事その他の政策をも組織的に計畫して來た、と言ふ臆斷が膠着してゐる。勿論、彼等はこれを露骨に記述してゐない。報告書には事實が巧妙に配置されて、わが國がこの大野心の成就のために、組織的大計畫を立案して來たことが容易に推測されるやうに書いてある。第三章「一九三一年九月十八日當日及其後に於て發生せる事件の概要」並びに第六章「滿洲國」を通讀すれば、いかに鈍感な腦髓の持主でも、わが國が輕微な事件を口實として、宿望を實現するために活躍したと解釋するだらう。

『滿洲に於ける日本の行動及方針を決定せしものは經濟的考慮よりは寧ろ日本自體の安全に對する懸念なるべし。日本の政治家及軍部が滿洲は『日本の生命線』なることを常に口にするは特に此の關係に於てなりとす。世人は右の如き懸念に同情し且有らゆる事態に於て日本の國防を確保する爲重大責任を負はざるを得ざる右政治家及軍部の行動及動機を了解するに努むべし。』（第九章）

と書いてある處は、わが國に對する委員團の好意を表はしたつもりだらうが、眞にそれだけの理解と好意とがあるならば、彼等自身の無意識に在る反日感の蠢動を禁壓して、報告書の或部分を書き直し、わが國の政策は自衞の外に、何等の侵略的野心をも含まなかつた事を瞭らかにすべきであらう。

（三）

委員團は、わが國の對滿政策の究極の目的は占領であると言ふ臆斷を、明白に記述し得ない立ち場にあつた。いや、かやうに言ひたくとも、的確な證據材料を握つてゐなかつたのだ。また、そんな材料の轉がつてゐる筈もなからう。しかし委員團は、何としてもわが國の組織的計畫なるものを、世界列國に向つて暗示したく、同時に、何か特別の方法で、これを仄めかして、われ〳〵を嫌がらせようと思つたものと見える。さうしてその方法の一つは、委員團の語を借用すれば、「小細工」（第九章。原語はPin-Pricksで、國際聯盟事務局の公定譯と稱する書には『針刺策』とある）で、底意地の惡い筆法である。二三の例を擧げ

よう。先づ張作霖の横死については、

『右殺害の責任は今日迄確定せられず。慘事は神秘の幕に蔽はれ居れるも當時右事件に日本が共謀したるやの嫌疑起り既に緊張し居たる日支關係に一段の緊張を加ふる原因となれり。』（第二章二）

と書いてある。眞綿に針を包んだやうな言ひ方である。わが軍の奉天占領については、

『九月十八日土曜日朝、奉天市民の醒むるや同市が日本軍の手中に歸したるを發見せり。』（第四章）

といふやうに、小説家もしくは詩人の方法を用ゐてゐる。天津事件を記述せる處には、

『第一回の天津事件の他の結果は日本租界に居住し居りし前淸皇帝が土肥原大佐と會談の後十一月十三日旅順に安全なる避難所を求められたることなり。』（同上）

と、殆んど挿話の形で、後の「滿洲國の創設に寄與したる要素」の內、最も有効であつた「二つの要素あり。其は日本軍隊の存在と日本の文武官憲の活動なりと確信するものなり」（第六章第一節）といふ斷定の伏線が張つてある。

十月二十日、奉天市政府の施設が、趙欣伯を市長とした支那人團體に復歸せられたことを記述せる處に、この人物を紹介して「十一年間日本に留學して東京帝國大學の法學博士の稱號を有する法律家」（第六章）と特に附記してある。全報告書中、他にこんな例は見當らないやうだ。趙欣伯の略歷を書いたくらゐならば、更に滿支要人の略傳をも記するが當然であつたらうと言ひたい。

なほ委員團は、滿洲において身邊の保護を受けたがために、却つて滿洲住民の新政府に對する意見を十分に調査し得なかつたとて、左のやうに不平らしく書いてゐる。

『同地方の動搖せる狀態に於ては確かに實際の危險が屢々存せり。而して吾人は吾人の旅行中に與へられたる効果的なる保護に對して感謝するものなり。然れども斯くて執られたる警察的手段の結果は證人を近づかしめざりしことなり。而して多數の支那人は吾人の部員と會見することすら率直に恐怖し居れり。……依て會見は常に甚だしき困難と且秘密裡に準備せられたり。』（第

六章第三節）

上記のやうな數事實を敍述することには、何等反對すべき理由はないが、その表現の形式に、何となく意地惡いピンを潜ませてあるのは、委員團の誠意を疑はしめるものだ。滿洲國の獨立が、日本の畫策であると確信するならば、こんな淺はかな、皮肉な嫁いぢめの小姑的筆法を弄するよりも、到るところに正々堂々と辯じたてる方が男らしいではないか。

委員團はわが國を見て、支那といふ弱い者をいぢめて、不當の利を得ようとする國と思つたから、わが文武官憲の行動に對して、こんな筆法を用ゐたくなつたのだらう。彼等は支那のボイコットの方法を記する處に、「委員會の訪問せる多くの都市に於ては此の種ポスターは豫め撤去せられありたるも云々」（第七章）といふ註の外に、上記のやうな意地惡い筆法を用ゐてゐない。これは明らかに支那に對する不純な同情のあることを證明するものだ。いや、わが國は大規模の組織的計畫をもつて、弱國の膏血を搾取しようとする帝國主義者であると見てゐたから、弱者に對する盲目の同情が公平の記述を妨げるやうになつたのである。さうして、この不純な同情が、ボイコットに關する支那政府の責任を考察する場合において、委員等の判斷回避となつてゐる。

『委員會は政府各部がボイコット運動を支持するの事實に何等か不適當なるものありと諷示せんとするには非ず、委員會は單に政府の奬勵は其の責任問題を惹起することを指摘せんと欲す。此の點に關し政府と國民黨の關係の問題を考慮するを要す。後者の責任に關しては問題なし。國民黨は全ボイコット背後に存する支配的且調整的機關なり。國民黨は政府を作るものにして又其の主人なるやも知れざるも如何なる點迄が黨部の責任にして如何なる點より政府の責任が開始するやを決定することは憲法上の一の複雜なる問題にして本委員會は此の點に關し斷案を下すは適當に非ずと感ず。』（第七章）

委員團のこの意見は、支那人の氣に入るものかも知れんが、われ〳〵から見れば、その不純な同情が、正調に働くべき心理を誤らしめた好例である。彼等は、この一文が全報告書の妥當性を、いかに甚しく毀損するかを省察し得ない

ほどに、理性の働きを亂されてゐたのである。

日支兩國の間柄は、前者が兵力、後者がボイコットを用ゐる「假裝せる戰爭關係」（第十章）であると見てゐる委員團が、一方、ボイコットに關する支那政府の責任については斷案を避け、他方、昨年九月十八日のわが軍の行動については、これを正當な自衞手段と認め難いと明白に斷案を下してゐるのだから、彼等の心理の混亂狀態が思ひやられる。支那政府と國民黨との責任範圍の限界をぼかして置く委員團は、責任の所在の曖昧な支那を相手とするわが國の對滿政策に關しては、たとひ全部これを是認しないにしても、已むを得ない自衞行動については、相當の理解がなくてはならぬ筈だ。然るに彼等は、その理解を持つに至らなかつた。これは全く、日本の進出に對する無意識的反感と、支那に對する似而非義俠的同情とのために心理の正規な推移を妨げられたからだらう。

（四）

三人寄れば文珠の智慧といふ諺もあるけれども、多數が集まつて作り上げたものには、動もすれば判斷力または考察力の低下を暴露する場合がないでもない。委員團は、いづれも優れた能力の人々であるに相違なく、また報告書全部は、かやうな心理能力の低下によつて作られたものでないことも明らかであるが、しかも次ぎの二點については、確かにその低落を暴露してゐる。

その一は、第四章に引用してある張學良の訓令について、彼等が十分の考究をなさなかつた點である。報告書には、九月十八日の事件に關する支那側の說明、即ち、

『九月六日張學良元帥より當時の緊張せる狀態にかて日本軍との衝突は一切之を避けんが爲め特別の注意を爲すべき旨の訓令を接受せるを以て兵營城門の衞兵は木小銃を携帶したるのみにて任務に服したり。』（第四章）

と言ふことを紹介すると共に、その訓令なるものを、註として掲げてある。

『日本との關係頗る機微なるものあるを以て彼等に接する際には特に愼重なるを要す。如何に彼等に於て挑戰するも吾人は特に隱忍し斷じて武力に訴ふることなく以て一切の紛爭を避くべし。貴官は祕密且即時全將校に命令を發し右の點につき彼等の注意を喚起すべし。』（同上）

委員團は、この訓令を鵜呑みにしてゐるやうだが、そこに考察力の低下が明らかに現れてゐる。彼等は何故に「祕密」といふ語に留意しなかつたのだらう。對外關係上、何等かの命令を祕密に傳へなければならぬ場合は、相當に多いだらうが、滿洲における關係の場合、即ち危機を孕んでゐる場合に、軍事的行動を愼めよと言ふやうな命令は、でき得るだけ公明に且一般に傳へられなければならぬ性質のものではなからうか。然るに張學良の命令は祕密に傳へられたといふのだ。だから、支那側は自國兵士の少數が、わが軍に對してどんな挑戰的行動を爲したとしても、この語を楯として、遺憾ながら訓令の趣旨を一兵卒に至るまで徹底させることは困難であつたからと逃避的に辯疏するつもりであつたのだらうと察しても、あながち邪推とばかりは言はれまい。委員團は、一九月十八日の事件について「利害關係者の陳述と共に斯かる意見を充分に考慮し多數の文書資料を熟讀し又接受若しくは收蒐せる幾多の證蹟を愼重研究」（第四章）したと言つてゐるけれども、かやうな變則な訓令、または所謂木小銃（dummy rifles）といふやうな物について、何故に徹底的調査を試みなかつたのだらう。おそらくこれは心理の弛緩または低下のせいで、まさか支那のためを思ふて研究を中止したわけでもなかつたらう。

第二は、彼等が受取つた千五百五十通の手紙についての考察不徹底の點である。委員團は「此等千五百五十通の手紙は二通を除き他は凡て新「滿洲國政府」及日本人に對し痛烈に敵意を示せり。此等は眞摯且自發的に意見を表明したるものゝ如く思はれたり」（第六章第三節）と言つてゐる。おそらく委員團は、嚴正なるべき報告書作成の責任を忘

れて、小說の材料のつもりで、農民、小商人、都市勞働者あるひは學生の手紙を讀んだのではなからうか。さもなければ、支那一流の誇張的、慷慨的、感傷的文體、即ち燕趙悲歌の士に倣つた筆法に魅せられて、發信人の意思の自然發生か否かを看破すべき視力を鈍らせてしまつたのだらう。

（五）

既記のやうに、報告書については、認識不足といふ非難がある。だから、委員團の心理能力は初めから強健でなかつた、衰弱してゐたと推測されないこともないが、私は決してさうでないと思ふ。私はむしろ彼等の能力は頗る健全であつて、事件に關する認識は十分、あるひは十二分であつたと言ひたい。一躰、凡庸な頭腦の持主でも、日支紛爭問題に關しては、相當に公平な、正確な認識を持ち得る筈だ。まして國際聯盟から選ばれ、紛爭の發生した土地を巡視し、その上、幾多の參考材料を蒐輯した委員團のことだ、たとひ省察や考察の期間が短少であつたとしても、十分の認識が積み上げられなければならなかつた筈だ。國際聯盟そのものとても同じ事だ。あれだけの機關を備へ、あれだけの列國の專門家、智見の優れた人、經驗の豐富な人を集めてゐる聯盟のことだ、東洋問題について、認識不足らしいことを言へた義理ではあるまい。またもし眞に認識不足であるならば、こゝに國際聯盟といふ平和機關の大改造といふ問題が生起して來る。しかし、私は聯盟そのもの及び委員團の能力を疑ふ者ではない。從つて、支那を理事國として取扱つて來た聯盟の心理と、聯盟の體面を傷つけるやうな解決案を作つた委員團の心理とには、何か不純な分子があつたものと考へざるを得ないと共に、自身の作つた者のために、顏に泥を塗られた聯盟は、その威嚴を回復するために、その不純な心理も芟除して、正確な認識に基づく解決案を新たに作成しなければなるまいと思ふ。

私は思ふ、委員團は認識不足のためではなく、むしろ十分な認識を隱蔽したゝめに、不完全な報告書を作るやうに

なつたのだ。然らば何故に彼等は自ら欺くやうなことを敢てしたのだらう。一言にすれば、彼等は無意識的心理の侵入を禁制し得なかつたのだ。さうしてその心理とは、前記の反日感と支那に對する不純な同情とである。

委員團は、若し十分の認識を基として正當に思考するならば、わが國の行動を是認し、その上、滿洲の獨立を承認する結論に達しなければならぬと自覺したのだらう。彼等は、

『支那の分裂的諸努力は今尚强きもの〻如し。此の結合の缺如の原因は國民の大衆が支那と諸外國との間の關係緊張せる時期を除きては國家を基礎とせず家族及地方を基礎として考ふる傾向に在り。現今に於ては自己獨立主義的感情を超越せる指導者も在りと雖、眞の國家統一が齎さる〻爲には先づ更に多數の市民が國家的見地を有するに至らんこと必要なるは明瞭なり。』（第一章）

と觀察し、あるひは、

『外國關係に於ける支那の國民的願望の實現は內政の分野に於て近代的政府の機能を發揮する能力の如何に基くものなり。而して右分野の關係の不調和にして除去せられざる限り國際的軋轢及事件の發生の危險、ボイコット並に武力干涉は繼續せらるべし。』（同上）

と考察し、滿洲については、

『日本の活動なくんば滿洲は斯の如き大なる人口を誘致且收容し得ざりしなるべく云々。』（第二章一）

と認むると共に、

『支那は當初開發の方面に活動することなく殆んど滿洲を其の支配より露西亞の手に移さむとせり。』（同上）

と述べてゐる。これだけの認識でも、わが國の對支政策を善意に解釋し、滿洲國の獨立は東洋平和のためであるといふ結論が引出されなければならぬ筈だ。

昨年十月二十八日のロンドン聯合通信によれば、リットン卿は「スペクテータ」誌上に、「滿洲と次ぎの方途」と題する論文中に左の如く述べてゐるさうだ。

『われ〱の全員一致確信した事柄は、滿洲問題の解決が全世界を通じて平和維持のための集團的責任組織の機構内において見出す事が出來るといふことであつた。獨り日本のみが滿洲國を承認したといふ事實は、わが報告書の意義を强化するものでこそあれ、決してこれを弱めるものではない。それ故、日本の措置は來るべき聯盟總會における各國代表が問題を審議せんとするに當つて持つべき確信を、些も減殺するものではない。』（七年十月三十日附夕刊『東京日日新聞』所載）

この語は、彼等が報告書の妥當性を强調すると共に、その裏面において、滿洲問題の落着は、結局その獨立であることを是認する本心を包んでゐると見ても差支へあるまい。彼等は、支那が滿洲を日露間の緩衝地帶と認め、わが國がこれを「ソ」聯邦及び支那の他の部分に對する緩衝地帶と認めてゐることを記述してゐる（第三章二）さうして委員團自身が東三省を一種の緩衝地帶と成さなければならぬと考察してゐることは、第九及び第十の二章に明白に現れてゐる。緩衝地帶から獨立國へといふ心理上の推移は僅かに一歩である。また、獨立國としての緩衝地帶でなければ、その效能は薄弱なものであらう。こんな事を言ふのは釋迦に說法で、委員團は百も二百も承知の筈だ。しかも彼等は、僅かなこの一歩を運ばなかつたのである。

委員團としては、國際聯盟や、不戰條約や、九國條約の手前、わが國の活動を是認する氣にはなれなかつたらう。そればかりではなく、彼等の例の無意識的感想は、是認へ傾くその心理過程を妨げた。だから彼等は「本件に付論議することは本委員會の機能に非ず」（第九章）と言ひ切つて、餘は沈默と納まりたいと思つたかも知れぬ。しかし、聯盟理事會の命令がある以上、尻切れの報告書を提出するわけにもゆかず、何としても尤もらしく見える解決案を添附しなければならぬ位置に立つたのが委員團であつた。十分は認識のまゝに書きたくもあり、書きたくもない、また書けない、と言ふ矛盾した心理を持つてゐた彼等は、定めし苦しかつたらう。そこで、その苦惱から逃れるために、彼等の案出した記述の方法は二つあるやうに見える。その一つは理論揑造、他は故意の考察中止である。

（六）

理論捏造とは、自己の本意を隱蔽するために整然たる理論を組立てることである。その本意なるものゝ眞妄曲直はおのづから別問題であつて、とにかく自己の知る所、信ずる所、感ずる所と異なつた事を、頗る尤もらしく捏ね上げる論理的過程、即ち自己に不忠實な理論的陳述がこれである。そこで、委員團がこの論法を用ゐた顯著な例の一つは、滿洲に獨立運動のなかつたことを主張する處である。彼等は、一九二二年七月頃の支那には『獨立を主張する政府は實に三個ありたり』（第一章）と言ひながら、その獨立は文字通りの意味のものではないと說明するのだ。その見本は張作霖の獨立運動を記する條項である。

『張作霖元帥が時を異にして宣言せる獨立なるものは彼又は滿洲の人民が支那との分離を希望せることを意味せるものには非ず。彼の軍隊は支那が恰も外國なるかの如く之を侵略したるに非ずして單に內亂に參加したるに過ぎず。他省の軍閥と同樣元帥は或は援助し或は攻擊し又は其の領域を中央政府より獨立せるものと宣言したるも右は支那を個々の國家に分割するに至るが如き遣方にて爲されたるに非ず。之に反して支那の內亂の多くは眞に强力なる政府の下に同國を統一せむとする何等かの大計畫に直接又は間接關係あるものなり。從て一切の戰爭及『獨立』の期間を通じ滿洲は終始支那の構成部分たりしなり。』（第二章二）

いかにも尤もらしい理論であるが、統一を目的とする者が、何故に自己の勢力範圍の獨立宣言を發表しなければならなかつたか、と言ふ疑問は、これに依つて少しも說明されない。委員團の考察のやうに、張作霖の胸中には、支那統一といふ大野心があつたのだらう。しかし、それがあつたからとて、滿洲獨立の宣言の眞意が消滅するとは言はれまい。若し、彼が描いた空想の地圖を基として論ずるならば、滿洲は確かに支那の一部たるに相違なからうが、現實の事實から言へば、その獨立宣言には、文字通りの意義が含まれてゐたと見なければなるまい。いや、彼の意を忖度すれば、たとひ支那統一の野心が水泡に歸しても、せめて滿洲だけには永久に不羈獨立の位置を保たせたいものだと言

ふ熱望があつたらう。さもなければ、なにも事々しく獨立を宣言する必要はなかつたらう。

理論捏造の他の一例は、滿洲の住民は大部分支那人であるから、その土地は支那の一部であるといふ主張である。

『露西亞及日本が北滿及南滿に於ける各自の勢力範圍の設定に從事せる間に支那農民は土地を所有するに至り今や滿州は正しく支那のものなり。』（第二章一）

『滿洲に定着せる數百萬の支那農民は各般の關係に於て滿洲をして『長城』以南の支那の延長たらしめたり。東三省は其の人種文化及國民的感情に於て支那化し其の移住者の大部分の來れる隣省河北山東省と殆ど變ることなし。』（第九章）

これが委員團の意見であるけれども、こんな見方が妥當として適用するものだらうか。法律や、政治や、國際法などを知らない私には、何も言ふ資格はないが、若しこれが正しい見方だといふことならば、世界中に幾多の故障や、紛議がぞろ〳〵生起しはせぬかと心配になる。さし當り、『朝鮮人の居住者四〇〇、〇〇〇人に及び、同地支那人口に對する比率三對一の多數を算する』（第三章五）間島地方が大問題となつてくるやうに考へられる。居住民の頭數とその文化の性質とが、土地の所屬を決定する必要條件たることもあらうが、その土地の歷史は一そう重要であらう。委員團は、

『問題は寧ろ極度に複雜なるを以て一切の事實及其の歷史的背景に關し十分なる知識あるもの丶み之に關する決定的意見を表明する資格ありといふべし。』（第九章）

と言ひながら、彼等自身は、たゞ昨今の歷史を材料として意見を立てゝゐる。その故は、滿洲の獨自な位置と發達とを承認したくないといふ心理から、たゞ目前の事實だけを基礎として、尤もらしい意見を構成しなければならぬ具合になり、それが他にどんな影響を及ぼすかを省察する餘裕がなくなつたからだらう。

張作霖の獨立宣言について、特殊な說明を試みた委員團は、張學良と國民黨との關係については、

『彼と國民黨及南京との關係は緊密を加へ一九二八年十二月彼は易幟を行ひ（accepted the national flag）中央政府に對する忠順を

宣言し云々』（第二章二）と記述するだけで「易幟を行ひ」には、何等特別の解説をも附け加へてゐない。これは明らかに考察中止である。張學良は、おもちやの旗を振り廻してゐたわけではないから、彼が中央政府の旗を奉戴したといふ重大事件は、半面において、その時まで滿洲が獨立の位置を保つてゐたことを證明するものだ。若し中央政府の旗は國民黨の旗だといふやうな詭辯的思想から、彼の易幟は單にこの黨派の主義に贊同したことを意味するばかりだと言ふならば、支那の國旗は何處にあるかと訊きたくなる。また若し易幟には重大な意義がなく、たゞ軍閥等の臨時の方便に外ならぬと言ふならば、支那の正躰は一國家を成してゐないものと結論しなければならぬ。とにかく易幟を重大事件と見て來ると、滿支同體說も、一國家としての支那觀も、共に成立し難いやうなことになる。だから委員團は、これに關する考察を故意に中止せざるを得なくなつたのだらう。しかし、この重大な事實が記述してあるだけに、先きに滿洲獨立の意義を否認した文章は、たゞの飾非理論たることが判明するばかりではなく、「易幟」の二字を重要と考へる者から見れば、苦心の理論が根抵から崩壞するのだ。また若し委員團に理論揑造や、考察中止の意思がなかつたとすれば、彼等が「特殊地位なる語を日本政府が外交用語として使用する時其の意味は不明瞭」（第三章二）と言つてゐると同樣に、われわれも彼等の滿支同體を說く特殊理論は不明瞭であると言ひたい。

なほ、考察中止の明白な例は、九月十八日の鐵道線路破壞に關する記述中に在る。委員團は左のやうな意見を書いてゐる。

『九月十八日午後十時より十時半の間に鐵道線路上若くは其附近にかて爆發ありしは疑なきも鐵道に對する損傷は若しありとするも事實長春よりの南行列車の定刻到着を妨げざりしものにて其れのみにては軍事行動を正當とするものに非ず。同夜に於ける叙上日本軍の軍事行動は正當なる自衛手段と認むることを得ず。尤も之により調査團は現地に在りたる日本將校が自衛の爲め行動

しつゝありたるなるべしとの假説を排除せんとするものには非ず。』（第四章）

實に峻嚴のやうで、しかも何處かに間の拔けた意見である。これが通用するものならば、ペスト菌の出たのは、大都會の一小局部の一人のことだから、大規模の防疫手段を講ずるのは不當だと言つても、決してをかしくない論法になる。いかに遲鈍な人間でも、支那兵の鐵道破壞は、結果においてこそ輕微であつたが、大規模の反日計畫の一部もしくは口火ではなかつたかと氣付かざるを得ない。まして賢明な委員團のことだ、いかに心理作用が弛紊してゐたからとて、こんな意見を立てゝ平氣でゐられる筈はない。さうして一方、委員團は鐵道破壞に關する支那側の說明を徹底的に追究してゐない。だからわれ〳〵は、彼等がこの場合においても、また考察を故意に中止したとしか考へられぬ。

委員團は「日本軍は支那軍との間に於ける敵對行爲起り得べきことを豫想して愼重準備せられたる計畫を有し居たるが九月十八日——十九日夜本計畫は迅速且正確に實施せられたり」（同上）と言ひ、次いでその後におけるわが軍の行動を詳述してゐる。なほ彼等は、

『宣戰を布告することなくして疑もなく支那の領土たる廣大なる地域が日本軍隊に依り强力を以て押收、占領せられ且右行動の結果として該地域が支那の他の部分より分離せられ獨立を宣言するに至れるは事實なり』（第九章）

と言ふことを、世界列國の人々の頭に染みこませようと思つて、わが軍の滿洲に於ける活動を詳密に書き立てたのであらうが、冷靜公平な頭の人々ならば、わが軍の活動は當り前のことだと言ふのだらう。委員團はわが軍が、さも〳〵滿洲占領の機會を狙つてゐたやうに見せかけてゐるが、何故に、同時に支那側の活動を考察の對象としなかつたのか。泥棒捕へて繩綯ふやうな陸海軍を持つてゐる國は、世界中、稀に見る所と知つてゐる者は、雨後の筍の自己獨立主義者等が互に英雄を氣取つて、撲り合つたり、握手したりする亂雜無統一の支那を相手とする皇軍が、愼重綿密に立案された計畫を有してゐたことに、何の不思議もないと考へるだらう。實に委員團は、彼等自身の無意識的反日感想を

抑制しなかつたために、重要事件に關する考察を故意に中止して、遂に心理の健在を疑はれるやうな意見を述べるに至つたのである。

（七）

報告書全体を通讀して見ると、委員團の心理に、種々の意識が錯綜してゐたことが明白に現れてゐる。別言すれば彼等は十分な認識をもつてゐながら、それを基として論述する場合に當つて、殆んど無意識的とも言ふべき心理過程に支配されたのである。

委員團は、優秀な西洋文化を代表する者が、後進國の紛議を解決するのだと言ふ感想を持つてゐたのだが、その感想に、なほ他の感想、即ち反日感と支那に對する偏膠な同情とが加はつてゐた。さうして、これらの感想の混合は、委員團をして、わが國を抑へつけ、支那を穩かに說諭するといふ態度を取らしめた。譬へば大人が、喧嘩するに二人の子供の年上の方を嚴しく叱り飛ばし、小弱の方を徐ろに訓戒するやうな態度がそれである。なほ上記の外に、もう一つの心理が加つてゐた。それは日支兩國から惡く思はれたくないといふ願望であつた。

しかしながら一方には、なんと言つても十分な認識があつたのだから、前記のやうな感想の動くまゝに、叙事詩や、小說のやうなものを書くわけにゆかず、どうしても尤もらしい報告書を作り上げなければならなかつた。そこに委員團の惱みがあつたのだ。彼等は、原狀回復が何等の解決ともならないことを認めたと共に、一方、滿洲政府が「事實上其の改革案の多數を遂行し得べきことを示す何等の徵候存せず」（第六章第二節）と斷定したから、その改革案と同樣なもの多數を、政綱中に掲げてゐる。支那の將來は有望だとは、いかになんでも言ひ得ない羽目になつた。從つて、歷史と現實とに即し、且公平また自然な解決案を立てるつもりであつたのが、知らず識らずの間に、現實世界を超越

し、空想化された極東世界に迷ひこんで、名ばかり自治の滿洲と、支那改造のための一時的國際協力とを說くやうになつたのだ。私は思ふ、委員團は、彼等自身の無意識的感想を內省すると共に、論述の矛盾を除かない限り、その解決案の空想的たることを自覺しないだらう。若しまた自覺してゐるとすれば、彼等は意識的に空想世界へ逃れ去つたもので、無責任といふ非難を免がれ難いだらう。

かやうな解決案を見る滿洲人は、手足の自由を束縛される自治よりも、却つて原狀を望むかも知れず、支那は支那で、既往においてロシアが「表面上は支那の爲に而して事實上は自己の利益の爲に支那に對し干涉をなすの機會」（第二章三）を捕へたやうに、列國が「國際協力」の美名の下に、私慾を逞しうする機會を狙ふのではなからうかと疑ひ、わが國は東洋平和どころか、世界平和の攪亂される禍根が蒔き散らされると危ぶむだらう。要するに、委員團の解決案は日支いづれの國民からも歡迎されず、兩方から惡く思はれたくないといふ彼等の願望は、却つて愛想づかしを招くやうなことになるのだ。

風俗、習慣をはじめ、感情の動き方、意思表明の方法、あるひは傳統的思想などの點において、西洋とは著しく異なつてゐる東洋の複雜な紛爭事件について、或點までは價値の豐富な報告書を作成した委員團の勞苦は一方ならぬものであつたらう。實に報告書は、東西の歷史を通じて、類例の少いものであるに相違ない。しかしその內に、無意識的感想の潛行的活動のために歪んだ趣意の表現を含んでゐるのは大缺陷であると言はねばならぬ。

（七年十一月十二日稿）

J・A・シモンヅのひそかなる情熱（三）

江戸川亂歩

上述のシモンヅの所謂「生得の憬れ」は、フロイドを通過した我々は、少くも潜在的には萬人通有のものであることを知つてゐるのだが、併し、右に述べた又以下述べるであらう彼の場合の様に、これ程烈しく「深くも根ざした」のには、そこに何か、本質的にか、還境的にか、特別の事情がなくてはならない様に思はれる。だが、彼の自傳や書簡は、それについて別段我々に教へる所がない、僅かに左の一事を除いては。

シモンヅは四歳の折母を失ひ、それからは父一人の愛によつて育つた。四歳と云へば朧げにもしろ、母の面影が記憶に殘つてゐるのが當りまへの様に思はれる。現に「自傳」にも、その母に抱かれて馬車に乘つてゐた時の記憶が記されてゐるのだが、さういふ記憶はあつても、慕はしき母としての面影は、彼の心には殆ど殘つてゐなかつた。母の死後、幼い彼は父に連れられて、よくその墓參りをしたのであるが、墓前に額づきながらも、母を偲び泣くことは全くなかつた。彼はそれについて「自傳」にこんな風に書いてゐる。

「（當時）私は母の懷しさがハッキリ分つてゐたとは云へない。つまり、母を失つたといふ事實を痛感出來なかつた。凡てが茫漠模糊としてゐた。母が私に對してどんな關係のものであるかさへ知らなかつた。私はなき母をあこがれ

る氣持になれないので、ともすれば、私自身を余りにも冷淡な罪深い男の様に思ふことがあつた。」

常人であれば、如何に四歳で別れた母とは云へ、イヤ、そんなに早く別れた母であればこそ、その面影が幻の女性ともなつて、一生涯心を離れぬのが當り前の様に思はれるのに、シモンヅにはそれが少しもなかつたといふのである私は彼のこの母への冷淡について、何かしら異常なものを感じないではゐられぬのだ。

これに反して、彼の父への愛情は、寧ろ常人以上に濃かであつた。母を失つた彼は自然「お父さん子」ではあつたけれど、それにもせよ、彼の父に對する親愛の情は(彼の場合は友情といつた方がふさはしいのだが)普通以上であつた様に見える。

父の方でも、充分嚴格ではありながら、母の分をも併せて、少年シモンヅを愛してゐたと云へる。幼時の著しい一例を擧げるならば、シモンヅが先に云つた「宙に浮く指」の夢を見續けて、日に日に病的になつて行くのを見ると、父はある期間、丁度日本の母親がする様に、シモンヅと同じベッドに添寢をして、彼の心を靜めようとしたことさへあつた。

年長じて、オックスフォード大學時代には、シモンヅは殆ど休暇毎に、イタリー、ギリシヤ、スキス、ドイツ其他大陸の各地へ長い旅行を企てゝ、古代の建築、彫刻、繪畫などを觀て廻つたものであるが、それらの旅行の同伴者は、多くの場合彼のよき友である父ドクトルであつた。シモンヅは大きくなつてゐても、殊に旅行中などは「パパ」の愛稱を連發して、父につき纒つてゐた。母とは違つて、父に對する親愛の言葉は「自傳」の到る所に散見するのである。

シモンヅが父を失つたのは、三十二歳の年であつたが、その直後彼がある友達に送つた手紙の一部を、「シモンヅ傳」の編者が報告してゐる。

「父の死がこんな恐ろしい打擊であらうとは豫期しなかつた。私は父を失つたと同時に、最も親しき友を失つたの

だ。父は私に對して、心からの優しい愛情を示してくれたばかりでなく、私の趣味なり仕事なりによき理解を持つて、私の仕事の成功に對しては誇りを感じてくれたし、どんな私の企てにも興味を持つてくれた。かくまで私を孤獨に陷れ、私の元氣の源であつた所のものを根こそぎ奪ひ去つてしまつた、この損失に比すべきものが、外にこの世にあらうとは思はれぬ。」

母への冷淡に比べて、何といふ父への愛着であらう。このことは、親達と死別したのが、一方は四歳の幼時であり、一方は三十二歳の成年であつたといふこと丈けでは、說明し切れない樣に見えるのだ。

私は嘗つて、精神分析學者フェレンツィの早い著述の英譯 Sex in Psycho Analysisを一讀したことがあるが、フェレンツィは同性戀愛を二大別して、自己を女性の立場に置くものを Subject-homo-erotism と名附け、自己を男性の立場に置くものを Object-homo-erotism と名附けた。そして前者を說明した文章の中に、次の樣な一節があつた。

「彼は全くの幼兒の時分から、彼自身を父と同じものではなくて、母と同じものと想像する。彼は倒錯せるエディポス、コンプレクスに陷つてゐるのだ。彼は父に對する母の地位に自分自身を置き換えたい爲に、そして母の凡ての特權を享樂したい爲に、母の死を願望する。」

即ち一般の男性が、父を競爭者として母の愛を爭ふのとは反對に、この種の男性は母を競爭相手として、同性である父の愛を爭ふのである。

シモンヅ自傳に現はれた不思議な母への冷淡、父への愛着が、圖らずも私にこのフェレンツィの一節を思出させた。彼はフェレンツィの所謂倒錯せるエディポス、コンプレクスに支配されてゐたのではなかつたか。つまり同性戀情は、彼の場合、自己を女性の立場に置くものではなかつたか。

「シモンヅ傳」を探すと、私のこの想像を裏書きする樣な二三の記述が散見する。空想的で孤獨好きであつた少年

時代のシモンヅは、同年配の少年と遊戯する様なことも少なかつた。學校では運動競技が嫌ひで、外の小供達の様に口笛を吹くことも出來なかつた。そして、たつた一人で、景色のよい自邸の附近を歩き廻りながら、幼い即興詩を呟き歌つてゐる様な少年であつた。又その頃彼の家庭教師であつた一婦人は（前述の男教師とは別の）後年彼に手紙を書いて「あの時分、あなたは女友達ばかりと遊んで、男の子がお嫌ひでした。」と云つてゐる。シモンズ自身は「自傳」の中で、「併し私は決して Effeminate ではなかつた」と辯解してゐるが、辯解しなければならなかつた程、つまり彼は女性的であつたのだ。

先に私が、青い大きな目をした美しい夢の青年に、十四歳のシモンヅが不思議な愛情を感じたことゝ、ソクラテスのギリシヤ的戀情とを結びつけて語つた時、讀者はある疑問を抱かれたかも知れない。ギリシヤ的戀愛に於ては、パイデイカ（愛されるもの）は、例へばアルキビアデスの如く、そのエラステース（愛するもの）例へばソクラテスよりも、ズツと年少であるのを普通とするのに、シモンヅの場合は夢の青年よりも、彼の方が年少なのだ。その年少の彼の方から愛情を感じてゐるのだ。これはソクラテスなどの一般的な場合とはあべこべではないか。プラトンの對話篇の各所にも說かれてゐる様に、凡そ年少のパイデイカの側から、先づ愛情を感じ初めることは、殆どあり得ないのではないか。

だが、この問題は、シモンヅ自身が女性の立場にあつたといふ上述の事實によつて解くことが出來る。彼の性格は恐らくフェレンツィの所謂 Subject-homo-erotism、もつと普通の言葉を用ひるならば、カール・ハインリッヒ・ウルリッヒスの命名以來一般的に用ゐられてゐる Urning に屬するものであらう。即ちウルリックスの所謂男体女心(anima muliebrio in corpore virili inclusa) の一つの型と考へて差支ないのであらう。それ故にこそ、シモンヅの場合は、普通の如くエラステースとしてではなく、パイデイカの立場から、年長の青年にギリシヤ的戀情を感じ得たのである。

かくの如き私の推察はやゝ性急に見えるかも知れない。讀む人を首肯させるには、「シモンヅ傳」に現はれた材料が余りに乏しいからである。だが、私は「シモンヅ傳」の乏しい材料のみによつて、この推察を組立てたのではない。私にこの小論を思立たせたものは、シモンヅの傳記ではなくて、寧ろ彼自身の諸々の著述であつた。殊に、先に述べた彼のひそかなる限定出版の二小著と、ある心理學者との、これも亦ひそかなる共著などであつた。(「シモンヅ傳」には、これらの著述については、全く記されてゐない。)

さて、私は今、シモンヅの性格をウルニングに屬するものであると云つた。この名稱は、名附け親であつたウルリッヒスの眞摯な態度を知らぬ讀者には、ある不快の感を與へるかも知れない。今日では、ウルニングといふ言葉によつて、我々はともすればベルリンあたりの男娼窟を思ひ起し勝ちだからである。だが、命名者ウルリッヒスは決してさういふ意味にのみ、この言葉を使用したのではない。止み難き願望を内部に藏しながら、外部的には常人と些かも變らぬ生活を營み續ける不幸な人々をも、この名稱の中に含めてゐたことは明かである。シモンヅはさういふ不幸な人々の一人であつた。少くも「シモンヅ傳」に現はれた限りに於ては、彼の外部生活は少しも常道を脱れてはゐなかつた。

彼は二十四歳の折、アルプスへの旅をして、スヰスの山村のさゝやかな旅宿で、同じく旅行中のイギリスのお孃さんに出會つた。そして至極ありふれた戀をして、翌年そのカサリンと呼ぶお孃さんと結婚した。彼等の結婚生活には、外部に現はれる様な何等の破綻もなかつた。夫婦の間には四人の娘さんが生れた。彼は恐らく生涯よき夫でありよき父であつた。

では、彼の幼時の愛は、ギリシヤ的戀愛への憬れは、どこへ行つたのか。彼の異情なる情熱は、結婚と共に消え失せてしまつたのか。イヤ決してさうは考へられない。彼は恐らく闘つたのだ。そして我が心を克服したのだ。彼は内

部の願望をそのまゝ生活上に具体化するには、余りに教養があり過ぎた。世の風習に反抗する程、大膽でも恥知らずでもなかつた。それに、當時のイギリスの國法と社會的風習とは、今日我々が考へ及ばぬ程苛酷であつた。このことは、シモンヅと殆ど同時代の作家オスカア・ワイルドの有名な投獄事件と、その事件による彼の社會的地位の失墜とを思ひ起せば、ほゞその程度を想像することが出來るであらう。ワイルドの投獄は一八九五年の四月であつたから、シモンヅが五十四歳の短生涯を終つた一八九三年からは二年後に當る。ギリシヤ的戀愛に對するキリスト教的憎惡は、時代を遡る程苛酷であつたのだから、(ある時代にはそれは火刑に値する重罪であつた)ワイルドよりも少し早いシモンヅの時代がどんなであつたかは想像出來る。彼はこの異常心理に對する科學的理解の普及を見ずして生涯を終つたのであつた。

併し又、もう一つの見方がある。彼のギリシヤ愛への深き憬れと、現實の結婚生活とは、全く無關係であつたと考へる方が正しいかも知れない。なぜと云つて、彼が遙かに思を寄せたプラトン時代のギリシヤに於ても、結婚とパイデラスティアとは、全く別々のものとして、竝行的に成立し得たからである。古代ギリシヤの思想では、結婚は人間製産の肉体的營みに過ぎず、妻は精神的に夫と對立し得ぬドメスティツクな存在でしかなく、眞の戀愛は專ら年若き同性を對象とした。一つは肉の戀、一つは靈の戀であつた。この二つの愛の兩立の可能は、例へばダンテが妻を娶り四人もの子をなしたにも拘らず、そのことが彼の生涯の靈の戀人ベアトリーチエに對する情熱には、何の妨げともならず、彼に於て結婚と戀愛とは全然別個のものであつた事實によつて、類推し得べきである。

シモンヅは先にも一寸言ひ及んだ The Dantesque and Platonic Ideals of Love と題する著述で、ギリシヤ的男性愛と中世の騎士的戀愛との不思議な類似について論じ、この二つのものを人類史上に燃え出でたる、物狂はしきまでに純粹なる、至高至靈の情火であると做したが、その中に左の一節がある。

「騎士的愛は、全然、結婚とは別物であり、又非婚姻的なものであつた。騎士が敬慕し奉仕した女性、そしてその奉仕を受け入れその献身に酬ひる所の女性は、決してその騎士の妻たる事は出來なかつた。その女性が處女であらうと旣婚の婦人であらうと問ふ所ではなかつた。（中略）愛に關する封建裁判所は『旣婚者同志の間では、愛はその能力を働かすを得ず』と宣言した。之は十分注目に値する特異點である。この言葉こそ、ダンテがベアトリーチエと結婚しなかつた理由について時々發せられる愚問に對して、直ちに且決定的に解決を與へるばかりでなく、又古代ギリシヤの騎士的愛と中世人のそれとの間に於ける最も著しい類似點を構成する事にもなる。プラトーがシンポジアムに於て論じて、自分の言ふ所の高揚せられたる愛といふのは、結婚といふ『野卑にして凡俗な』方法には何等の關係もないと主張してゐるのは記憶すべき言葉である。かゝる愛は夫婦的關係が絶体に不可能な間柄の人によつて起されなければならない。それは精神の一狀態であつて情慾ではない。そして人性の薄弱さが場合には愛人同志を肉慾に導く事はあり得るが、かゝる缺點は明かに理想から外れてゐるものである。この愛は、國家に對して利益があり、社會に對しても有用である結婚や、子供の出產、養育、家庭上の用務、日常の事務の平凡さなどを包含してゐる所の婚姻關係とは、最も關係の薄いものである。兎に角、理論上では、ギリシヤ及び中世の型の騎士道的感情は、共に純粋な且つ靈的な熱情であつて、愛人の靈からあらゆる卑しい思想を除き、肉の拘束を超越せしめ、永久の陶醉を以て彼の心を滿すが如きものであつた。（田部重治氏譯文による）

斯樣に、現實の結婚生活と精神上のギリシヤ的戀愛とは、全く無關係に兩立し得ることを、シモンヅ自身が說いてゐる以上、我々は、彼のギリシヤ愛への憬れと、彼の結婚生活とをも、同じ樣に、竝行無關係の事柄と解し、彼の情熱は決して結婚によつて消え去つたものでないと考へることが出來るのである。

では、その結婚によつて妨げられる事のなかつた、彼の靈の憬れは、シモンヅの生涯にどんな形を取つて現はれた

か。彼のベアトリーチェ、いやヘルメスは一体何人であつたか。時と所とを隔てたシモンヅの生活を知る爲には、我々は傳記の外に頼るべきものを持たぬのだが、その傳記は、彼のヘルメスについては全く無言である。

それ故今は左様な現實の問題を別にして、この記述を進める外はないのだけれど、シモンヅの性格は、ワイルドのそれとは全く違つてゐたこと丈けは間違ひない。恐らく彼は、現實のエラステースなりパイデイカなりと結びつくのには、世間に對して、その相手に對して、いや何よりも彼自身に對して、餘りにも臆病で潔癖だつたのではないかと思はれる。

では彼は、あの情熱のはけ口をどこに求めたのか。私が思ふのに、彼の生涯の事業こそ、そのはけ口であつた。あの夥しい著述の全体が、謂はゞ彼のヘルメスであつた。意識的にせよ無意識的にせよ、反社會的願望についての苦悶、闘爭、そして昇華。如何にもこの精神分析學上の言葉は彼の場合に適切であつた。

私は如何なる論據によつて、斯様な斷定を下し得たのか。それを明かにする爲には、彼の生涯の全著作を見なければならぬ。それらの著作に殆ど例外なく染めつけられてゐる一つの色彩を見分けなければならぬ。だが、この小論にとつて、それらの夥しい著書の一々について、詳細なる吟味を行ふことは、必ずしも必要ではないし、又、私がシモンヅに興味を覺え初めたのが最近の事に屬する爲、彼の全著作を蒐集するまでに到つてゐないので、こゝには、私が今日までに讀み得た五六種の著述と、他人の著書の引用などから想像し得るものについて、私の考を記すに止める外はない。殊に、この小論を輕々しく書き初めて、今更ら遺憾に思ふことは、私が彼の詩集を一冊も所持しないことだ。詩の上にこそ、彼の生得の憬れは、最も力強く現はれてゐるに違ひないのだが、今の所私は、他人の著書に引用された幾つかの詩を除いては、それについて全く無智であることを告白しなければならぬ。シモンヅの詩作とギリシヤ的戀愛との關係についての私の感想は、しばらく他日の機會に讓る外はない。（尤も彼の詩は、第一流のものとして認

められてゐる譯ではない。十九世紀英詩集といふ樣な書物にも彼の名は見當らぬ。シモンヅの英文學史上の地位は、全く文學美術の史的研究の業績によるものである。併し、それにも拘らず、私の小論にとつては、假令第二流であつても、彼の作詩は重大な役割を持つてゐるのだが。）

シモンヅの代表的なる二つの著述、Renaissance in Italy と Studies of the Greek Poets とは、夫々第一卷の第一版が出版された時期は、たつた二年の隔りしかなく、前者は一八七五年、後者は一八七三年であつたけれど、著者の心の中で興味が熟して行つた順序は、無論「ギリシヤ詩人」の方が先であつて、シモンヅのギリシヤ文學への傾倒は、大學時代、ジョウエット教授（プラトン、アリストテレスなどの英譯者として著名なベンジャミン・ジョウエットである。ヲーター・ペーターもこの人の敎へを受けた。そして彼も亦、シモンヅより更らに一層不鮮明にではあるが、ギリシヤ的戀愛の讚美者であつた。私はこの二人の特異なる人物の共通の師であるジョウエットその人に、ある興味を持つものである。）からギリシヤ古典を學んでゐた時代、いやそれよりもつと早く、十九歲の折初めて「パイドロス」と「シンポジオン」を讀んで感激した時、更らに遡つては、少年時代「イリアス」に涙を流した時に、胚胎してゐるのだと考へることが出來る

ヘレニズムといふ言葉の內には、實に樣々の要素が含まれてゐるのだが、ギリシヤ的男性愛の理想も亦その一つであつて、之を無視してはヘラスの道德も哲學も宗敎をさへも、正しく理解することは出來ないであらう。それは例へば、あの美しいギリシヤの神々の彫像を思ひ浮べることによつてでも、容易に察し得るのである。ヘラスの名工達は、神々を、純白の大理石上に美しい人間の姿として刻み出した。人々は人間美の極限を示すそれらの彫像を、そのまゝ神として信仰した。美を憬れることの深かつた古代ギリシヤの市民達は、彼等の戀人を理想化したるが如き、美しき人間神の前に、忘我の情熱を以て拜跪した。我々は今に殘るそれらの神々の彫像を、寫眞版によつて見ることが出來

るのだが、女性神として著しいアフロディテを除いては、殆ど青年神ばかりと云つても差支ない程、神々は美しい若者の姿に刻まれてゐる。しかも、それらの青年神は、ふと見れば女性ではないかと思はれる程、しなやかな四股と、滑かな肌を持つてゐる。例へばヴチカノ博物館に保存されるアポロン神を見るがよい。或はオリンピアのミュジアムにあるプラキシテレス作のヘルメス神を、又大英博物館所藏のディオニュソス神と葡萄の精との像を見るがよい。更らにルーヴル博物館のディオニュソス像に至つては、ヘルマフロディテ以上の、驚嘆すべき女性化である。かくの如き若き男性神の女性化は何を語るものであるか。當時の人々のギリシヤ的男性愛への憬れと結びつける外には、解くすべのない謎ではないか。この意味で、古代ギリシヤの同性戀愛の思想は、宗教上の信仰にまで喰ひ入つてゐたと云ふことが出來るのだ。(同性戀愛と結びつけたギリシヤ神話の數々には、こゝでは觸れないとしても)

その樣な古代ギリシヤであつたから、當時の哲學者も、悲劇詩人も、喜劇詩人も、敍事詩人も、抒情詩人も、その作品にギリシヤ的戀愛を取入れてゐないものは殆どないのであつて、そのギリシヤ詩人達がシモンヅの史的研究の第一着手として選ばれたことは、偶然でない樣に思はれる。

「ギリシヤ詩人の研究」二卷は、それらの詩人と作品とを漏れなく記述し批判した大著であるが、比較的若い時の作品であつた丈けに、彼の著作中最もスタイルに苦心の拂はれたもので、研究と云はんよりは、寧ろヘレニズム讃美の尨大なる散文詩と云つた方が當つてゐる程、美と感激とに滿ちてゐる。ラフカディオ・ヘルンは「英文學史講義」で、サッフォ論の結びが最も美しいと云つてゐるが、殊に第二十四章に當る「ギリシヤ美術の天才」の一章の如きは、全文朗々誦すべき散文詩であつて、ハウプトマンの「ギリシヤの春」などを思ひ出させる名文である。余事はさて置き、シモンヅのこの著述は、併し、無論ギリシヤ愛の研究ではないのだから、この書のみを一讀して、直ちにそれと語り得る程、あらはな記述には乏しいけれど、よく吟味すれば、卷中到る所に、彼の同性戀愛への關心を指摘する事

が出來る。中にも第三章に當るアキレウス論の後半には、他の部分に比して、甚だ大膽な論述があつて、この部分に彼のギリシヤ的戀愛觀が集中壓縮されてゐるかに感じられる。

「イリアス」の中の美しき勇士アキレウスと、その戰友パトロクロスとの、並々ならぬ友情の物語は、誰も知る所であるが、シモンヅはこれを、彼の所謂ギリシヤ的騎士愛（Hellenic chivalry）の代表的なるものとして、同性戀愛に結びつけて考へてゐる。

「アキリーズの名はギリシヤ人達の間に、パツショネイトな友情を云ひ現はす名稱として長く記憶された。ずつと後期のギリシヤの詩の中でさへ、一對の精神的な男友を呼ぶには、「アキリーズ的」といふ言葉が最もふさはしかつた。史上に著名なるギリシヤ人達が陷つた、この情熱のいまはしき濫用についでは、こゝに觸れることを避けるが、後世の多くの人々が夫々の勝手な考へ方感じ方で、ホーマーを解釋したからと云つて、アキリーズとパトロクルスとが、左樣な陋習を身を以て奬勵したとの汚名を着る謂れは少しもない。」

この文章によつても、シモンヅがギリシヤ的戀愛を、精神的にのみ考へてゐたことが分る。

彼は同じ場所で、アキレウスのギリシヤ的騎士愛に關聯して中世のキリスト敎的騎士道に言及し、兩者の相似を論じてゐる。これは後年、先に述べた「ダンテとプラトーとの愛の理想」といふやゝ長い論文となつて現はれたものと同じ論旨であつて、その萠芽或は筋書きとも云ふべきものであるが、シモンヅ自身が「世のギリシヤ史家達は、武人の友愛がギリシヤ國民に及ぼした影響と、女性の靈的崇拜が中世歐洲諸國の騎士道に及ぼした夫れとは、同じ性質のものであることを閑却してゐる」と云つてゐる樣に、これは彼の創見であつて、一度「ギリシヤ詩人の研究」に發表した論旨を、更らに敷衍して世に問ふたのを以て見ても、彼が如何にこの事に（それはつまり、ギリシヤ愛の價値づけに外ならぬのだが）深き關心を持つてゐたかを語るものである。（未完）

戀愛に於ける救助願望の研究

大槻憲二

一、救助文學の實例

その實例が甚だ數多く、從つて最も人目に立易い筈の現象でありながら、我々の見遁して來た一つの事實は（少くとも只今の場合に於いては、文學上の事實は）、身投救助（又は一般に困難な狀態からの救助）と戀愛の成立との間に必然的な關係が存在してゐることである。まづ、その實例から擧げて見よう。左に揭げる數個の實例は、筆者が只今匆卒の間に想起したものに過ぎない。他になほ幾多の實例のある事は勿論である。

一、『八幡祭小望月賑』（はちまんまつりよみやのにぎはひ）

これは萬延元年河竹默阿彌が書下したもので、最近中村吉右衛門が大阪中座で主人公縮屋新助に扮して演じた。この新助は赤間源左衛門と云ふ惡侍に喧嘩を吹掛けられて困つてゐるところを深川藝者お美代の挨拶で救はれる。ところが源左衛門は豫々お美代に戀慕してゐたので、これをいゝ機會にお美代に口說きかゝる。ところが、お美代には穗積新三郎と云ふ情人があつたので、いゝ加減にあしらつてゐたが、遂に腕に彫つた『新』の字を見付けられて、これ

は何と云ふ男の頭文字かと執念く尋ねられる。そこで新助はその男は自分だと名乘り出て、お美代をその場から救つてやる。ところが、その明る日、祭りの人出で稻瀨川の橋の欄干が壞れ、多勢の人が川に落ちた。その内に混つて危く溺れさうになつたお美代が、偶然にも川に舟を出してゐた新助に救はれる。お美代は昨日のみか今日も又、二度までも救はれたのを深く謝し、新助は重なる奇緣を喜ぶうち、狹い舟の中の語らひに新助は遂に包みきれず、慕る戀心を打明ける。

二、『太陽は東より。』

これは先頃早川雪洲と田中絹代との共演するところの映畫劇である。今度も『八幡祭』の主人公と偶然ながら同名の女主人公『美代子』が水を見て今にも飛込みさうになつたのを、男主人公健二は、あわを喰つて飛んで行つて美代子の身体を押へ付けて救つた。さうしてその後、或る嫌疑で刑事に引立てられようとしてゐる美代子の事を健二はまた『こいつは私の女房でさあ』と、實に新助と同じやうなことを云つて、彼女を救ふ。さうしてやがて健二は『おれはお前を愛してゐるんだ』と氣まり惡さうに云つて、その後は馬鹿野郞でごまかすのであつた。原作者は何人であつたか、私は只今記憶してゐない。

三、『上陸第一歩』

これは御馴染のトーキー映畫劇、原作は北村小松、岡讓二、水谷八重子共演。船から上つた火夫の坂田は霧の船着場にしよんぼり立つてゐる女を見たが、別に氣にもとめず煙草の火をつけようとした時、突然ドブンと云ふ水音。さてはと早速驅付け、漸く救上げて介抱する。さうして二人はやがて愛し合ふやうになる。この作は併し、スタンバーク原作『紐育の波止場』の飜案であるらしいとの評判であるが、原作に於いてもやはり、戀愛成立の契機は身投救助であると云ふことだ。筆者はこの作は見なかつた。

四、『俺は水兵』

原作は中野實。一昨年十一月中淺草松竹座で上演したレヸウ脚本。全部七景から成立つてゐるが、第六景は『或る日の外出』と題せられてゐて、その場面で喜多四等水兵が、誤つて水に陷つた令嬢を救ふ。それがやがて上官の令嬢であると分り、令孃を妻に貰ふと共に自分は大いに出世すると夢見るところがその次に場面になつてゐる。

五、『刺靑奇偶（いれずみちゃうはん）』

原作は長谷川伸。去年六月中の歌舞伎座の第一部興業の出し物であつたことは人々の記憶に新たなところである。主人公手取の半太郎は、女衒金八に買はれて連れて行かれることになつてゐた酌婦お仲が下總行德の船場で身投げしたのを（丁度、『上陸第一歩』の女主人公港の女さとがブルヂョアの政に上海へ賣られようとして波止場から身投げしたのと同じやうに）救ひ上げ、そこで二人の間に戀愛が成立するのであるが、『酌婦お仲』と『港の女さと』との男性觀が誠に申合せたやうに同じなのは、不思議であるが面白い。お仲はおさとゝ共に、救ひ上げてくれた男に對して始めの程はふくれ面を見せてゐる。お仲はなか〳〵名文句を吐く。

『男つて云ふものは、馬鹿にしろ、悧巧にしろ、恩を被せた女に對しては覘うところはたつた一つさ。どうせお前もさう云ふ男の一人だらうから、これからお前の家へ行つてお酌の一つも恩返しにしてあげようよ』と云ふ意味の事を云ふ。半太郎は『野郎片なしだなア』と云ひつゝ、女に金をくれてそのまゝ立去らうとする。女は不思議に思つて、お前は妾に何も求めないのかと云ふと、俺を世の中の下らぬ男どもと一緒にするなと捨臺詞を殘して立去る。『上陸第一歩』のおさとに對する坂田の態度も正にこの通りで、これに依つて女は『妾これまであんたみたいな男見たことないわ』と來るのである。慥に二人は普通の男よりは女の心理を呑込んでゐる點で頭がいゝが、併し半太郎の場合は、女に先手を打たれて照れたやうな感じさへしないではなかつた。

とにかく救助が大きな契機となつて二人の間に戀愛が成立したことに變りはなかつた。この外にも文學に於いて身投救助が戀愛成立の契機となつてゐる實例は數多いことであるが、これを世界的に統計をとつて見たら面白い結果を生ずるであらうと信ずる。これは併し、文學に於いてばかりでなく、現實生活に於いても、幾多の實例を發見する。私の知つてゐる限りにでも二三はあるが、只今は姑く文學に眼界を限定しておくことにする。

二、フロイドの救助空想論

さて戀愛成立の契機として何故にかくも身投救助——又は廣く一般に救助——と云ふことが存在するのであるか。さうしてそれを文學上でもこのやうに使ひ古るして來た筋書を現代の新人を以て自任する人達までが襲用して疑ひもしなければ、きまり惡くも思はないのであらうか。我々はその心理的起源を研究して見なければならない。そこに何か無意識的に特別な意義が存するに相違ないことは、何人も直ちに首肯せざるを得ないところであらう。ところがこゝにフロイドは、この問題に聯關して甚だ暗示的なことを云つてゐる。で、私はこれからフロイドの意見を紹介しつゝ多少の私見を加へて見たいと思ふ。

フロイドはその戀愛心理論の中で、母に對する幼兒的定着を持つた人間の戀愛を『觀察してゐて、そこに現れる傾向に最も驚かされるのは、彼等が愛人を「救はう」とすることである。自分がなくては愛人は困るのだ。愛人は道德的支持を失ふのだ。さうして甚だ困つた低位置に墮落するのだとその男は信じ切つてゐるのだ。このやうに、その男は女から離れないことに依つて相手を救ふのである。この救助の意圖は愛人の不貞や社會的危殆に瀕してゐる地位などを指摘することに依つて正當の役目を果すこともあるが、さう云ふ現實上の憑所のない場合にも、やはり同樣歷然と現れるのである。』と。

かう云ふ心理は實際、我々が現實の人間の內に屢々目擊するところで、何人もがかう云はれると多少は自他に於いて思ひ當るに相違ないのである。小島政二郞の『海燕』などにも、慥にこの救助コムプレクスの表れてゐたことを私は觀取した。私はこの點に於いては、フロイドの意見に加へるべき何ものをも持たないのである。右は救助と戀愛との心理的關係に於ける第一の要素である。

では、何故に自分の救助がなければ低位置に墮落するものに對して母コムプレクスを起すかと云ふことが、人々の疑問となつて來なければならない。換言すれば、我々は一度母を娼婦として認めたことがあるか、或は母に於いて娼婦たらんとするの危機を認めたことがあるかと云ふことが問題となるのだ。即ち母と娼婦との關係が第二の要素である。それに就いてフロイドはかう云つてゐる。

『選ばれたる對象に娼婦性があると云ふこと、こいつはどうも母コムプレクスからは何としても說明がつきさうもないやうに思はれる。成人の意識的思想にとつては、母は道德的に純潔無垢な人格と思はれる。で、もし外部からこの母の特質に對する疑ひが來れば非常に打擊を受けるし、內部からこの疑ひが來れば甚だ惱みを感ずるし、その效果に於いて變りはない。「母」と「娼婦」との間はこのやうに、截然たる相反のあるものであるから、我々は却つてこれ等二つのコムプレクスの發達史と、その無意識的關係とを調べたくなつて來るのである。ところで我々は、意識に於いては二つの相反となつてゐるものが、無意識に於いては屢々一つになつてゐることを既に久しい以前から知つてゐるのである。調べてゐる內に、我々はやがて或る時期を、即ち男兒が始めて成人間の性關係を十分に知悉する時期、つまり思春前期を問題とするやうになる。その時期に於いて男兒は隨分露骨な、成人の權威を引下すやうな話を聽いて始めて性生活の秘密を知るのである。さうして性活動の實際を知つた上は、成人の權威も彼等にとつては打壞されるのである。この時期の人々に於いて、新に知る者に最も強い印象を與へるのは、彼等自身の兩親に對する性活動の

關係である。この關係を、聽く者は直ちに否定するのが屢々であるが、これを言葉にして見れば次のやうになる。——君の兩親や他の人々は成程さう云ふことをやるかも知れないが、併し私の兩親に限つてそんなことはしない。

『性の話を聽く時に必ず缺けない景物として男兒等は、或る種の女（性行爲を商賣的になし、そのために一般から輕蔑される女）の存在を同時に知るのである。彼等にとつてはこの輕蔑は思ひも寄らぬことでなければならない。彼等は、これまでたゞ「大人」のみのすることゝ思つて來た性生活の中に自分も亦その女に依つて導入せられるのだと知るや否や、この種の女に對して憧憬と恐怖との混合した感じを抱くだけである。やがて一般の人々は醜い性生活をするが、自分の兩親だけは例外だらうとの考へが支持しきれなくなつて來ると、彼はこれを皮肉に是正しつゝかう云ふのである、母と淫婦との間の區別はさう大したことではなく、根抵に於いては同じやうなことをするのだと——。成人の性生活を說明せられて見ると、成程、早期幼年時代の事が思ひ當り、またその願望が眼覺めて來て、そこから或る感情が再び彼の內に活動を開始するのである。彼は新たに獲得した意味に於いて母の愛を求めるのである。（中略）心理の發達にこのやうな部分のある事を知つた以上は、愛人に娼婦性を求めることの條件が、母コムプレクスから來てゐると云つても、敢へて矛盾してゐるとも不思議とも考へられないのである。』と。

またフロイドはかゝる救助空想の內には、第三要素として幼兒的な、恩返しと云ふ無意識的意義も存在してゐると論じてゐる。即ち、

「かゝる空想が現實にのさばり出て來て戀愛生活を支配するやうになるのであつて、かゝる空想は愛人救助の傾向と、緊密ならぬ、表面的な、意識的に拵え上げられ得る關係の內に立つてゐるに過ぎないやうに見える。愛人（女）は不確實と不義との傾向があつて、そのために危險に瀕するのである。そこで戀愛者（男）が彼女の婦德を監視し、その惡傾向を防ぐことに依つて彼女をこの危險から守護するために骨折ることは理解される。併し人間の隱蔽記憶、

空想、夜の夢などを研究して見ると、右に述べたやうな解釋は、無意識の動機を非常に巧みに「理窟づけ」してゐるものであることが分るのである。丁度、夢に於いて甚だ巧みになされてゐる第二次仕上げと同日に論ずべきものであることが、分るのである。實際に於いて、この救助動機なるものは、それ自身の意義と歴史とを持つてをり、また母コムプレクス(更に正しく云ふならば、兩親コムプレクス)の獨自の派生であるのだ。子供が自分の生命は母に負ふものであり、母が「生命を與へた」のであると聽かされると、母に對する感傷的な心持と、大人になりたい、一人前になりたいとの心持とが彼等に於いて一つになり、その結果、兩親にこの與へられたものを返禮したい、同じやうなものを以て報いたいとの願望が起つて來るのである。(中略)母は子供に生命を與へたのである。この獨特な贈り物をそれに等價の何物かを以て辨償すると云ふことは容易でない。無意識に於いては意味の變化と云ふことは容易に行はれるが、それほど意味の變化の多くない場合には、母の救助と云ふことはかう云ふ意味を持つ、即ちお母さんに子供を一人差上げよう、勿論自分に似た子供を……と。これは救助の本來の意味から離反してゐることが餘り甚し過ぎてゐるやうだが、さうでない。意味の變化があまり出鱈目のやうだが、さうでない。母は彼に一つの生命を、自分自身の生命を贈與したのだ。で、彼は母に對してその代りに一つの他の生命を、自分自身と酷似した一人の子供の生命を贈與する。息子は母に依つて一人の息子を、自分自身に似た子供を、持たうと願ふことに依つて、自分の感謝を證明するのである。つまり、救助空想に於いて彼は自分自身を完全に父と同一化するのである。感傷、感謝、淫蕩、剛情、自主など一切の諸衝動は、彼自身の父となることとの願望に依つて滿足させられる。また危險の契機は、意味の變化した場合にも失くなつてはゐない。分娩行爲それ自身は、彼が母の努力に依つて救はれた危險そのものに外ならない。出産はこのやうに、人生の一切の危險の最後のものであり、その後一切の危險にして我々が恐怖を感ずるものゝ原型であつて、出産の經驗あればこそ、我々が恐怖と名付ける感動は殘されてゐるらしいのである。』と。

第四に、入水と云ふ契機に就いて、フロイドの意見を聽いて見ると、『夢や空想に於ける救助のこれ等さまぐ〵の意義が水と關係を保つてゐる場合には、殊に判然と認識される。男が女を水中から救つたとすれば、それは彼が彼女を母にしたと云ふ事である。これは右に論じて來たところに從へば、それは彼は彼女を彼の母にしたと云ふ事と、内容に於いて同じである。女が他人（子供）を水中から救つたとすれば、それはモーゼ傳說に於ける王女と同じやうに、彼女が自分をその子供の母として、つまりその子を自分が生んだと云ふ事を認めるのである。』と。

この邊の論はまたわが桃太郎傳說にもあてはまり、爺と婆とは事實上桃太郎の兩親であることを意味してゐる。英雄誕生の傳說には殆ど常にこの形式が用ゐられてゐる。淺草寺の一寸八分の觀音樣は、やはり隅田川から救ひ上げられたと云ふことになつてゐる如き、その一例に過ぎないが……。水からの救助が出產を意味すると共に、投身が屢々再生を意味することは、私が嘗て生田春月の入水の分析解釋を彼の作品を證據として論じたことを想起して見たゞけでも、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらうから、只今はこれ以上繰返さないことにする。

三、長谷川伸の分析解釋

右に紹介して來たフロイドの意見は、精神分析に相當造詣ある人でなければ、或は正當な理解をこれに期待し難いかも知れないから、私は次に、論を具体的にするために、先に擧げた長谷川伸の『刺青奇隅』を分析解釋して見ることに依つて、この缺を補はう。併し一人の作品を分析解釋することは、理想的なことを云へば、その人の全作品と全生涯と全心理とを知ることを要件とする。併しそんな大層なことは只今はしてはゐられないから、まづ私の見た範圍内で、氏の『瞼の母』と今度の作とを對象として論じて見る。

有体に云へば、『瞼の母』と『刺青奇偶』とは、實質上同じ内容から成る作品である。即ちその根幹をなすものは、失はれたる母への感傷的（幼兒的）憧憬である。

主人公手取の半太郎が下總行德の船場で、柱に凭れて海の彼方をヂッと見遣つてゐる時、彼はその『瞼』の裡に浮んで來る故鄕をなつかしんでゐるのである。瞼の故鄕をなつかしんでゐるのである。何故に彼がこの行德に居を定めたかと云へば、彼は兇狀持の身として追はれた故鄕の江戸をなつかしむのあまり、江戸の風の直接に當つて來るこの地を喜んだからと述懷してゐる。且つその故鄕には常に彼の身を案じてゐる母のお作もゐるのだ。彼にとつては母と故鄕とは同一化されてゐる。

彼は既に母代償としての妻を求めんとする素地が具はつてゐたのだ。その時、彼は偶然に酌婦お仲をその投身から救つた。フロイドの口吻を用ふれば、これに依つて彼はお仲を『母にした』のである。彼が彼女の或る一點を、世の多くの男たちのやうに覘はなかつたのは、お仲に先手を打たれて照れくさくなつたと云ふ皮肉な解釋があまりに皮肉に過ぎるとすれば、母代償に對する無意識的な敬意からであらう。自分が生命を救ひ與へた女に對して感傷的な心持を抱くことは、恐らく何人もの常であつて、これに對して露骨な要求を持出すことは人々の忍びないところであるに相違ない。私もその感情への移入は容易に出來るやうに思ふ。（フロイドに云はせれば、これが母代償への感傷であるに外ならないのである。）

お仲が半太郎にとつて母代償であることの一つの證據は、彼女の存在が彼にとつて漸次に神聖なものとなり、良心の根元となり、即ち精神分析的に云へば轉嫁せられたる『超自我』となつてゐることである。彼にとつては母が抑々超自我の根元であつたのだ。それ故に、お仲が母代償として、超自我の根元となることは、甚だ容易であると共に、自然でもある。お仲の存在が半太郎にとつて超自我（俗に云へば良心）の根元となつてゐるこの證據は、彼女にサイ

コロを刺靑された腕の個所が、彼が彼女を幸福にしてやりたいばかりに賭搏をする時に（このサイコロを私だと思つて賭搏をしたくなつた時にこれを見てくれと云つて誡める意味で泣く〳〵彼女が刺靑してくれたサイコロであるから）、うづき出すことに於いて認められる。彼は恐らく、これが彼女を喜ばせるためにとり得る、彼は許されたる唯一の方法であるとの道德的是認がなかつたならば、この腕の個所の痛みのために、賭搏をなし得なかつたに相違ない。彼は腕の相當個所を掌で輕く優しく叩きつゝ、彼女自身に云ふやうに獨語するのであつた。『あゝよし〳〵、分つたよ〳〵。併しもうこれきりだ。これきりだから堪辨してくれ。もう決してしないから……………。』と。

かく云ふことに依つて腕の刺靑された個所はその痛みを鎭め去る。このやうな神經病理的現象は、甚だ我々學徒にまで當然であると思はれるが、一般觀客にも自然であると見えて、何人も笑ひはしなかつた。極めて靜肅にこの場面の進展を見守つてゐたのを、私は興味深く觀察してゐた。

或る意味では摺れつからしの、惡黨の、手に負へない人間の最後に殘つた純情と純情との結ばれを主題にすることは、『モロツコ』や、『巴里の屋根の下』や、『太陽は東より』や、『上陸第一歩』などゝ共に長谷川伸の諸作も、現下の流行に竿さすものであるかも知れない。何れにもせよ、それ等淪落、墮落の人間の救助と云ふことゝ戀愛と云ふことゝが、かくも一般的な必然的な聯關を持つてゐると云ふことは、そこに無意識的心理生活に於いて重大な意義がないとは云ひ去れないのである。

四、悲戀愛的の身投救助文學

私はさきに『文學上でもこのやうに使ひ古るして來た筋書を、現代の新人を以て自任する人々までが襲用して、疑

ひもしなければ、きまり悪くも思はない』ことを不思議だと云ふ口吻を示したが、實は不思議ではなく、甚だ自然だと思つてゐるのである。それは人類の深い無意識心理のなす普遍的象徴としての意義と價値とがあるからである。

併し投身には常に必ず先に云つたやうな『出產』や『再生』の象徵的意義があると云ふわけではなからうし、救助精神にも常に必ず母コムプレクスが存すると云ふわけでもなからう。少くとも無意識心理現象として見られ得る限りに於いて精神分析は論ずるので、もし無意識心理現象の全然參與しない心理現象がありとすれば（それは理論上、全くないとは云へない）、精神分析はその主張權を勿論撤回するのである。

凡そ人間の日常行爲は無意識心理と意識心理との交錯混淆に非ざるはない。夜の夢の中にも意識が浸潤してゐないとは云へない如く、日常生活の中にも（理論上はともかくもとして事實上）全然無意識心理の浸潤してゐない行爲は考へ難い。併し無意識心理の浸潤程度の濃淡が、時と場合と人とに依つて等差あるべきことは考へられる。その意味に於いて菊地寛の短篇小說『身投救助業』は、只今の我々の問題にまで、多少興味ある材料を提供してゐる。この小說の筋はかうである。

京都に疏水が出來て琵琶湖の水を引いて來るやうになつてから、今まで京都人には缺けてゐた誠に好適な身投場所が出來た。それは『武德殿のつい近くにある淋しい木造の橋である。』……所が、この橋から四五間位の下流に、疏水に沿うて一軒の小屋がある。そして橋から誰かゞ身を投げると、必ず此家から極まつて背の低い老婆が飛び出して來る。……老婆は必ず長い竿を持つて居る。そしてその竿をうめき聲を目當に突き出すのである。多くは手答へがある。……それを手繰り寄せる頃には、三丁ばかりの交番へ使ひに行く位の厚意のある男が、屹度彌次馬の中に交つてゐる。……かうして人命を助けた場合には、一月位經つて政府から褒狀に添へて一圓五十錢位の賞金が下つた。老婆は之を受け取ると、先ず神棚に供へて手を、二三度たゝいた後郵便局へ預けに行く。……老婆は死んだ夫の殘した娘と二人

で暮して來た。……老婆は遠縁の親類の二男が徴兵から歸つたら、養子に貰つて（賞金で出來た）貯金の三百幾圓を資本として店を大きくする筈であつた。これが老婆の望みであり、樂しみであつた。……所が、娘は母の望みを見事に裏切つてしまつた。彼女は……嵐扇太郎と云ふ旅役者とありふれた關係に陷ちてゐた。扇太郎は巧みに娘を唆かし、母の貯金の通帳を持ち出させて、郵便局から金を引き出し、娘を連れたまゝ何處ともなく逃げてしまつたのである。

『老婆には驚愕と絶望との外、何も残つて居なかつた。たゞ店にある五圓にも足りない商品と、少しの衣類としかなかつた。……彼女には何の望みもなかつた。……彼女にはもう生きて行く力がなくなつてゐた。彼女は死を考へた。幾晩も幾晩も考へた末に、身を投げようと決心した。そして堪へ難い絶望の思ひを逃れ、一には娘へのみせしめにしようと思つた。身投げの場所は住み馴れた近くの橋を選んだ。彼所から投身すれば、もう誰も邪魔する人はなからうと老婆は考へたのである。』

かくして彼女は投身したが、幸か不幸か救はれた。併し彼女は恥しいやうな憤ろしいやうな、名狀しがたい不愉快さを以て、自分を助けてくれた四十男を睨んだ。『いゝ心持に寝入らうとするのを、叩き起されたやうなむしやくしやした、烈しい怒が、老婆の胸の裡に充ちてゐた。……と云ふのである。

御覽の通り、こゝでは現實が皮肉な顔を露骨に示してゐて、フロイドの云ふ如き『救助空想』は殆んど影をひそめてゐるやうである。少くとも作者はさう云ふ自然主義的な眼でこの事實を見、且つこの作品を書いてゐる。

併し『……水が綺麗である。それに兩岸に柳が植えられて、夜は蒼いガスの光が煙つてゐる。先斗町あたりの絃歌の聲が鴨川を渡つて聞えて來る。後には東山が靜かに横はつて居る。雨の降つた晩などは兩岸の青や紅の灯が水に映る。自殺者の心にこの美しい夜の堀割の景色が一種のロマンスを惹き起して、死ぬのがあまり恐ろしいと思はれぬやうになり、ノフラノ〳〵と飛び込んでしまふ事が多かつた。』と云つてゐるところを見ると、やはりそこに一種の無意識的

空想が働いて自殺者の行動を助長するものであることは認めてゐるのである。また、救助者（老婆）の方にしても、よしんば意識面からすれば、その救助が既に營業化して了つてゐるにもせよ、なほ無意識面からすれば何か別のものゝ存することは明かであると見え、『助けてやつた人達があまり老婆に禮を云はない事』の不滿を洩してゐる。また老婆自身を救つた四十男の言葉の中にも『人の命を救つた自慢が、ありありと溢れてゐた』ところを見ると、救助には意識心理からばかりでは說明し盡すことの出來ない何物かの介在を、作者もまた當然認めてゐるものと解せねばならない。さうしてその『何物か』の何物であるかは、私がフロイドと共に論じて來た右の所說に就いて明かであらうと信ずる。（此項完）

フロイトかフロイドか

岩波の『哲學辭典』には、Freud をフロイトと假名書きしてある。從來フロイドと一般に書き慣はして來たものを岩波の辭典でかうしたに就いては相當の根據があるのであらうが、私は自分の考へで、やはりフロイドとした方がよいと考へてゐたので、哲學辭典のやり方には從はないで來た。私はかう云ふ事は、學界の約束であるのだから學界一般がさうした方がよいと云ふなら、さうすることを辭さない。敢て異を樹てゝ高しとはせぬ。また他人にもさう云ふ事で異を樹てゝ貰ひたくない。元來dは有聲子音であるから、次に母音の有無を問はず濁音として表はすのが當然である。併しndはどうかと云ふ人があるかも知れない。これは成程ウントと書き慣はしてゐるが、これはnのンが子音だけに瞬間的に有聲でなくなる音だから次のdの方にもその有聲の響が及ばなくなるのだ。從つてウントと呼ぶ方が呼び易いことになる。併しFreudの場合にはdの前が母音だから瞬間的に死なゝい。從つてdが有聲としての本來の力を保存する可能性が多い。或る有識のドイツ人に聽いて見たが、やはりフロイトと書くのはコーミッシュだと云つた。どうせ日本の假名で外國音を表はすのは無理なのだ。どうせ無理だとすれば不必要に習慣に逆つたり異を樹てるのはよくない。且つドとしておけば、原字がtでなくdであることが分るだけでも便利であると思ふ。（大槻）

排泄物心醉と其の心理的起源

長崎文治

原始未開の時代には、人体の總ての部分からの發出物が神秘的な力を具有して居ると考へられてゐた。從つて其れ等のものは原始的な崇拜の對象となつて、その時代の人々の行動に多大な影響を及ぼしてゐたものと考へられる。夫れは現今尚ほ殘存してゐる神話や傳說や、又は民間の風習として迷信的に信ぜられてゐるところの巫術的様式や、宗敎的儀禮の中にも見出される。身体の發出物と云へば、吾々には不潔とか汚穢のものとしての感情を惹起させるし、又其れが、信仰の對象として聖化されるといふ事は想像もつかぬところである。が、併し乍ら、事實に於て其れ等の發出物は、最も原始的な形態にあつては然かく嫌忌さるべき性質を附與されてゐたのではなく、却つて親愛の感情を伴つて、諸多の用に供されてゐたと見做し得る。之れは、これから述べて行く排泄物に就ての觀察に依つてその一端を明らかにする事が出來る。

一、尿心醉の風習

尿と水とは元來原始的の信念に於いては同一のものと考へられてゐた。自然の水に於ける生產物の色彩は、創造神話とか、洪水神話の中に觀られる所であり、從つて、宇宙觀、人生觀等も、その原始の形に於ては水と關係してゐるものが多い。希臘哲學の鼻祖タレス Thales（B.C.600頃）は、宇宙の原質は水であると云ふ學說を、深い思索の上に立て、印度の五大說、支那の五行說も宇宙形成の要素として水に一の重要なる役割を課してゐる。斯くの如き水の元素的特質は又、土俗的信念の中に諸種の物語となつて現はれて來てゐる。嬰兒が水の中から生れたのであると云ふ物語

は幾多の地方で話されてゐるところであり、精神分析學は、水と胎内とが象徴的關係に置かれてあることを、夢の分析からして證明してゐる。而して尿は、それが無意識的に精液と混同される爲めに、直接的な生産的意味を以て内容づけられ、斯くして、水と尿と精液とが同一化されたのである。エリス Havelock Ellis は其の論文、アンディニズムの中に此れに關して周倒なる引例を以て述べ、『水の影響を研究すればする程、水の特殊な表現乃至象徴として、尿が考へられた事がよく分る』と云つてゐる（エリス、増田一朗譯『結婚史』一六二頁）。彼は又、雨と尿との同一化を數多の文獻から證明してゐる。雨は天上的存在物の排泄物と見做されてゐたと云ふ神話傳説を引例してゐる。例へば、「ブロナ・スミスに從へば劫初洪水神話が信ぜられてゐる。即ち大ブンジャルと呼ばれる最高存在が、人間に對して憤怒を發し、多くの日に亘つて夥しい量の放尿を續けた爲め、人間はすべて溺れ死に、生き殘つたのは男一人女一人だつた。この男女が現存種の祖先となつたと云ふ信念、北米印度人の間でも、ボアスが記してゐる様に、殊に英領コロムビアの印度人の説話に於ては、尿は大きな題目となつてゐる。それから、アレクサンダー・フムボルトがその著「コスモス」に記した處に據れば、南米に於いて土着印度人は、流星を『星の尿』と呼んでゐるし、古代メキシコ人は、蝶の形をとる火の神イヅパパロトルの排尿を信ずると共に、鳥の形をとる女神及び犬の形をとる神キオロトルも亦、神聖なる水を排泄して植物を潤し育てると考へた。ゴルドツィエル Goldziehr はアラビアに於ける天候及雨の神の名クザア Kuzah は放尿を意味し、雨と云ふヘブリウ語バル bâl は尿と云ふアラビア語バラ bala と關係があるだらうと説いてゐる』（結婚史、一六二――一六三頁）更に之れに附加へるならば、我國の尿の古語「ゆばり」は bâl と音を同じうする意味から語源的に關係づけられるものでは無いだらうかと云ふ事が考へられる。

尿は斯くして、神聖な神話的な性質を附與されてゐるが故に、軈て其れは巫術的な色調を帶びて來るのは當然である。原始人にとつて尿は聖水であつたとはエリスが性心理の研究 The Studies in the Psychology of Sex; Vol 5. "Sexual

Symbolism.」中の排泄物心醉（スカタロジー）の中に述べてゐる所である。不淨とか、罪を祓ふ爲めの聖水は、我國神道に於ける禊（みそぎ）、佛教殊に密教に於て重要視されてゐる灌頂、カソリック教に用ひられてゐる聖水を始め、其他の宗教の「きよめ」の儀禮に於て見られる所であるが、其の原始的な形は尿であつたと考へられる跡がある。現にカソリック教會では、聖水へ鹽を混入する事が行はれ、其れは舊約聖書利末記第二章第十三節にも記してある如く、非常に神聖であり、重要な儀式であるとされてゐる。さうして、鹽を水に混入する事は、原始人にとつては、それが尿の屬性と考へられてゐたからである。

人体と鹹水と云ふものが何れ程密接に關係づけられてあるかと云ふ事は、「鹽と人生」、「人体と水」と云ふ問題を熟慮して見ると分る。胎兒時代の羊水中の生活（人類發生神話と海水は之れのシムボライゼイションと看る事が出來やう）、細胞体を圍繞する水、人体よりの發出液体などが何れも鹹味を有する事よりして、生命と鹹液と云ふものが重要な關係にあり、その鹹液としての尿が、原始的意識には他の發出物よりも最も多く注意を惹起し、之れが他のものをも代表する樣に、考へられるに至つた。エリスに從へば、「鹽は原始人にとつては、尿のエッセンスと考へられ、その科學的性質に色々な巫術的特質が附け加へられる。畢竟鹽と尿とが起源を同じうし、若くは密接な聯關を持つてゐる事に因るのである。」（結婚史、一五五頁）斯くして、尿と水と鹽との關聯が、之れ等の風習に大なる意義を附して來る。我國でも鹽は、神聖なる拂淨の具として、祭祀に欠くべからざる性質のものとなつて水と並用されてゐる。佛教の灌頂會に用ふる水は黄色を帶びたものを用ひてゐるが、伊太利を始め歐洲の各地では聖水に黄色の鹹き水を用ひてゐて、それが尿を意味してゐると云はれてゐる。其他、マツダ教徒が尿を清めに用ふる習慣は尙ほ殘有してゐる。（Vendidad, Fargare], V.160）併し之れを斷定して了ふまでには、尙ほ牽強附會との非難に對する用意を必要とする。

惡魔を拂ひ、タブーを除去する意味を以つて結婚儀禮の中に、尿が重要な位置を占めてゐる。エリスの擧げるとこ

ろに依れば、ホッテントット人が結婚式の際に、新郎新婦に對して交互に僧侶が放尿して、之れを聖化する儀式、阿弗利加では、或種の結婚式には、新婦が彼女自身の尿の一椀を新郎に渡す、式に臨んだ賓客が新郎新婦に對する特殊な敬意の表示として、此の尿は、新郎の頭へ浴せかけられる。又中央阿弗利加では、酋長の新婦は結婚の翌朝、その尿を以て酋長の足を洗つて幸福且安全に彼を起床せしめなければならぬとされてゐる。此の儀式に於ては、專ら花嫁の尿を使用してゐるが、一般に小兒とか、女性の尿が巫術的能力ありとされてゐるのであつて、多くの風俗の中に男のものよりも多い率を以て殘つてゐる。

ステルン著『土耳古の醫學』に依れば、若し妻が竊に尿の若干量を飲物に加へて彼女の夫に呑ませる事が出來れば彼女から離れた夫の心は再び引寄せられ繫ぎ止められると云ふ信念が回教徒の間にはあるが、基督教徒にも類似の習慣が無いではないと云ふ事である。(B.Stern,—Medizin in der Türkei, vol.II p.11)、また李家正文氏著『加波夜考』の中に、『新婚の夜、花嫁は自分の掌に七度僅か宛放尿し、その度每に茶椀に移し入れ、其れを、「私より餘計に見ない樣、聞かない樣、語らない樣に私の水を吞ませて上げます」と口に唱えつゝ吞ませる茶に入れる』(同書、二一一頁)とあるが、その出所は書いてない。而して此の反對の風習が殘つてゐない所をみると、男の尿は案外効果が少いとされてゐたに違ひない。

呪術的要素を以て殘つてゐる風習には、尿が男のものでも、女のものでも、一樣に用ひられてゐる。『情海異聞』に記されてある話に、小便を小祠の神体にかけてから、囊中より水の入つた盆を取出して呪を行ひ、自己の姿を見ない樣にして、女を手に入れやうとした記事があり、更にその呪を解く爲めには又尿が用ひられてゐた。

この呪術的要素が、疾病の方面に利用されて、尿を藥用に供するものが多くある。『習俗雜記』に記す、小兒の引つけを直す呪として、胎尿を紙に包んで雪隱に吊す如きは、純粋に呪術的のもので、そのまゝ疾病に用ひられてゐる

が、醫藥としての尿は、多く飲まれる性質のものである。亞米利加の北西海岸地方の印度人の傳說中に、或女が其の愛する男に、自分の尿を與へて『妾の尿を少し許り、死人の耳と鼻に注ぎ込んでごらんなさい、屹度死人は蘇生しますよ、併し其れはあなたがしなくては駄目です』と云ふ話がある。(Boas, Zt. für Ethnologie, 1894, Heft, 4, s. 293.) 我國でも、漁師の間に、夫が溺死した場合に、その妻が自分の尿を夫の口に注ぎ込めば蘇ると云ふ習慣があると聞いた事があるが、その據る所を明示し得ない爲めに引證としての價値を有さぬ事は遺憾である。同志中山先生の博識からは屹度有用な材料が得られる事と思ふ。この二つの例は、戀をしてゐる女とか又は妻の尿の効用を示してゐるもので、一般に結婚した婦人、又は、結婚の志の動いてゐる女性の尿に神秘的な勢能ある事が信ぜられてゐた。併し乍ら必ずしも巫術的樣式に對して用ひられるのが女性の尿でなくてはならぬと云ふのでは無く、男女雙方のものが用ひられてもゐることもある。山崎美成の『世事百談』卷三「鬼魘(オソワレ)たるものゝ治療」と云ふ條に、「臆病なる人が、あるひは婦人などの妖怪に出あひて、鬼魘死するものあらば、しづかに手にても、又は風呂敷樣なるものにても、病人の口鼻にあてゝ息の出でざるやうにして置くべし、扨病人の目をあきたらば、あつき小便一杯口に入るべし、しばしありて正氣になるなり云々」とある如きである。唯女性の尿は、經血の神秘觀と關係づけられて、其の勢能が信じられたものに違ひない。その他にも理由はあるかも知れぬが……。

尿の巫術的要素の爲にこれが醫藥として殆んど一方的の勢力を持つてゐたと云ふ事は、醫學の起源に泝遡ることによつて分るであらう。醫と巫術の同類化されてゐて、巫術師の手に醫の務があつたと云ふ事に於て知られる。尿が巫術者の手から離れて純粹に醫藥の用に供せられたのは、もつと進步した精神の經驗の結果である。古代尿の藥用が、催春劑、强精劑又はヒステリー、マラリヤ、鼻血の藥として一般的に用ひられてゐた。此處では巫術的要素が次第に排斥せられて科學的硏究の下に置かれる樣になつて、尿の効用が醫學的に證明される樣になつた。

以上の如く、尿崇拜（ウロラグニック・フェティシズム）の風習は、諸種の形に於て見られ、現代では其れが不淨なもの、迷信的なものとして、理性の分野から排除されやうとしてゐるが、エリスの云つてゐる如く人生と水、水と性、性的なものとしての尿の關係は非常に密接なもので、スタンリー・ホールは「人類の心的機構が水の影響に依つて形成されてゐる」ことを、吾々の遠祖が嘗て水中に生活してゐた時代の影響であると云ふことを以て説明してゐる（Stanley Hall: "A Study of Fear," American Journal of Psychology, 1897, p.169.）。又精神分析學の幾多の例は、海水と羊水とを關係づけ、雨と尿とが夢の分析から連絡づけられてゐる事等からして、それが證明されるのである。

二、糞便心醉

糞便心醉の行爲及其の風習は、尿に於けるよりも比較的少い。併し乍ら、其れが尿よりも有形的である點に於て、原始的の感情をより多くそゝるものである。原始人の信仰の對象が、有形より無形に移行する所に精神の發達を見得ると云ふ點からすれば、固形体である所の糞便は、尿の流動的のものよりも原始的の姿を以て習俗の中に浸潤してゐる。即ち尿は、人を聖化する力を多分に持つてゐると信ぜられてゐるが、糞便には唯呪咀の具としての物より他の意義が無い様である。

魔術的の力を得る爲めに修驗者は往々人糞を喰ふ。エリスに從へば、豫言者エツキールが人糞を塗つて焙つたパンを食ふ事を宣言したと云ふことであるし、トレス海峽地方の魔術師が一般に、その修業中は糞便を食ふ慣例を持つてゐたといふ様な例は多く殘つてゐる。糞便が巫術的の具として用ひられてゐるものは、我國で「ふせる」と云はれてゐる方法である。それは泥棒が或る家に忍び込む場合に、その家敷内に脱糞して盥をかぶせて置く方法である。北獨乙では手巾や帽子をかぶせておくさうであるが、之れ等は、糞便の溫い間は家人の眠りを醒さないで、自由にその目的を達することが出來ると云ふ考へから行はれてゐるのである。

又此の糞の呪力は、感染的に使用されて、之れを以てその排泄者を呪咀する具とされる風習が残つてゐる。その爲めに排泄した糞便を他人に用ひられぬ樣に掩ひ隱して了ふ行爲が原始的のものとして殘つてゐる。タヒチ島の土民が排糞を行つた後必ず其の上に土を被せておくのは、巫女や敵に之れを持去られて呪術を施される事を恐れるからであるのである。之れは排泄物も人体の一部であるから、其れによつて人格を代表せしむることが出來ると云ふ信念に立つてゐる。併し排泄物を極端に清潔にする事は、總て此の觀念から出立すると云ふハッドンの觀方は、其れが人間に限られるとするならば至當であるが（ハッドン著、植木氏譯『呪法と呪物崇拜』、一〇頁）、又之の場合次の如き質問に應ずる用意が無くてはならぬ。即ち犬の行爲に就いて、犬が自己の排泄物の上に土をかぶせる事柄とか、猫や其他の動物が自己の排泄した糞をなめて了ふと云ふ樣な行爲を、人間と同一な感情から出てゐると云ふ事が出來ないかといふ問に對してゞある。勿論、人間と動物とは同一に論ずる事は出來ないとしても、人間が排泄物を蔽ひ隱す風習と、犬が同じく自己の排泄した物に土をかぶせる行動とは、可成り類似して居り、犬の此の行動は、若し人間のそれと同樣の起源を有するものとしないならば全く無意味なものとなつてしまふ。他の動物に於ても同樣である。若し又之れを肯定する立場を採つたならば、動物の知能を人間のレベル迄上げなければならぬと云ふ樣な、可成り困難な問題に遭遇する。然らざれば、お噺話式の空想的物語に陷つて了ふ。臺灣の傳説に、『何故に猫はその糞の上に土を被せるか』と云ふ事の解釋として、猫は約束を叛いた敵獸に糞の所在を知られることに依つて、又猫自身もその報ひを蒙るのを恐れるからだと云ふ神話（今城朝永氏著、異態習俗考、二五四頁）があるが、此れは唯彼等臺灣人の俗信から説明したものであつて、猫自身の考へから出たものとは考へられない。此の問題は後日の研究に讓るとして、兎に角、人類の習俗に殘存してゐる糞便隱匿の行動は呪術的要素を持つてゐることだけを云ふておく。

更に糞便が呪咀の具として用ひられなくしても、それ自身に於てマナ――メラネシア人が有してゐた力の觀念で、

未開人の間に抱かれてゐた超自然的(スーパーナチユラル)な神秘力(異常な潜勢的(イムポテンシャル)能力)を總括する民族學的の名義である――を持つと考へられてゐたものがある。例へば、天照大神が素戔嗚男尊の置いた糞の上に座した爲めに御惱にかゝられたと云ふ如き(岩波本、日本書紀上卷、四〇頁)は糞自身に魔力があつたとみるべきものである。而して此のマナの神格化して伊奘冉尊が神避(カミサリ)ます時に、大便(クソ)まり給ふたものが神となつて埴山姫となつたと云ふ同じく紀の記事(岩波本、日本書紀、二〇頁)は、糞のマナの象徴化とみる事が出來る。

藥用としての糞便は、尿と同じ樣に未開人の間に一般的のものであつた。之れはエリスの著書に讓つて、煩鎖な引例を省く。

三、排泄物心醉の心理起源

可成り文化の進んだ人々の間にも排泄物心醉が非常に根深く、精神の無意識領域に遺つてゐると見做す事が出來る。普通の大人で、排泄物に對して興味を有してゐる者は相當に多いし、神經症患者にして秘かに糞便を玩弄する習慣を有しない者は殆んど無いとフロイドが云つてゐる如く、氣の狂つた人の排泄物玩弄の行動は我々が日常屢々見る所である。性的倒錯者が異性の放尿を口に受けたり、其の糞便を喰つて自己陶醉に陷つてゐる樣な極端な例は、斯道の研究者の豐富な材料に見るところである。又宗教的なエクスタシーに入つた信徒の間にも、排泄物心醉は熱狂的な動作となつて現はれて來る。クラフト・エビングは、『性慾的な排泄物心醉と宗教的なものとは平行する』と說いてゐるが(Krafft-Ebing: "Psychopathia Sexualis," English Translation, p.178.)、事實、禁慾者が信心渴仰の極致に達した時になす行爲は、性的狂崇の極致に達した時に行はれるそれと全く同一の性質を帶びることがある。結局それは、宗教と性とは或點に於て一致すると云ふ結論に迄到達せしむべき性質のものであらうと思ふ。

排泄物心醉にはエロティッシュな傾向が存してゐる。幼兒が自己の排泄した尿や糞を玩弄するのは、大人に依つて教

育されない時期の一般的な傾向である。この傾向は勿論廣い意味での快感原則 Lustprinzip に支配されてゐるものと云ふことが出來る。

快感原則は精神活動の原始的にして且根本的なるもので、個人に於いても種族に於いても人間の發達段階に於ける最初のものである。それ故、之れは幼兒に於ても、野蠻未開の人々に於ても、一般的に典型的に表はれて來るのであるから、理性の羈絆から脱した時の行動は凡て原始的な、又は幼兒期の精神狀態に還るのは當然である。そこで排泄物心醉の説明を、幼兒心理の中に求めることは、原始人の精神生活を探ぐる事の困難な現代に於ては、妥當な方法である。

幼兒期の、自我意識の未だ發達しない時代には、身体の各部分、各器官に興味を以て、そこに快感を求める時期がある。此れを器官愛 Organ-erotic の時期と呼ぶ。此の時期には幼兒は口唇其他の感覺器、排泄器、腑及筋肉、關節等に對して注意を向けて來るのである。幼兒が手足をしやぶつたり、性器を玩弄したりする行爲は屢々見る所であるし、川柳にも「おとなしい裸のぞけば腑のごみ」と云ふ句があるが、此期の幼兒が行ふ動作は、川柳人には無邪氣な童心の姿と見えたのであらう。

幼兒が肛門に於て、排泄物通過の際に快感を持つことは大人よりも敏感であり、又生活が單純であるだけに、普通大人には感ぜられない程の刺戟に對しても、感受性が鋭敏に働いてゐる。排便が排泄口を通る際に感ずる快よい陶醉に似た感じは、少しく自己を反省してみたならば、疾病を有さぬ限り、誰も想ひ起す事が出來るであらう。緊張と弛緩の相平均した所に快感が生じ、更に此の距離に正比例して快感の度が增加すると云ひ得るならば、排便前の緊張感と、排泄後の弛緩の感とは、排泄物に對する快感と興味を喚起して來るのである。之れを具体的に云へば、排泄物が腸又は膀胱に豬留してゐる爲めに、肛門や膀胱の括約筋の收縮を起し、豬留物質の排除と共に溫刺戟がその粘膜に及

ぼして壓迫感と共に快感を與へるのである。豬留物はそれが多い程快い刺戟となつて粘膜面を移行するのである。幼兒が排便を耐え忍んでゐて、時々之の爲めに失策を起す事のあるのは、多くの親は遊びに熱中してゐた爲ゐに排便を忘れてゐたのだと解釋してゐるが、精神分析學は、もつと深い無意識的意圖を藏するものだと解釋する。寢床や着衣を穢すと云ふ事には、子供は比較的に苦痛念慮を伴はない。排泄時の副的快樂を失ふまいと介意する方が多いのである。

又幼兒は排泄物を汚穢なものとは認めてゐず、却つて之れを自己の肉体の一部と觀じてゐて肉体から離す事を喜ばない傾向を持つてゐる。一体幼兒は、自己の身体に就いて快樂を求め、自体以外のものを用ひない。それ故に幼兒は自体愛（アウトエロテイツシュ）的傾向のために自己の身体の附屬物をも自体と同一視 Identifizieren するのである。この事は大人に於ても顯著に見られる。他人の排出した物、即ち啖、唾、鼻汁、汗、尿、糞等に對しては、極端な嫌惡感を以て忌避するが、自分のものに對しては左程に感じないのである。或る解釋者は、之れは自分の物は性質が知れてゐるが、他人のものは不可解であるから危惧を感ずるのであると云ふが、それもあるかも知れぬが、それのみとは云へない。排泄物心醉はそれ故に、排泄快感の伴つた所謂贈物（プレゼント）に對するエロス（思慕）の感情に基づいてゐると云ふ事が出來る。エロス（Eros）とはプラトーン（Platon, BC. 347—427）が、その哲學說の中に述べてゐる言葉で、肉体の牢獄の中に閉ぢ籠められてゐる魂が元の住家である所の常住不變のめでたきイデア（idea）の世界に憧れることで、フロイドもその性慾說は畢竟プラトーンのエロス說に一致する所のものであると云つてゐる。その一致する所は、現實原則 Realitätprinzip に制約されてゐる自我 Ich が胎兒時代又は嬰兒時代の全能感に對して憧れるものであると云ふ點にある。人間は胎兒時代に於て絕對的全能感を有し、その時には凡てのものが滿足させられて居り、所謂怠惰期にあつたのだ。然るに一旦胎外に出るや、環境は刺戟となつて嬰兒の新たな要求を起させるのである。そして新らしい快感が

獲得される。快感獲得の第一段階は、口唇、肛門、或は尿道口等の所謂性的帶域 Erogene Zone と呼ばれる箇所に對して起す性器前の時期 Pregenitale Periode であつて、この時期は未だ性的帶域が性生活の主位的役割を持たないのである。また自我意識は勿論まだ發達してはゐないから、幼兒の興味の對象は自己の身体に向けられる。前に此の時期を器官愛の時期と呼んだが、又自体愛 Autoerotisch の時期と云ふことも出來る。

理性の統制、又は社會的意識の覺醒、即ち全能感が現實感に置換せられた場合に、排泄物に對する心的態度は一切禁壓されて了ふ。何故それが禁壓され、後年に至つて不淨感を誘發するかと云ふ問題に對しては、更に考察の餘地が殘されてゐる。兎に角、吾人の原始的な精神狀態に於ては、排泄物は却つて親愛なものである。それ故理性の監視が弛緩した場合には、常態者においても排泄物心醉の傾向が現はれて來るのである。又神經症患者にこの傾向の見られるのは、自我が病的痲痺に陷つてゐるためであつて、其れ等は何れも、現實感から一時的に或は恒常的に解放せられて幼兒の精神狀態に退行してゐるためである。要するに排泄物心醉は常態人にもエロスとして無意識的に動いてゐるものであつて、人類に本然的なものだと見做し得るのである。(完)

時評

佐藤、丸井兩氏の論爭を讀んで

大槻憲二

『心理學研究』本年四月號を見ると、京都帝國大學の佐藤幸治氏が『精神分析學の根本特徴の二三――並びに丸井淸泰敎授等の學說の批判――』を試みてゐる。即ち同氏の論は斯學一般に對する批評と、丸井說に對する批評との二つの部分から成立つてゐるわけであるが、丸井說の批評に對しては、丸井氏自身が同誌同號上に答辯を試みてゐられるから、さうしてその答辯は誠に行屆いて穩健妥當なるので、第三者たる私が側から口出しをすべき必要を認めないほどのものであるから、只今私は何も云はないことにするが、たゞ斯學一般に對する同氏の批評に對しては、私が、玆で二三の反駁を試みておくであらう。尤も私自身も丸井博士と同様に、精神分析學には非常に興味を持ち、熱心に研究してはゐるが、まだ全部的に斯學を研究し盡し、理解し盡してゐるとの自信を持たないものであるから、從つてなほ多少の批判的態度を失つてゐないものであるから、私は佐藤氏の批評に對して、自分こそ正統精神分析學者として、その矢面に立たうとするほどの稚氣と潛越とを持たない者ではあるが、（尤も氏の批評に今一段の力があつたら、或は自分もそのやうな氣になつたかも知れぬが、）併し明かに佐藤氏の誤解であり偏見であると思はれるものはこれを指摘しおくのが、同じく學界に生くるものゝ友情であり義務であると信ずるので、敢へて橫鎗を出すことにしたのである。佐藤、丸井兩氏の論爭に、入らざる差出口を利くと思ふ方々があるかも知れぬが、乞ふ私の眞意を諒解せられよ。

佐藤氏は『精神分析の根本特徴』として四つの項を擧げてゐられる。即ち、斯學の（一）對大衆的實踐性、（二）素人的合理主義、（三）恒常僻定的性格、（四）人間觀の具体性。この四つであるが、第三までをその缺點とし、第四をその長所と認めてゐられるやうである。で、私はそれ等の各項に就いて、私の批評を試るであらう。

（一）さて同氏の各論を批評しようとして、再度これを讀直して見たところ、何れも失禮ながらお若い議論ばかりで、一々とり上げるまでもないやうな氣がして來たが、やりかけたことはやり通さねばならない。

『精神分析學は科學であると主張される。併しそれが元來神經病治療の術より端を發し、遂に一つの神經病學說、更に一つの心理學体系をも生むほどに發展したが、今なほその治療に携つて居り、かゝる治療が根本となつて精神分析學の團体が世界中到る處に、……組織されてゐることを記憶せねばならぬ。換言すれば、精神分析學は純粹な理論的研究としてよりも、神經病治療といふ對人的殊に對大衆的實踐を中心として其の生命を保つてゐるのである。』と氏は云ふ。當然の事ではないか。それ故にこそ精神分析は科學であるのだ。純粹な理論的（即ち机上的）研究に沒頭して自ら高しとする事は大學の象牙塔上に安眠する學究者（アカデミシアン）の能事であつて、人生の活事實に就いて眞理を不斷に探究せんとする科學者のなすべきことではない。氏が『……神經病治療と云ふ對人的』、と云ひかけて、忽ち『殊に對大衆的實踐』と云ひ直した心理過程は何事を意味するのであらうか。『對人的、即ち實證的實踐』と、私は云ひ直すべきだと信ずるが、氏はそれに對して何と評するのであらうか。

『田中博士が『と氏は續けて論ずる。『クリスチャン・サイエンスなどゝ並べて神秘說として批難せられてゐるのも、この故にであらう。』と。併し精神分析は神秘には凡そ因緣のないものである。精神分析は科學である。科學は一切の神秘を豫想せぬ。神秘を豫想するところに科學は成立たない。併し精神分析を神秘說視する誤解が西洋にも存するやうであるし、またそれの所以をフロイドは明かに論じてゐる。それは精神分析の學的對象が從來神秘說の對象としたところの事柄――無意識心理――と符合するからであると。また一つには、精神分析の對象たる無意識心理は、（前號にも一寸說いた通り）これを意識化し得ざるものにとつては、全く不可解な存在であるからして、これを解しこれを云々するものは神秘的に見えることは、誠に自然のことゝ考へられる。次に氏はミッテンツヴイの馬鹿々々しい說を後生大事に紹介してゐられるが、私はこれを一々駁する根氣を持たぬ。

更に氏は同じ項の最後でかう云つてゐられる。これは恐らく氏が精神分析を批難する場合の理論的根據となる

のであらうから、これを引用し批評して見る。『苟も我々が學に携る場合には、一方、方便即眞實の立場をも顧ると共に、なほ眞實即眞實の立場より批判されねばならぬ。』云々と。併し眞實即眞實など云ふものが何處にあるのだ。眞實は常に方便から生じたものだ。（但し私としては、方便と云ふ語の代りに實踐と云ふ語を用ゐたい。）Aの方便（實踐）とBの方便とを統一せんとするところに、眞實が生ずるのだ。純粋に眞實のための眞實など云ふものはあり得たとしても、科學に對しては全く無力なる蒼白き哲學の夢である。このやうな古い教養の幽靈に囚はれることなく、現實と人生の活事實を今少しく觀察し洞視するの態度に出でられむことを、私は氏のために希ふてやまぬ。（氏はマルクシズムと精神分析とを方便のために眞實を被ふてゐる點で同類のものと見做してゐるやうである。併しこれは私の見解とは著しく違ふ。私はマルクシズムは方便即眞實を立前とする科學と哲學との混淆せる鵺の如き存在であると信じてゐるが精神分析は純粋に科學であると信じてゐる。）

（二）次に佐藤氏は精神分析の理論から生ずる特色の一つとして『誤謬絶無性を擧げることが出來る』と云ふ。『精神分析のエピゴーネン或ひは信者にとつてはフロイドの教説は絶對的に眞理である。細部に於ける説明の補正は許されても根本的原理に對する更改等を試みるときには、その人は異端者として其の社會から放逐されるのである』と。

精神分析に對する『素人的』見解はまづ大抵この程度であることは、私が前號にも論じた通りである。一體、『誤謬絶無性』と云ふことは哲學や宗教にはあつても科學にはあり得ざることだ。常に新たな眞理に對して受容的な態度を示すものこそ、科學である。フロイド自身が無意識界の大海に於いて自分の試みの如何に小さく未完成なものであるかを告白してゐる個所を我々は彼の著書中に散見して、寧ろその謙讓の必要以上であることをさへ感ずるほどである。（科學者としては當然ではあるが……。）フロイド自身もその學徒も決してフロイド教説を宗教的信條の如く見るものでないことだけは、佐藤氏

の中傷的言辭に對して辯明しておいてよい。『細部に於ける說明の補正は許されても、根本的原理に對する更改等を試みるときには、その人は異端者として其の社會から放逐される』と批難がましく氏は云つてゐるが、これは當然のことではないだらうか。一體、精神分析の根本原理は抑壓說にある。それを捨てた時は既に精神分析を離れたことを意味してゐる。精神分析を離れたものがなほ精神分析學者と自稱することは不合理である。併し精神分析の抑壓說が誤謬であると云ふことが證明されたのならばそれは別問題である。それは精神分析の發展であつても、それを說へた人の離反を意味しない。併しフロイド並びにその學徒は未だ抑壓說が誤謬であつたとは信じてゐないのであるから、それを否定するものだけに姑く分析者の自稱を遠慮して貰ふと云ふことは當然のことでなければならないではないか。

精神分析は『都合が悪くなれば何處までも補助假定を附加して行く素人的合理主義』であると氏は難ずるが、凡そ科學は歸納主義に即し、哲學の如く演繹主義に即せざるものである以上、『都合が悪くなれば何處までも補助假定を附加して行く』のが當然ではないか。如何なる場合でも一つの原理原則を以て一切を說明し盡さんとするは哲學の方法であつて科學の方法ではあり得ない。殊に精神分析が對象となる無意識心理は所謂『過度的に決定され』 überdeterminiert たものであるから、また矛盾の原理に支配されたものであるから、この對象に對して哲學や一般科學の對象に於けると同じ態度を要求することは無理であり、精神分析とその對象とを理解せざるものであると云はねばならない。フロイドは何の憶するところもなく「入門」の中で堂々と云つてゐる。『我々が精神現象の研究に深く入れば入るほど、我々は精神過程の豐富さと錯雜さとを認識するやうになる。最初に我々に役立つと思はれた多くの單純な假定はやがて十分でないことが分つて來た。我々はそれを改變し改善することを怠るものではない』と。學問は發達するものである。況んやこの若い科學に發達と變化とを見ることは當然ではないか。

やり損ひの分析的見解に就いて氏はかう云ふ。

『明智光秀が食事中箸を落したのを見て、森蘭丸は其の陰謀を察したと云ふ話があるが、精神分析學の立場からはその落した箸の意味が問題とされる。通常は蘭丸のやうに光秀が何等かの思ひに、恐らくは陰謀に、心を奪はれてゐたので、うつかり手に持つてゐた箸を落したと、箸は二次的な、或ひは偶然的なものとしか解釋されない。これは常識に於いても又心理學に於いても同じである。併し精神分析學では箸が問題になる。かくて恐らく箸は橋である。これに信長の居城か或ひは宿所（本能寺の如き）の濠に架した橋を意味し、箸を落したことはこの橋を落して信長を亡さんとする願望の現れであるとでも説明されることゝ思ふ。これは愉快な説明であつて……』云々。

と嘲笑してゐるが、これは丁度前號に私が下田光造博士の滑稽な解釋例を上げたのと好一對をなすべきものである。『恐らく……と思ふ』と佐藤氏の云つてゐるところを見ると、これは佐藤氏の推定論であつて、斷定論ではないことは明かである。併し分析者はさう簡單に象徴的解釋を下すものではない。箸は橋であると解さなければならない場合もないとは云へないが、右の實例の場合に於いては、まださう云ふ斷定を下すだけの論據が何も上つてはゐない。もし光秀個人を分析する機會が我々にあつたならば、そのやうな解釋が妥當であるべき證據が擧つたかも知れないが、何等の根據なくして箸は橋であると輕率に斷定するものでは分析者はない筈だ。況んや、このやり損ひを見て陰謀を察したものが森蘭丸であつて我々ではないのであるから、かゝる似而非分析的解釋は愈々その根據を失ふわけである。

一体無意識心理行爲に於ける象徴的意義なるものは、最も多く、最も速く、人々の興味を引くものであるらしいが、それがまた最も屢々、精神分析學への誤解の契機となつてゐるものである。併し非『素人的』心理學者と自稱する佐藤氏が象徴行爲の如きものに囚はれて、精神分析への理解の埒に入り得ないことは、誠に不思議であると云はねばならない。

（三）氏は『聯想主義的原子觀』的色彩として『恒常假定的性格』が精神分析學に見られると云ふ。『即ち乳兒が腹一杯に乳を吸つてすや〳〵眠り入つてゐるその姿に成人の性欲滿足後の眠りを見入れるのである。兒童が

多形倒錯であるなど〻云ふのも、兒童の身体的快感を生ずる行動等に成人の性慾を見入れたものに外ならぬ。』と大膽に斷定してゐるが、何の根據に依つてか〻る斷定を下すか。もし氏の斷定が正しいとして、單に『見入れたもの』に過ぎないとしても、そのために幼兒性感の事實はやはり動かぬのである。幼兒に性感の存することは今や殆ど大抵の學者の否認し得ざる所となつてゐる。もし『見入れる』ことに依つて、これだけの眞理發見の機會を得たとすれば、それだけでも實に鋭い聯想力であると云はねばならぬ。況んや、他の方法に依つてその性感と倒錯との存在が確證されてゐるに於いてをやである。

(四)氏は以上三項に於いて精神分析の所謂缺陷を指摘したと信じてゐるが、最後に第四項に於いて斯學の長所を認識せんとしてゐる。斯學は『研究の焦點を具体的な人間の情意生活に置き、其處に於ける種々の動勢を明かにした點は心理學研究の發展史上に於ける沒すべからざる貢獻である。』と云つてゐるけれども、私としてはこの讚辭は少しをかしいと思ふ。一体、精神分析は科學である。科學は對象を想定するものである。(精神分析は無意識心理を想定する。)その限りに於いて一切の科學的眞理は抽象的でないまでも一面的である。もし精神分析の眞理を具体的と云ふならば、他の心理學の眞理とても具体的でなければならない。哲學や數學の眞理は抽象的であるが、科學の眞理は具体的であるのが當然である。一体、氏の云はれる具体的とはどう云ふ意味なのであらうか。然もなほ氏は續けて『病態心理學は一般心理學に比して多く具体的な人間性を研究することになるがフロイドの學說には、更にその鋭い洞察の覗はれるものが少くない』と云ふ。併し精神分析は病態心理の研究から出發したが、病態心理學に終始するものではなく、寧ろ『深部心理學』として一般心理學の基礎となるものであると主張せられてゐる。

要するに、佐藤氏の精神分析への知識は未だ常識の程度を超えざるもので、これは恐らく氏が從來の心理學の教養を誇りとし、これを捨てることを好まず、況んやこれを動搖されることを潔しとせず、併しながら精神分析

の長所と鋭さとには敬服してゐられるので、このやうな半ば同情のある（その同情はいさゝか見當違ひではあるが）、併し半ば輕蔑的な態度となつてゐるのではなからうか。現に、精神分析とフロイドとをやれ『大衆的』だのやれ『素人的』だの、心理學的教養に乏しいのと見當違ひなことを云つて一人自ら高しとしてゐるところに、その論斷の『感情的(アフエクト)基礎』が露見してゐる。左翼的に云へば氏の階級性が暴露されてゐる。その點に於いて氏の良心的な自己分析を要望しておく。併し同氏はまだ若い人のやうだから、好意にまれ惡意にまれ、（分析的に云へば、積極にまれ消極にまれ）それだけの關心を（分析的に云へばリビドーを）斯學に纒綿させられることは、誠に殊勝の事と申さねばならぬ。至囑々々。

＊

最後に私は丸井博士に一言申しておくが、博士の精神分析への興味と同情とは、決してさう冷やかなものではない筈で、現に最近の『國際精神分析學雜誌』も報じてゐる通り、國際學會本部に對して、その支部としての承認を要求せられた程であるのだ。それほど積極的な關心を寄せてゐられる斯學に對して、佐藤氏のやうな無理解な批評が下されてゐるのを只『承り置く』だけに止めておかうとされるのは、如何にも齒痒いことである。尤もかの塚原卜傳が、無謀な、若い劍術使ひを回避する手段として、その青年劍士を島に殘して舟を出して了つた古智に傚つたものとすれば誠に、老練な戰法ではあるが。併し、恐らくさうではなからう。博士の溫良な人格には敬意を表するが、併し眞理のために戰ひを避けるのは美德とは云へない。フロイドの如きでさへその論爭に於けるや、極めて卒直であり、大童である。…………新しき眞理のために戰ふものは、須くかくあつてほしいと、私は思ふ。（完）

精神分析の難者に答ふ

佐藤幸治氏の「精神分析學の特徴の二、三」及
拙著「精神分析の理論と應用」の批判に對へて
（八年四月號「心理學研究」評論欄所載）

矢部八重吉

精神分析學に對する批判は、我が國に於ても既に可なり多方面の人々から爲された。が、その多くは斯學に十分精通してをらない人に據てゞあり、中には全く無智盲目な加虐性的攻撃に止まつたので、甚しくその標的を逸してをつた。然るに本年四月の「心理學研究」（第八卷第二輯）で、表題の如き題目の下に、佐藤幸治氏に據り公けにせられたものは頗るその當を得た處があり且つ、評者が斯學に關する文獻を廣く通讀せられた形跡が明かに認められると云ふ事から私の興味がそゝられた。氏は斯學の主張者ではなく一般心理學の立場からだと稱されてゐるに拘はらず、言々句々斯學者の口吻、考方が示されてゐる。であるから、氏の論述の或る箇所は、單に否定語を除去する事だけで、精神分析に對する肯定となし得るのである。此れはフロイドの「否定は抑壓の智的代償なり」と云ふのに合致する。私の此の考は氏が「精神分析學對大衆的實踐性」の題目の下に第一主張として引用されたミッテンツヴアイの言葉から引起された。此の言葉はその實質に於て、大体精神分析學の現狀、その主張者の努力と一致するであらう。即ち唯僅かの字句をさへ修正すれば、斯學の最も有効なる鼓吹となり得るであらう。そして私は私の主張を更に强めようとする努力を許容してくれるならば、玆にミ氏の言葉に附加したいものを持つのである。此れは、佐藤氏が、精神分析學はその實踐性は兎も角として、その理論が果して科學としての地位を要請し得るものなるや否やを疑はれる樣に見ゆるが故に、特に必要と感ずるのである。私が附加したいと云ふ考は次の如くである。ミ氏の言葉を實質的に簡單に云へば、精神分析は惱んでゐる人の弱點につけこむ、所謂劣等感を補塡する、對大衆的力は實に此所に存在す

るのである、と云ふ事になる。が、此の批難があてはまらない知識、臆說、信念が他にあり得るだらうか。それが基礎となつてをらない學說が果して世にあり得るであらうか。換言すれば、精神分析以外の學說――よしそれが哲學であらうが、科學であらうが――にして此の補塡を、自覺しつゝ或ひは不識不知のうちに、目的としないものがあり得るであらうか。宗教は明かに此の要求に應ずるものである事は、何人でも首肯出來るであらう。哲學、科學と雖も遠くその起源に遡つて見ると、同じ動機に出てをつた事を我々は知る。そして此の動機は種屬的特質として我々は繼承してゐるものと信ぜざるを得ぬ。即ち動機は我々が何所かに宿してをらなければならない我々はそれを覺知してをらないかも知らない。が、此の覺知の有無は、若も我々がベルグソンの言葉、即ち「現在に對し我々が示す反應は意識的若くは無意識的たるを問はず、過去の經驗記憶の總和を以てする」と云ふ事を信ずるなれば、決して問題とならないであらう。して見ると劣等感の補塡はあらゆる學說の目的の一として見ても差支えないであらう。唯此の目的が主要部分を占めてをるものか否やの問題は未だ遺るのである。精神分析はその被分析者から獲られた材料からしてそれを肯定せざるを得ないのである。斯くして惱むものゝ「弱點につけこむ」のは獨り精神分析のみでなく總ての學問がさうであると結論せざるを得ないのである。

佐藤氏の第二の主張としての「精神分析學の素人的合理主義」では、斯學の團体が恰も宗教團に於けるが如き盲信を强ひつゝあるかの樣な皮相觀を示してゐる。私は此れに就いても否定、反駁を敢て試みる事なく、氏の所論の實質其の儘を採り、僅かな修正と附加とを以て滿足したいと思ふ。

「精神分析學のエピゴーネン或ひは信者にとつてはフロイドの教說は絕對的に眞理である。」と云ふ氏の句の內「絕對的に眞理である」を「可能性に富むが故に最大多數の人に依り眞理に最も近いものとして受け容れられる」と正したい。そしてそれに次ぎの如く附加したい。「此の受容は斯學の理論の牽引力が然らしむるものでな

く、その應用の一分野である分析の技法に據り初めて可能となるのである」と。受容には分析を受くると云ふ事が唯一の條件となつてゐる。それ故に假令斯學に關する萬卷の書籍を讀破したとても、論語讀みの論語知らずと云ふ程度の啓蒙を獲るに止まるであらう。嚴密に言へば佐藤氏の「フロイドの敎說は絕對的に眞理である」と云ふ事は、分析中被分析者に對し起す積極轉嫁（氏の言葉に據れば、「陽性轉移」）の場合に限り、適言となるであらう。そして軈て此の積極轉嫁が消極轉嫁（不信、反抗）で置換へられた時に、被分析者は時とすると、自から「異端者」たるを肯んじて分析的雰圍氣から逃避する事があるのは事實である。次に「精神分析學に於てはその相手が心理學者でない素人である」と云ふ氏の言葉からして私は氏の「一般心理學」なるものの眞相を明かにする事が出來たと思ふ。此の意味で云ふと、心理學なるものは心理學者だけを對手とすべきものであつて、一般人とは全く沒交涉なものである。唯斯學者間に於て相互に論議檢討し合ふのを以て足れりとする所謂學究的（アカデミック）なものであると曲解されても止むを得ないであらう。從來の心理學が哲學の軛から逃がれ、科學としての地位を要請し、次いで精密科學として愈々大義名分を樹てようとした企圖が實驗心理と云ふ迷彩（カムフレージ）の下に更に新たなる羈絆で縛されるに至つた經緯を尋ねて見ると、此の學究的色彩が極めて瞭然と窺はれる。爾來學究的自由（アカデミック・フリードム）との叫びが處々に起り、そしてそれが今尙持續してゐるのは決して偶然ではないと私は信ずる。

「精神分析學の恒常假定的性格」と云ふのが、評者の第三題目である。此れに關して私は一つの附加（と云ふより寧ろ補足）を許容して貰ひたい。此の「恒常假定」と云ふものゝ内に佐藤氏は「無意識」の概念と、嬰兒性（インファンティール）感說（セクシュアリティー）とを取入れてをられるが、最も重要なる（精神分析にとつては）もう一つの概念に論及してゐない。此れは抑壓の概念である。「無意識」なるもの丶存在は抑壓の概念なしには我々は決して考へられない。それを考へようとするのは、恰度首のない胴体から死屍の面貌を判じようとするに等しい。が、假りに私が玆に此の附加を爲

した處で、更に一つの「恒常假定」を增したゞけで大した役に立たない樣に思はれる。唯問題を少し先きへ押しやつただけに止る。XをYと等しくしたに過ぎない。と逆襲されるかも知れない。が、裏にはまた裏がある。抑壓は最早抽象概念ではなくなつて來た。それは意識面により近く働く、即ち覺知され易い禁制(インヒビッション)に基く事が我々成熟者には自覺され得る場合が屢々ある。分析は此の覺知を倍々鮮明となし、疑の餘地なからしむるのである。

第四の題目「精神分析學の人間觀の具體性」に就いては私は特に玆に言ふべき事を多く持たない。それは大體に於いて私の意見と一致する處であるからである。拙著「精神分析の理論と應用」に關する批判に就いても、既述の私の意見に從ひ、或る箇所は字句の修正、補足を以て御答えし、或る箇所は否定を肯定で置換へるだけで私は滿足したいと思う。例へば私の夢の註釋中には「公式的に誤つた解釋が多分に見出される」と云う句の內「公式的に」を「不公式的に」と改め、「誤つた」を「正しい」と直せば可いと思ふ。斯樣な修正の仕方は論理的には許されないかも知らないが、佐藤氏自からの言葉の內で、丸井氏等の業績と私の業績とを比較せられた箇所で「丸井氏等の見解は正統でないだけ正當なものである」と言はれたのと好一對の形式論理學上の逆理ではなからうか。それを逆轉して言うと、私の解釋は正統であるだけ正當なものでなく、私の病は既に膏肓に入つたのである。(八年五月五日草)

研究會六月例會案內

時　日……六月十二日(月)午後五時半より
場　所……神田萬世橋驛前
　　　　アメリカン・ベーカリ階上
會　費……食費とも一圓
講　演……諸　家

讀者諸氏の出席を歡迎します。

誤られむとする心理派文學

大槻憲二

バアナアド・シヨウのやうな男が雜駁な旅をして來ると一通りの紹介文が今更のやうに各新聞雜誌に戴るが、スティーヴンスンのやうな特異な男の『ジーキル博士とハイド氏』のやうな深刻な作品が映畫化されて來ても、それを深く研究して見ようと云ふやうな氣は日本人にはあまり起きないものと見える。たゞ二重人格者の悲劇だと概念的に片付けてゐるだけで安心してゐる。そのくせ芝居にまでしてあちこちで再演、再々演（又は模倣演）までして見ようと云ふ一種の興味はあるのだが……。要するに日本人と云ふ人種は、恐ろしく研究心のない、いつも外面ばかり見てゐる人間であるらしい。

だからこの國では心理派の文藝などはあまり榮えないかも知れない。我々が提唱して折角新心理派の文藝らしいものが出かゝつて來たと思ふと、まだ碌々出來上らない内から早、反動が起きかゝつてゐる。その一はプロレタリアの方からの外面的社會を重視する方からの反動で新心理派が『大衆の生活から完全に切り離された、一部インテリの文學的手淫に過ぎない。これは生活の生産面ばかりでなく、一切の積極性を喪失して了つてゐる』と云ふのである。例に依て雜駁な議論で、敢て我々も驚かないが、どうせ文學などゝ云ふものは多少ともインテリの仕事なのだから、大衆の生活とは直接的には或る程度まで切離されたもので、そんなことを云へばプロ文學とても不完全に切離された文學に過ぎないではないか。彼等が大衆との接觸に如何に血眼になつてゐるかを見ても思ひ半ばに過ぐるものがある。プロ文學などゝ云ふものが、かう雜駁で、單純で、排他的では、到底大をなさないし、進展の機會と可能とを自ら放棄するものであると思ふ。新心理派が、依つて以て立つところの科學的根據（分析學）をよく理解して、（これは精神界に於ける解放

運動なのだから）これを文學に採入れ、大衆に傳達し裨益すると云ふ態度をとるべきであるのに、日本のプロ文學はいつまで經つても小兒病的でヒステリックである。『文學的自慰』とは、私の方から嘗てプロ文學の方に進上した批評語であつたのに、これを無斷でこちらに御返却とは恐れ入る。何れが果してこの名にふさわしいか、事實を見ればよく分る。

＊

第二の反動は哲學畑から來るやうだ。これは精神分析が一つの科學であると云ふことを忘れての批難で、哲學としての指導性と傾向性とのないことに對する不滿の發露であるが、これは哲學の如く固定した人生觀でなく常に新たな眞理を發見し來らむとする態度を何よりも尊しとする科學に於いて當然已むを得ざる特質である。この批難は殊にマルクシスト又はマルクシズムに同情ある人々から發せられるが、私は科學々々と自稱しつゝもそれ自身固定した哲學であることを明瞭に自意識してゐないマルクシストの方にこそ却つて自己反省の必要があると思ふ。科學は白紙である。これを利用せんとするものは如何なる色彩をも賦することが出來る。精神分析はそれ自身、人生と社會とを指導すべき原理を持たぬ。併し指導原理を持たんとする如何なる人々も、一度この方に眼を向けなければならない重大なる眞理の實庫である。

＊

第三の反動は――嚴格に云へば、第三の反動への源因は――新心理派文藝家諸君の態度にある。それはあまりにも新心理派文藝を『意識の流れ』に終始するものゝ如くに取扱ひ、或は論じたゝめではなかつたか。それ故に新心理派が單なる新心境小說の類の如くに誤解されて了つたのではなかつたか。あまりジョイスのユリシイズのみを問題にし過ぎて、その背後をなすところの科學の硏究をおろそかにしたゝめに、かく誤解され、かく行詰つた（もし果して行詰つてゐるものとすれば）のではなかつたか。精神分析が文學に與へた、また與へつゝある問題は多岐であり、方法は變化に富む。文藝家の反省を要求しておきたい。

『お蝶夫人』の映畫を見て

伊東豐夫

此の映畫の脊骨を形成するものは、一口に云ふと、旅行好きな外國人のエキゾティシズムの夢である。であるから、總てが此の夢を中心として、或はそれを滿足せしめる目的から、樣々に歪曲された解釋が與へられたり、或はこの夢に迎合する爲めに日本の風俗、或は日本の傳統らしく見える精神の、殆ど漫畫化された誇張が隨所に示されてゐる。

だからと云つて此の物語は、吾々全体日本人全体を侮辱するものだとして憤慨するにも當らない。何故なら、これは外國人等が斯ふで有り度いと願つてゐる空想を、(災難と云へば災難なことに)偶々吾々の風俗に託した迄の事である。それには、風俗、習慣、道德などの點で實際から非常に懸け離れた日本が適してゐるからなのだ。距離に於いて最もかけ離れた場所であることが必要である如くに……。

つまり其れは、現實的な覊絆から逃れ度い、或は、實現の許されない人間の願望が、させる業だ。スウィフトをして『ガリヴァー旅行記』を書かしめ、多くの科學的小說家をして月世界や火星の探險記を書かしめ、百萬年後の未來記を想像せしめたと全く同樣の機構に依つてなされてゐるのだ。その空想の荒唐さを色彩るためには、何萬キロの距離も、大人國も小人國も、千萬年後の未來も月世界も、アラビアン・ナイトの魔術性も、總て極端なもの、妄想的なものは一樣に役に立つのである。

所で此のエキゾティシズムであるが、假に左翼の批評家の口吻を借用すると、此處には帝國主義的段階に迄到達した資本主義の、植民地への侵略の、エピソオドがあり、そのエピソオドへの樂しい回想、感傷があると云へるであらう。何故なら、今では現實的情勢がそんな甘い汁を彼等に吸はせなくなつたのだからと。(つまり、これ

は分析的に云へば、一種の退行現象である。）成程、そんな所もありさうである。此の物語の重大な要素となつてゐる日本の描寫、例へば、釣鐘と佛壇と柏手と觀音樣に示される佛教的な諦め、お蝶夫人が最後に自刄する短刀に刻まれた封建的武士道精神の標語、リキシヤ、提灯、お叩頭、煙管、シヤミセンに於けるピエル・ロチ好みの奇妙な風俗、と對蹠を爲して、ピンカートン海軍大尉（此の植民地の侵略者の手先きの一將校）は、堂々たる艦隊、武裝せるアメリカ文明を背景にして登場する。

此の單純な優越感は勿論、ピンカートン大尉の、或は此の映畫の製作者の、（何れでも同じ事であるが）、ナルチスムスを刺戟するので、それがディアログの中に、冗談（ウイット）の假面をつけて出て來る。大尉がマダム・バタフライに身分を問はれると、彼は虚勢を張つて答へる。『僕は大統領とアメリカを切盛する司令長官なんだ』と。夫人は、又は漫畫化された日本は、此の山師の大尉の前に跪いて、『司令長官樣』と云つてお叩頭する如きがそれである。

そして今日のアメリカの觀衆が此のウィットに大聲を上げて笑つたとすると、製作者の意圖は近年逼迫して來た日米間の反目を甚だうまく利用したと云へる。それに彼等が此の代償に賴らなくてはならなくなつたのは、現實が正にその反對であるためであるとすると、我々は安じてよいのである。と申したら、分析は行き過ぎてゐるであらうか？

行き過ぎてゐたとしてもよろしい。此處で私が指摘し度いのは、此の現實的情勢は決して物語と無關係であつてならないと云ふ事である。若しも映畫を製作する事に政策的意味を、社會的意義を見る時は、此の關係を檢討するのが必要だと云ふ事である。正に此の故に、政策そのものを說明的に畫面に描寫するソヴエット・ロシアの映畫は初步的であり、政策的立場の根據を取り違へてゐる。その映畫が外國に於いては賞讃されてゐるのに、故國の大衆からはうるさがられて居るのはその爲である。如何にそれが學術的に整頓され、藝術的に描寫されやうとも、宣傳意識や教訓的態度は觀衆の心持の素直さをか

き亂す。それより遙かに低級であるが、心樂しますアメリカの喜劇を彼等ロシアの民衆が歡迎し、政府はこれが輸入防止に躍氣になるのはその爲であらう。人類の無意識の中に横たはる、快樂衝動を無視し、神經の弛緩を頓に要求してゐる大衆に課するに、千篇一律的敎訓を以てしてゐる事の迂愚は、マルクシスムスが個人的心理學に對して示した筈の深き理解に比しては、却て皮肉な結果ではなからうか。而も、辛じて法律(!)でそれを彌縫し得るのが、彼等の身上であるとするならば。ロシアの檢閲官は、つまりは(分析的に云へば)抑壓を振ふ前意識の檢閲官の人格化である。彼は嚴格で何一つ見遁さない。これでは藝術的本能が始めから全く閉め出されてゐるのだ。陽氣なアメリカ人を見給へ。彼等は『お蝶夫人』に何を云はせたか。デモクラシイとフェミニズムとが其の國の政治的形態と其の道德的形態とを決定し、それを最高の文明と稱してゐる彼等が『お蝶夫人』に見た理想的な女は如何であらう。夫から離婚を云ひ渡された時に、尚死を以て貞節を守り續けるお蝶夫人は、政治的權利に依つてスカンダアルから防禦されてゐるアメリカの婦人に比較して何と云ふ皮肉な修正であらう。女天下と離婚法にうなされた彼等の毎晩見度い夢が此處にある!分析の現像液中に浸して見ると、此の理想型の中に母性の原像が現れ出て來る。幼兒時代への退行と一口に云つてよからう。エトランジェと申すものは、好奇心の強い幼兒に取つて最も魅力のあるものなのだ。が、性の世界ほど又、幼兒等に取つてエトランジェな世界があるであらうか。エキゾティクな女は幼兒期に於いて性の秘密に包まれて居た母親の機能的（フンクツィオネル）象徴化である。從つて全体として、エディポス型の夢と云ふ事になるのである。これ以上の更に細かい分析的解釋を私は省略する。その方は『夢の註釋』を御手に讀者自身試みるがよろしい。私自身としては、精神分析學は凡ゆる現實的情勢を無視する所でなく、此の現實から出發するものである事を云ひたかつたのである。性本能の摘出を分析法の全部であると誤解する淺薄な一派に對して一言申し上げたかつたからである。

最後に附加しておくが、私の分析自体は、原作と、それを取り上げたアメリカの映畫製作者の覗ひ所とを一々區別してゐないけれども、それは原作が此の場合新たに書き下ろされたものと見ても、結果に於て殆ど變りがないからである。（完）

寄贈著書

一、「現代都市文化批判」伊福部隆輝氏著（神田中猿町一七番地、日東書院、金壹圓五拾錢）

一、「詩帖愛經」市川忠男氏著（世田ヶ谷太子堂四七一、新進詩人社、金六拾錢）

一、「指紋と運命」長谷川滔浦氏著（神田區今川小路二ノ一、アルス刊、金貳圓）

一、「春の土」生田花世氏著（牛込區天神町五十三、詩と人生社刊、金五拾錢）

一、「ルウルウ」森茉莉氏譯（神田區表神保町二崇文堂、金八拾錢）

一、「白い眼」倉田潮氏著（牛込區早稲田町三十八番地、新時代社、金拾錢）

寄贈雜誌

★旅と傳説（五月號）三元社　★海（三十四號）大阪商船會社　★澁谷文學（四月號）國學院大學　★東京堂月報（四月號）★第六感（五月號）★佛蘭西文藝（五月號）★日滿美術（創刊號）★詩箋（五月號）　★新進詩人（五月號）　★エコー（五月號）三省堂　★文學表現（五月號）　★藝術殿（五月號）★櫻　五月號）★黄道（五月號）★新演劇（五月號）★同志社文學　第十五號（同志社英文學會編）★試論　創刊號（東北帝大英文學會編）　★英文學誌　第二號（法政大學英文學會編）　★英語青年　六十九卷第三號（英語青年社）★變種（第一輯）　★學藝（昭和七年十一月號）文理科大學

講座欄

精神分析とは何か

高水力太郎

精神分析と云ふ語には正當或は不正當な種々な意味があるが、精神分析の何たるかを明かにする前に、その言葉の詮鑿をしておくことも、あながち無用ではないと思ふ。最も廣い意味では、この語は時として心理學の分野に於ける殆ど一切を名付けるもの丶如く用ゐられてゐるが（少くとも西洋諸國に於いては）、併しそれは出版屋やジャーナリストたちの賣らんがための出鱈目名稱で、普通の心理學と精神分析とは截然違つたものである。たゞこの精神分析と云ふ語が新しくて驚異的であるところから、この名を彼等が濫用してゐるに過ぎないのだ。併し今日では幸にして、こんな亂暴な用ゐ方をするものは漸次に減つて來た。

も少し局限された意味に於いて、併しそれでもまだ誤解を招き易い程度には廣過ぎる用ゐ方は、起源は同じであるが今日では非常に違つたものになつて來てゐる種々な心理學派の業蹟を、等しくこの名を以て呼ぶことである。彼等諸學派の者等自身が既に御互にこの一つの名稱で彼等を總括的に呼ぶことの不便を痛感してゐるのだ。こゝに云ふ諸學派と云ふのは三つであつて、それ等は何れもその起源を、ヰインの學者ジグムント・フロイドが十九世紀末頃に發見したところに負ふてゐるのである。

二十世紀の頭初に至るまでジグムント・フロイドは、事實上殆ど一人で仕事をして來たのである。たゞ共働者があつたと云へばそれはフロイドの先輩たるブロイヤー一人であつた。併し一九〇二年以降、フロイドの周圍には漸次に追隨者の群が集り、遂に一九〇八年には第一回の精神分析總會が開かれ、一九一〇年には國際精神分析學會が創立されることになつた。ところが國際學會創立後間もなく、二人の重要なる會員が漸次に離反して行つた。

即ちまづ精神分析理論の或る特殊の點を强調し、斯學說の他の旣定の點に反對を表明することに依つてゞある。遂にそれ等旣定の點を、十分に相互に檢討することが出來ないやうな事情になつて了つたので、提携もまた全然不可能になつて了つた。これ等離脫の二人はアルフレッド・アードラー Alfred Adler とユング C.G.Jung とであつた。彼等はそれ〴〵に自說を、個人心理學 Individual-psychologie 及び解析心理學 Analytische Psychologie と呼ぶやうになつた。これ等二者の內、アードラー學派の方が組織が緊密で、その學說の体系も一層整然としてゐる。ユングの學說はアードラーのほど組織的ではないが（尤も『心理的タイプ』說のやうな精緻な說もあるが）、さうしてその學說を全般的に採用した追隨者の特殊の群もなかつたが、併し相當廣汎な影響を殊にスヰツル（彼はスヰツルの人である）、及び英米に於いて及ぼしたのである。これ等兩學說の特質に就いてはやがて評論の機會があるであらうが、併しそれはそれとしてフロイドの本來の說はそのまゝに存續し、最初からの精神分析の名を以て今日なほ呼ばれることになつた。現今に於いては、「精神分析」の名は、「醫家や心理學者の間には、殆ど何等の例外なく、フロイド派を意味するものと解せられてゐる。この事は歷史的正統さから云つても學的正確の倫理的必要から云つても、當然の事でなければならない。それ故に、吾人がこれからこの語を用ふるのは、この意味に於いてゞあることを諒承せられたい。

併しながら、この比較的の狹義（即ちフロイド說に限つた場合）に於いても、『精神分析』は數個の意味を持つてをり、それ等を理論上で區別することは固より可能である。第一に、精神分析と云ふ語は一つの方法――心理學的研究であつて同時に療法であるところの方法――を意味してゐる。第二にそれはこの方法に依つて發見せられた諸々の事實を意味してゐる。第三に、それは個人の直接的觀察以外に依つて得られた事實――隨分廣汎な種々樣々な分野から實踐的に集められた事實――に對して、分析的方法、見地、並びに理論を適用することを意味してゐる。

我々はこれからまづ方法を研究し、次いで事實と理論とを研究して行かうと思ふ。簡明を期するためには、事實を理論と關聯させて、理論の光に照して、記述して行くことが必要である。嚴格な科學上の目的から云へば、如何にして事實に適應するために理論が生れて來たかを細かく論ずるのが好ましいのではあるが……。後者の遣り方を採るならば、精神分析發達の全過程を細かく論ずることが必要になつて來る。が、これは我々の現在の目的以上に出づることである。何れにもせよ、讀者諸氏は、或る方面からの反對説はあるにもせよ、明かに役に立ち、また有爲なる總ての分析者たちが今日一般に受容してゐるところの理論の構成を知るだけで滿足せられることであらうと思ふ。これから精神分析を講じて行く内に、吾人は時々斯學が如何なる分野に主として適用せられたかを明かにするであらう。

斯學は本來、醫療の畑から生れ出たものであるけれども、吾人は醫療方面にのみ考察を局限せず、心理一般、社會一般の方面にもこれを考究の分野を擴充して行きたいと思ふ。

わが國に於いては、斯學輸入の頭初から『精神分析』と云ふ名稱で呼ばれてゐるが、『精神』と云ふ語は面白くない、神靈術など〻混同される嫌ひがあると云ふ向きもあるが、これは致方がない。『心理』と譯してもよいのだが、これは普通の意識心理のことをさう呼ぶので、やはり無意識心理を對象とする斯學は『精神分析』と呼ぶ方が妥當であらうと私は信ずるものである。

*

右の講義は、前號に伊東豊夫氏がフリウゲルを譯せられた關係上、フリウゲルの意見に從ひつ〻書いて見たものであることを斷つておく。來月號からは、本欄をも少し擴張し、諸氏の質問にも應答いたしますから、どん〳〵御寄書を願ひます。

相談欄

結婚を嫌ふ年增娘

（問）私の娘は今年廿七になりますが、未だに緣付かないので心配の種子となつて居ります、娘のは話がないといふのではなく、今までいくらもあり、やらうとしても絕對に拒絕するのです、其頑固には家族のものは勿論親戚のものまでも手古摺らされて居ります、尤も女學校を出てから丁度よい年頃には非常に體が弱く、醫師からも結婚を禁ぜられて居た位で、其上父親の病氣等で早くも此年になつてしまつたのです、然し昨年頃から父も安心といふ程度になりましたし當人の體も健康になつたので、親としてはどうしても嫁にやりたいのです。尤も元來男の中の女の子ですから我儘一ぱいに育つた關係上、家を離れるのがいやなら婿でもよいといううて居りますのに、結婚して家庭を持つ事は私には絕對に出來ぬと、いくらよい話を持込んでも聞き入れないのです、そして一心に或宗敎を信じ、其爲には家の事も親のことも念頭にはなく、たゞ〳〵其指導者のみを崇拜して、私などは男の中の女の子ですから、唯一の話相手になるものと樂んで居りましたのに其望みも今は空しく、當人は死んだと思つて私なんか期待しないで吳れ、嫁入させる費用も自分の信仰の爲に貰ひたいなど蟲のよい事のみ申し、少しも家の事を思はずどうして斯う變人が出來上つたかと明けても暮れても惱まずには居られません。先生樣何とか此の娘が結婚する氣分にはならぬものでせうか、どう導いて行つたならよろしいでせうか、御意見を（武藏野、惱む母）

（答）御手紙を拜見して、注意すべき個所を三つばかり氣附きました。それは御本人の父親が病氣であると云ふこと、男兄弟ばかりの唯一の女の子であると云ふこと、『家を離れるのがいや』らしいと云ふことなどです。御病氣の父親の看病は主としてその娘がなさつたのではな

いでせうか。御手紙だけでこれだけの推斷を下すことは甚だ輕率のやうですが、父親又は兄等に對して近親姦的な幼兒願望又は經驗を本人が持つてゐる、又は持つてゐたのではないでせうか。或は少くとも無意識裡に於いてさう云ふ空想を抱いたことがあつたに相違ないと推量されます。無論、本人はそんなことは十分に意識してをらぬし、周圍の何人も知らないにきまつてゐますが、ヒステリー（御本人の異常心理はヒステリー性のものであることは勿論です）は常に屢々たゞ空想に因るだけで、何等現實の体驗には關係のない場合も多々ありますから、御本人の場合も勿論それに相違ないと思ひます。常に必ずとは云はぬが甚だ屢々ヒステリー患者、神經症患者の逃道であることをよく承知して貰はねばなりません。

御本人の愛慾（リビドー）の處分過程を、御文面についてだけでの分析で診斷して見ますと、まづ近親に纒綿したリビドーが近親姦の恐怖に依つて禁斷され、それがため愛慾を他の對象（何れの對象もやはり近親の代償に他なりませんから）に向けることが許されず、行き場を失つたリビドーは無理遣りにも非性慾的なものに『昇華』されねばなりませんので、それには宗教の『指導者のみを崇拜』することが最も普通の方法であります。宗教の指導者と云ふものは、常に『父』の精神的代償だからであります。

で、何か御本人の夢を報告して御覽なさい。それとなく聞き出して私に知らせて下さい。必ず近親姦的願望の證據が舉がるに相違ないと信じます。その無意識願望を意識化し、その罪障感を自意識すれば、さう云ふヒステリー性の宗教熱はなくなると共に、精神は直ちに健康になるに違ひないと信じます。紙上で分析相談に應ずるのは、少し無理かも知れません。（R）

母の亂行から弟は厭世悲觀

（問）可哀想な弟の事でお伺ひ申上げます。私の實家は母と廿六歲の弟の二人丈です。母は家付きの娘で品行

も惡く、父の在生中から情夫を持つたり酒を飲んだりして父や私達を惱ませました、弟が中學に通つて居た十七歳の春、酒に醉つて歸宅した母は淺ましくも年若い弟の前でみだらな振舞ひをして弟を恐れおのゝかせました、それ以來弟は人の世のあさましさを知り、終に變に暗い性質になつて終ひました、病床に居た父はこんな事で死を早めましたが母は父の死後それを幸ひとばかりに、ます〳〵淺ましい生活を續け、今は弟と同年の歌劇役者上りの男に家を持たせて貢いでゐます、二人姉弟の私が嫁に來てから、弟は淺ましい母と別居する事も出來ず、苦しみ乍らも今日に及んでゐます、所が此度、私の夫の妹を弟の妻にとの話があり、お互に知り合つて好きなのですが、弟は自分は妻を持つ氣はない、寺へでも入つてしまひたいなどゝいつてゐます、どうしたものでせう姉として此哀れな弟を幸福にしてやりたいのですが、當人の望むまゝに寺へ入るやうにした方が幸福でせうか、私の取るべき道を（櫻田、苦しむ姉）

（答）弟さんは正に現代日本の小さなハムレットですね。弟さんの無意識の心持を私が代辯すればかうです。……俺は母を愛してゐる。母は俺をのみ愛さなければならない筈だのに、父を愛し、それに滿足せぬやうになれば次には當然自分の方に向つて來なければならない筈だのに、『情夫』の方に赴いた。而も母は尊敬し得べき立派な人格者でなければならないのに、甚だ不滿足な存在である。これが自分の尊敬し得べき自分自身の母だとすると、自分自身の尊嚴もどうやらあやしくなる。さうして見ると、自分自身は立派な女——觀念上の母の如く立派であるべき筈の女——と結婚する資格はないし、また母にして既にこの通りだとすると、一切の女は信用も出來ない。これではリビドーを非性慾的なものに、無理やりにも『昇華』纏綿させるより外に途はない。……とかう云ふのでせう。正にハムレットですね。ハムレットも母を、ハツキリとした言葉を用ふれば尊敬し戀してゐたのです。ところが、その尊敬してゐた母は尊敬出來ない叔父と尊敬出來ない行爲をして了つたのです。そこでハムレットは母に失望すると共に、母に嫉妬したのです。

叔父に對しては嫉妬すると共に同罪者として（共に父に反抗した者として）の同一化を感ぜずにはゐられなかつたのです。他人の罪を憎むと共に、自分自身の罪障を痛感せずにはゐられなかつたのです。そこでハムレットは母代償たるオフィリアに向つて『尼寺へ行きなさい』と云ふが、自分自身も行く必要を感じてゐたのであらう。あなたの弟さんも『寺へ這入つて了ひたい』と同じことを云つてゐられます。母の亂行に依つて何故に、弟さんが自分自身の罪障感を喚覺まされることになつたのでせうか。とその心理的機制を考へて頂きたいと思ひます。この點は第一問の方とよく似てゐますが、一体に若い身空で寺へ行きたいなど、云ひ出すのは、必ずその無意識の底に近親姦の願望空想がひそんでゐることを知らねばなりません。

これも夢を見せて頂きたいものですね。これからはなるべく細かい日常生活の癖や、變つたところや、いつも見る夢の二三を書添へて送つて下さるやう、切にお願ひいたします。（R）

母の亂行から弟は厭世悲觀

祝祭劇印象

弘津千代

拜復御盛會でまことにおめで度うございました。およろこび申上げます。お芝居は二つながら興深く拜見致しいろ〳〵お教へいたゞくところがございました。殊に滅多に見ることの出來ません希臘劇を見せていたゞきましたことはいろ〳〵の意味で勉强に相成りました、あつく御禮申上げます。とりあへず右御返事のみ申上げます。草々

本間久雄

エディポスは最近劇壇の大きな收穫だと思ひますテキストを讀んで想像してゐたことが、眼前に生々と出現したので、異常な喜びを感じました。演出者と俳優諸氏とに感謝したいと思ひます。

長谷川誠也氏の講演

劇終了後の記念撮影

フ博士喜壽祝祭劇記錄

動機・目的・經過

フロイド博士喜壽祝祭劇は四月二十日(木)、二十一日(金)の兩夜、午後六時半から十時迄の間に催されて(會員券一圓)、成功裡に無事終了した。この催しは東京精神分析學研究所の數年來の事業たる『フロイド精神分析學全集』(春陽堂版)が最後の卷たる『精神分析總論』の出來と共に四月中旬頃完成するのと、それと同時に同研究所から機關誌『精神分析』が創刊されるのと、更に五月六日は斯學の父祖たるフロイド博士の七十七回誕生記念日に相當するので、この三つを記念する意味から企てられたもので、それは動機であるが目的としては斯學と文藝との提挈を圖つて見ようとするにあつた。何れにもせよ、科學と藝術とは必然の關係のあるものではあるが、この度はこれを判然と意識的に行つて見ようとしたところに劃期的な新しさがあつた筈である。

この催しの計畫が始めて立てられた當時から終了までの大體の日記を、左に掲げておく。(記者)

一月二十日　研究會例會の席上にて大槻氏から松居桃多郎氏に內相談的に、この計畫が打明けられた。

一月二十八日　大槻氏、松居氏父子を下落合の松居氏邸に訪問して、愈々祝祭劇擧行の決心を定める。

二月二十日　研究會席上にて、祝祭劇に就いての悲觀說も出たが、結局決行することに一同の意志定まる。

二月二十四日　朝日新聞社計畫部に講堂使用料を渡し契約を交す。

三月二日　大槻氏夫妻、太陽座統率者竹中莊一氏と共に松居家を訪問、打合せをなす。

三月七日　後援者としてポスター、趣意書、入場券などを印刷してくれる春陽堂へ、松居桃多郎氏考案のポスターと入場券の下圖を渡す。

三月二十日　入場券と趣意書出來。研究會席上にて會員諸氏に分配す。

三月二十五日　フロイド博士の大肖像、大槻氏宛にヰインより到着。祝祭劇のために幸運を所員一同喜ぶ。

四月四日　ポスター出來。

四月六日　帝劇裏の稽古場にて稽古開始。今日は松居氏の『エディポス』本讀み。

四月六日　『養父』本讀み始まる。

四月十五日　石橋武助氏今日より三日間稽古場に來り衣裳に模様を描く。

四月十六日　衣裳をつけて稽古する。

四月十八日　大道具を朝日講堂に搬入。

四月十九日　朝日講堂にて舞臺稽古、午前より夕方まで。萬事好調、一同安心。

四月二十日　第一日、（雨天）

四月二十一日　第二日、（快晴）

五月六日　研究會、祝祭劇終了慰勞會を兼ね、會計係及び書記長より決算報告あり。

劇後雜感

松居松翁

興行とか、演出とかいふ事には、不死身（ふじみ）と云つてもよい程に鈍感になつて居る愚老の事であるから、今度のフロイド博士喜壽祝祭劇に對しても、極めて冷靜で居らるべき筈であつたが、併し今度に限つて、久し振りで妙に心臟の小やかな鼓動を感じないでもなかつた。「どうかして成功させたい。實質的にも、經濟的にも。いや成功とまではいかなくとも、失敗には終らせたくない」といふやうな希望の外に、不思議に一種の責任感にさへ脅迫されないわけにはいかなかつた。

一体、此催しの相談を、大槻さんから最初に受けたのは愚老ではなくつて、倅の桃多郎であつた。それは本年一月二十日に於ける研究例會の席上でゞあつた。何でも其時のプログラムは、會員二三の講演と大槻氏の新作精

神分析劇「養父」と、精神分析學を應用した桃多郎作の舞踊詩「リシユヤシユリンガ」を上場したいといふ大槻氏の意圖であつたらしい。が、伜は自分の物を上演する事は徒らに費用のみ多くかゝりながら、大衆の喝采を博し得ないといふ豫見から、自作に代へるに、希臘のソフオクレスの作「エディポス王」を以てすべきを慫慂したらしい。これは我子ながら天晴の思ひつきであつたと思ふ。精神分析學では、今やエディポス・コムプレクスは重要なる研究題目で、父を殺し母と婚した彼エディポス王の悲しき運命は、神の命令でもなく、さりとて此王に限れる宿命でもなく、それが人間一般通有の幼兒的願望だといふ……此意味に於いて、此劇作を取扱つた演出法は、泰西にも全くないと云つてよろしい。われ〳〵親子が手許に蒐集してある、幾十の泰西のエディポス演出の論文、繪畫、批判、寫眞等を見ても、この最新の科學を藝術に應用した演出は一つもない。若し日本で精神分析の學徒が、舞臺藝術の分野へ手を出すならば、眞先に手をかくべきは、此エディポス王でなければならぬ。大槻氏も伜桃多郎のこの提言をきいた時、一も二もなく贊成されたといふ事であつた。

會員の總會の結果、愚老も開演當夜の講演と、上演脚本の製作——即ち「エディポス王」飜譯の仕事にたづさはらなければならない事になつた。併し愚老の意見では當初は、會員全體の衆議によつて、萬事斯學の視角から見た飜譯をしようといふにあつたのだが、脚本製作に費やすべき時間がだん〳〵縮小されて來ると、こんな贅澤な、實際には行はれ得ない手段を取つては居られなくなつた。最後にはせめて親子共譯といふ事にしようと思ひながら、それさへ意に任せぬ事となつて、愚老一人で飜譯し、これを伜が上演に適するやうにモンタージユしてくれるといふ事で、滿足するより外にどうする事も出來なくなつた。

飜譯は前號の本誌に掲載した通り、甚だお恥かしいものであつたが、之を演じた太陽座の俳優諸氏、中にもエディポス王を創作した山村聰氏は、あの難演の劇作を兎も角も演活かしてくれた。それには音樂製作の山崎氏、

指揮の篠原氏、並びに演奏の女子管絃樂團員、ピヤアノの伴奏の門馬孃、オリオン、コールの吉田國手初め多數の合唱團員、配光の遠藤氏、衣裳の模樣の揮毫に努力して下さつた石橋武助畫伯等の助力に對しても感謝しなければなるまい。もう一つ、内輪の事を申して甚だ恐縮ではあるが、愚老は伜の桃多郎に對しても實は、感謝しなければならない事があるのだ。彼が演出、舞臺裝置、衣裳考案、配光などを一手に引受けて四角八面に働いたのもさる事ながら、彼を左樣させたには或理由があつたのだ。愚老は物に熱中すると、いつも世話を燒き過ぎて、最後は屹度同志から恨まれる樣な結果になるのが通例なのだ。それをいつも苦々しく眺めて居た桃多郎は、最初に愚老に釘をうつた。「パヽが何にも口を出さないといふのなら、僕は出來るだけの事はキチンとやつて御覽に入れます。が、パパが例の親切過ぎた世話を燒くなら、私は此仕事に手を出す氣にはなれません。」そこで愚老はグウの音も出せなくなつた。而して此仕事に何等の御手傳も出來なくなつた。併し、それが今度の成功を得た主なる原因の一つと確信して、愚老は此點で伜に對して滿腔の謝意を表したい。

幕内の方はそれとして、扨心配なのは經濟方面の事であつたが、聞けば精算の結果これも何がしかの利益になつたさうだ。一日位のあの種類の催しで、少しでも損をしなかつたら非常な成功だ。が、此成功を齎した殊勳者には、何と云つても大槻夫人を推さなければならない。其日まで一月の間の彼女の努力は、全く涙ぐましい位であつた。會計、報告、營業に關するあらゆる必要事を、小氣味よく整理して行く合間々々に、戸別訪問的に入場を勸誘して歩く。この働きぶりはたゞ〳〵驚嘆の外はなかつた。此人あるが爲めに、全會員が心から此仕事に興味をもつてくれて、入場者の數が愚老の豫期したよりも非常に多くなつた。今度の祝祭劇はフロイド博士の爲めに共學徒としての職務を果したと同時に、會員間に、明朗な、溫かい共樂の感情を漲らせる媒介となつた事は、疑ふ餘地もないと思ふ。これ等の點から云つても、此お祭りは決して徒爾でなかつたやうに思ふ。

『エディポス王』演出覺書

松居桃多郎

一 戯曲の分析

「諸君の中の多くの人達は、あのソフォクレスがこの題材を取扱つた悲劇の、深刻な効果を自分自身に體驗されたことゝ思つてゐる。このアテネの詩人の作品は、エディポスがずつと昔に犯した罪科が、巧みにひきのばされた審問によつて、如何に次から次へとあがつてくる新しい證據を堅めて、漸次に明るみに暴露されて行くかを描寫してゐるのである。この書きぶりは、精神分析の徑路と、ある點非常に類似してゐる。」――フロイド。

今玆にソフォクレスの作品を舞臺に演出するに先立つて、その素材を構成する種々の傳説の研究をして見たい

ギリシヤ神話によると、エディポス王が君臨したテーベの町――この戯曲「エディポス王」の舞臺としてあるテーベの町は――フェニキヤの王子カドモスが長い遠征旅行の末、その地に住む大蛇を退治した後に建設したものである。大蛇とは被征服者即ち當時多島海地方に住んでゐたクリート人が崇める蛇女神を指すのではないかと思はれる。カドモスがその大蛇の齒を地面にまくと、そこから多くの人間が出て來て、それ等がテーベの町を建てたと云はれてゐるが、之は大蛇をトーテム動物と崇むる一氏族酋長を殺した事にあたるので、しかもカドモスは酋長のみを殺して、其住民はそのまゝにして置いたゝめ彼の後數代にして、重なる不幸の爲めにカドモス王家はテーベの王位を去らなければならなくなつてしまつた。併し其後もテーベ人は「カドモスの末裔」なる事を言傳へて現にソフォクレスの戯曲中には繰返して「カドモスの末裔」と言ふ言葉が出て來る。この言葉こそ彼等が自ら卑下してフェニキヤの屬國である事を認めてゐた證據で、その結果テーベの町は折々本國のフェニキヤや或はスフィンクスを信ずるハム系民族などの侵掠を受けて居

た。コリントから來たエディポスがスフィンクスを追ひはらつた（つまりハム系民族の勢力を驅逐した）のも、その當時の一挿話に過ぎない。歷史家の說によるとそれは紀元前十二三世紀の頃で、トロイ戰爭の直前との事であるから、ギリシヤ民族はそろ〳〵南下し始め、クリート人は次第に勢力を失ひ出した頃にあたる。

さらに傳說によると、殺された大蛇の呪により、テーベの町には終始不幸が降かゝつて來るのだと云はれてゐるが、精神分析によればトーテム動物を殺すと云ふ事は取りも直さず、父殺しのタブーを犯した事を意味するもので、テーベの開祖がすでにエディポスと同じ犯罪を行つてゐるのである。否、テーベ市の父なる支配者は、代々その子供等なる被治者の犧牲となる運命を持つてゐたのであつて、ライオス王が其子に殺されると云ふ豫言こそは、實は祖先の流血の罪（Blutschuld）に對する贖罪を强ひられてゐるので、大きく云へば後に同じセム系民族に屬する基督が、人類の原罪（Erlsünde）を贖ふためにに十字架にかゝつたのと同意義である。フレイザーは次の意味の事を云つてゐる。「初期の王國は專制主義で、人民は主權者の爲めにのみ存在したかの如く思つてゐる人があるが、事實に於ては反對に主權者こそ臣下の爲にのみ存在する者である。王の生涯は人民の幸福のために、（Zum Besten seines Volkes）其の義務を遂行し得る間のみ價値を有するのであつて、若し適當に義務を遂行し得ざるに至れば、今まで人民が王に捧げてゐた保護、献身、宗敎的尊敬は、直ちに憎惡と輕侮に變り、恥辱とすべき追放を受け、身を以て逃れることすら有難い位なものである。今日は神をして崇められ、次の日は罪人として死刑に處せられる。」

この事實は最近に至るまで殘つてゐて、現に西部アフリカのある地方では、王が逝去すれば、次に選ばれた者は直ちに捉へられ、縛られて、自ら王位を受諾する意思を明言する迄は「社」（Fetishhaus）に監禁される。併し時々之等の決定された後繼者の中には、この恐るべき榮譽を回避する爲めに武力を以て拒む事すらあると云はれてゐる。シエラ・レオネのニグロ族では選ばれた後繼者

が甚だしく反抗して王たる事を拒んだが爲めに、已むを得ず他國人を彼等の王とするの餘儀なきに至つた。太平洋中の珊瑚島、ニネ等に於ては何人もこの責任重くして危險なる役目を引受ける者がない爲に、君主制は事實上其の終りを告げた。

ライオス王の死後、當然王位に即くべき義務のあるクレオンがエディポスの現れる迄空位のまゝで置いたのは何故か。又エディポスが追放されても尙王位に即かず、自分はエディポス王の遺子の輔佐の役で滿足してゐたのは何故か。之に就ては最早何の説明も要しないと思ふ。日本でも鎌倉時代の源氏と北條家の關係が之と非常に類似してゐるのは面白い。ソフオクレスも其劇詩のマヌスクリプトの五百八十三行目より六百十五行目の間で、極めてコンヴエンショナルな表現法ではあるが、クレオンに言釋をさせてゐるのは面白い。

扨いよ〳〵幕が明くと、大勢の市民が、エディポスの館の前に歎願にやつて來る事が、すでに此の戯曲のモーテイヴなる父錯綜（ファーター・コムプレックス）の表れである。一體子供の觀念に於ては、父を最高度に評價すると同時に、極端な不信を伴ひ、最强の競爭者と看做すと同時に、最大の保護者として賴むもので、學校に於て學生が教師に對して、工場に於て職工が雇主に對して、國家に於て國民が政府に對して彼等が經驗するすべての不幸の責任は皆その教師なり、雇主なり、政府なりに在りと認めるもの、一にこの父錯綜（ファーター・コムプレックス）に源を發するのである。

テーベの市民等は彼等が殺した父なるライオス王（人民が手を下した譯ではないが、無意識に於ては致死願望が存在してゐる）と和解する爲めに、今や新しいトーテム（エディポス王）を犧牲にする情緒が彼等の無意識面に擡頭し始めて來た證據である。而して此の悔恨と罪の意識(Schuldbewusstsein)の衝動はやがて死者に對する愛慕の衝動に移行して、曾て父の現存によつて妨げられ、その死によつて獲得された行爲(女子の獨專)を、今や精神分析の所謂「死後の從順」(Nachträglicher Gehorsam)と名づけらるべき心的狀態に依つて、再び抑壓するに至る。之れがやがて第二の願望の抑壓、即ち骨肉不倫禁止

(Inzestverbot)タブーの源となるのである。チレシアスの豫言は、實に是等のタブーを露骨に言ひ現はしてゐるに過ぎない。換言すれば、例へ疫病その他の事が起らずとも、人民は何かの理屈をつけてエディポス王に歎願して、結局フォイボス神の託宣を請ふにきまつてゐる契機が來てゐるのである。又チレシアスにすれば相手がエディポスであらうとなからうと兎に角ライオスの後繼者に向つて、例の二つのタブーを犯した罪を責めればそれでよいのである。何故ならば、誰にした所で少くとも無意識面で確實にこの罪を犯してゐるにきまつてるから。

故にフォイボス神の託宣も、チレシアスの豫言も、妃ヨカスタの言葉の通り人爲的な物であつて、決して神秘的なものではない。エディポスも亦己の無意識面の願望に對する良心の呵責から逃れる爲めには、曾てフロイドが說いた嫉妬狂の夫人や、追跡性パラノイアの男の例の如く、最も自分に近い人(之は又同時に父の代償である)が、何か自分に對して容易ならぬ惡謀を企てゝゐると假想して、強ひて彼を譴責するより外に、道が捜せなかつた。そして此大役を振あてられたのが、妃の弟クレオンなのであつた。此處に再び父錯綜(ファーザー・コムプレックス)のモーティヴが繰返されて出て來る。故に第二挿話(エペイソディオン・デイテロン)の前半におけるエディポスの怒りは、普通に解釋されてゐるが如き猜疑からではなくして、所謂「理屈づけ」(rationalizaton)であると云ふ事を理解して置く必要がある。

この戯曲の第二のモーティヴたる骨肉姦(Inzest)のコムプレックスはエディポスが生れたその日にすでに起つてゐるのである。妃ヨカスタはフォイボス神の託宣を信じて彼女の子供なるエディポスを殺さうとした。併し當時ライオス王に對する死の願望をいだいてゐたのは生れたての赤ん坊ではなく、彼女自身の願望が託宣に變裝してゐた事に妃は氣がついてゐなかつた。同時に彼女は自分の產んだ子を無殘な方法で殺さうとしてゐた。意識面で殺さうと思ふ事(實は殺してゐない)は、極端なる愛の双存性(アムヴァレンツ)である事は云ふ迄もない。ステーケルは更に一歩進めて、子供は男女の性器のシンボルであると喝破してゐる。その上彼女は御丁寧にも、エディポスの踝にペ

ニスの象徴たる針まで突さして、森の深い山奥に捨てゝ野獸の餌食にさせようとした。しかもこの事に對して、妃は幾分かは不愉快かも知れないが、實際上には少しも激動した樣子がないのを見ても、例の「夢の註釋」に於ける誘惑恐怖のために外出恐怖症(アゴラフオビヤ)に罹つてゐる若い女の夢と同樣である。

原文の九百八十行以下で、妃は「多くの人は夢でその實の母と同棲する事を見るが、その樣な事は少しも氣にかける必要がない」と云つてゐるが、之に就いてフロイドは「私達は夢を出鱈目だと考へない。少くとも澤山の人が同じやうに見る定型的な夢は、意味重大と見てゐる。そしてヨカスタが語つてゐるこの夢は、實にエディポス神話の奇怪な凄愴な內容に觸れてゐることを疑ふ事が出來ない。」と言つてゐる。

エディポス王は、極力父に對する無意識面の死の願望を否定しようとあせるのに反して、妃は事毎に、骨肉姦(Inzest)コムプレックスの存在を抹殺しようと苦心してゐる。原文の百七十行目以下で彼女が云つてゐる通り、彼女は十二分に神を信仰してをり、運命をも認めてゐるのだが、唯自分の願望の反映なる託宣や、豫言には非常なる恐怖を感じ、之に打勝つために――換言すれば無意識の願望を抑壓する爲めに――出來得る限りの「理屈づけ」を行はうとしてゐるのだ。一方エディポス王が徹底的にライオス王の死について引いては託宣や豫言の根據について探求しようとするのは、原文の百三十二行目以下で言へる如く、ライオス王の爲めばかりではなく、彼自身がライオス王の非運の再現者となるを避ける爲に、「トーテムを殺すべからず」のタブーを强調してゐるのである。所が妃自身は曾ては無意識に於てライオスの死を望んだのであるから此探求は彼女にとつて非常な苦痛である。殊に例の羊飼を呼ぶ事は第二揷話(エペイソディオン・デイテロン)では婉曲に、第三揷話(エペイソディオン・トリイトン)では極力反對しようとする。何故ならばこの羊飼こそは、實は彼女の分身なのである。彼女がエディポスを殺さうとした時、その實行をしたのはこの羊飼だつた。そして尙恐ろしい事には、彼女が望んでゐたライオス王の最後の場所に居合せて、唯一人生きて還つて

來たのも彼だつた。エーヴェルス作の「プラーグの大學生」の主人公が、彼の愛人にその血闘の相手を斷じて殺さないと堅く約束しておきながら、其場へ行つて見るとすでに彼の分身が相手を殺してしまつてゐたと云ふ話と同樣、この羊飼は常に妃の最も望む惡の半面を實行するための、ヨカスタ自身の分身であつたのだ。彼は「ジイキル博士とハイド氏」に於けるハイドの役目をつとめてゐるのだ。ライオス王の死後、彼がテーベから姿を消したのもその爲めであり、妃がどうしても羊飼と顏を合せる事が出來ないのもその爲めである。實際にライオス王を殺した下手人はエディポス一人だつた。しかるに羊飼は逃げ還つて來て「王は數人の盜賊の手にかゝつて殺された」と報告してゐる。之は取りも直さず王の死を望んだ人間が決して一人ではなかつた證據である。少くとももう一人其場に王の死を望む者がゐた證據である。

　ソフォクレス時代の習慣では、一つの戯曲に三人以上の俳優は現れず、若しそれ以上の役がある時には三人の俳優が幾役も兼ねる事になつてゐたのだから、多分妃はヨカスタをやつた俳優が羊飼の役をしてゐたのであらう偶然とは云ひながら不思議な暗合もあればあるものだ。

　次にエディポス錯綜（コムプレックス）と最も密接な關係ある去勢錯綜（コムプレックス）(Kastrationskomplex)はこの戯曲に於ても矢張重要な役目として屢々繰返される。盲目の豫言者チレシヤスの出現並びにその豫言の言葉はフロイドの「分析藝術論」中に引用されてゐるホフマンの「小夜物語（ナハトシュテュッケン）」の砂男の話と同系のものである。フロイド曰く「作者はこの物語に於いて、何のために失明の恐怖と、父の死とを、このやうに最も内奥に於いて關係あるものとしてゐるのであるか何故に砂男はいつでも戀愛に干渉するために現れ來るのであるか。……これ等の事柄並びにその他の多くは、我々が失明の恐怖と去勢との一切の關係を否認する限りはこの物語にかいて偶然であり無意味であるやうに見える。しかし、この砂男こそは去勢を實施せる恐ろしい父の代償であると考へるや否や、以上の事柄は總て氷解するのである」と。

　チレシアスこそは父の影像（ファーザー・イマゴー）の表象そのものである。か

く分析して見るとエディポス自身兩の眼を潰すと云ふ事も、決して偶然ではない事がはつきりとして來る。そして失明後のエディポスがペニスの象徴たる娘達と別れたがらない情緒も、同情が出來る譯である。

この外にナルチスムス、執熱狂（パラノイヤ）、自己保存本能等々に關して細部の分析を行へば限りがないから今はごく全般的の分析だけにとゞめておく。

二　舞臺裝置

近世に至つて歐米で上演された「エディポス王」の中で一番有名なのは、千九百十年の十月七日から伯林の、Zirkus Schumann で上演されたラインハルトの演出である。幕なしの舞臺で、客席の中央にギリシヤ風のオーケストラを作り、觀客全體にあたかも歌舞團（コレウタイ）の共演者の如き感を與へようと試みた。この觀客席の取扱ひについては「劇場藝術」の著者ブラグドンの如きは大分異議があるやうだが、それでも一般の評判は非常によかつた。

之れから二年の後、即ち、千九百十二年にロンドンの Co-vent Garden でマルテイン・ハーヴェイその他の英國の俳優をつかつてやつた時には、客席に日本流の花道をつけてロンドン人を喫驚させた。又ごく小さな所では Pennsylvania State College で上演されてゐる。裝置者のクライド氏は彫像的な美と云ふ點に重きを置いた事が大分味噌らしい。

この外デザインでは有名なG・ヤカロフの「エディポス王」があるが、いづれもソフォクレス時代のギリシヤ建築――殊に當時の劇場建築に拘泥しすぎてゐる氣味がある。

併しソフォクレスが死んでから約二千五百年極東の一島國で、まつたく劇場構造の異なる舞臺に於て徒に初演當時の圓形劇場の模倣をする位なら、寧ろエディポス王の生存した英雄時代紀元前千百八十四年以前の建築を表はす方が正しいと思ふ。そこで大體はホーマーの詩や、テーベの王子アムフオインの傳説を經とし、最近發掘されたチリンス（トロイ）の遺跡や、クリート島のミチネの廢趾の建築樣式を緯として組立てる事にした。

先づ正面中央には青銅の扉の開閉する宮殿左右にシンメトリカルに置かれた巨石、その奥には更に高き宮殿、その兩側の空間は朝日講堂の舞臺のホリゾントを利用する。扉の前から前面にかけて三段の階段、その二段目に祭壇を置き、舞臺の前面よりは、別に客席に向つて左右各々四段づゝの階段を作り、歌舞團(コレウタイ)その他の人々は客席の左右の戸口より出入する。之だけはソフォクレス時代の舞臺に對する唯一の妥協である。

是等の階段や巨石や祭壇や扉が何を意味するか、何のシンボルであるかは一々說明する必要はあるまい。唯幕が明いた時、宮殿の輪廓をスフインクスの座像の如き感じに浮び上らせたいと思つてゐる。

三　コスチューム

全體にギリシヤ劇の拘束には餘り拘泥しないが、一通りは參照した。併し勿論マスクもかぶらず高靴も履かない。群集や其他の細部では名演出――ことに本格的だつた事とコスチュームの美しかつた事で有名なハーヴァート大學上演の際の、F・D・ミレェ氏意匠を參考にした。主な役々の方はラインハルトの時のものやG・ヤカロフやB・フェルディナンドフのデザイン、或はMetropolitan Opera House でやつたストラヴィンスキーの「エディポス王」の時の人形などを參酌して、色彩や模樣は全々時代に構はず精神分析學の見地からデザインした。

例へばエディポス王の下衣の胸當についてゐるスフィンクスの模樣は、彼の功績を物語ると共に半野獸的本能のシンボルであり、クリムゾンの上衣に金色の雷紋は、恐怖症(ホビア)に於ける血（視覺的の物）と雷鳴（聽覺的のもの）を意味する。

又エディポス王の目から見たクレオンは、先に述べた如く父の代償（即ちテーベのトーテム動物たる蛇）であり、同時にフロイドの註釋によれば兄弟（クレオンはエディポスの妃の弟）は小動物乃至小虫として、更に敵意を持つて見るときは毒虫として象徴されるので、兩方の意味から彼の上衣に常に蛇をつける事にする。

チレシアスの黒地の上衣の上に數個の大小の眼が描い

てあるのは、前述の去勢恐怖と眼の關係を示してゐるのである。

紀ヨカスタと羊飼は共に渦卷の模樣を用ふる。之は母のシンボルであつて、同時に子供の誕生即ち母子の關係を示す。(その他は略す。)

四　音　樂

ギリシヤの弦樂器で最古の物は、リユラであり、一番用ひられたのはキサラ、最後に出來たものはマガデイスであつた。この他トリゴン、パルビストの如き堅琴の類があつたが餘り盛んには使用されなかつた。

管樂器では、アウロス、デイアウロイ、プラギアウロス、シユリンクス等があり、喇叭では金屬製のサルピンクスと云ふフエニキヤ人が輸入したものがある。

打樂器はシンバルやタムバリンの類の外には餘り用ひなかつたのだが、そんな事には拘泥せずに、ラインハルトがエディポスを演出した時の如く、幕明などには大きな、コングを鳴らさうと思ふ。これに就いて思ひ出すのは、私が三歳の頃父松翁がフロイドと同國の詩人ホフマンスタールの戯曲エレクトラを飜譯上演した際に、彼は遙かに書を寄せて「演技の主要なる且最も悲壯なる場合に、日本の悲劇に用ふる音樂(即ちゴンといふ如き物音)を伴奏せば此劇詩の内容に必適すべし」と言つてよこしてゐるのは面白い暗合だと思ふ。

音階は太古にあつては三音々階であつたのが、後に第一音と第二音の間に一音挾んで、四音々階とした。尙この音階はドリア・フリユギアリ・ユデレアの三種に別たれてゐる。其後七音々階となり八音々階にすゝんだ。ドリア旋法は威嚴、勇氣、自尊等をフリユギア旋法は典雅高尙の氣分を、リユデイア旋法は情熱と愛慾の感じを現はすと云はれてゐる。殘存樂譜中參考し得る事が出來たのはデルフイの神殿で、アポロ神のために歌はれた祝捷頌歌及び其他二三に過ぎなかつた。

一體ギリシヤの歌謠曲は逐字音であつて、コロラテユールはない。そこでリズムは出來るだけソフォクレスの原作に忠實にした。但しギリシヤには今日言ふハーモニ

ーもないのだが、此點は近代音樂の長所を活用する爲めに、合唱(コロス)の第三章目は二部乃至四部の合唱を採用する。パラドスの第一章、第二章は强弱々格で二十二小節、第三章は强弱格で十五小節で全部ドリア旋法。第一スタシモンの第三章だけは强弱々格、その他のスタシモンは全部强弱格(小節の數は略す)。第一、第二のコモス共に强弱格でレスタテイヴで唱ふ。

五　照　明

使用器具

フート・ライト――なし。

プロセニアム・ボーダー・ライト――白、十六號、十八號の三サーキット。

ポリゾント・ライト――白、十六號、十八號の三サーキツト。

サスペンション・ライト

A、五百ワット――十三號

B、五百ワット二台(上下コムモン)――十三號

フロント・スポット・ライト(二台)一キロワット

フロッド・ライト(六台)

(操縱法略す)

六　演　出

俳優の出入其他は大體千八百八十一年の五月にハーヴァート大學に於てギリシヤ語で上演された時のものを基本とし、特に歌舞團(コレウタイ)の扱ひ方――例へば歌舞團長(コリファイオス)の位置「悲みの思入れ(コモス)」などは、出來るだけ本格的に演出する。

精神分析に於て右と左との區別はステーケルに依れば「右方は常に正への道であり、左は罪への道である。かくて左は同性愛、近親相姦、變態性慾を意味するが、右は結婚を、娼婦との關係等を意味する。」故に舞臺上の俳優の位置や出入の方向は、すべてこの理論的意味を基準する。

原作者ソフォクレスは獨り文豪として傑出してゐるばかりでなく、有名なる音樂家ランプロスに師事して、音樂、舞踊、體操にも非常に堪能で、十五六の頃から合唱(コロス)

の指揮をしたり、竪琴を彈いたりした。其後喉を惡くしてあまり歌を唱へなくなつてからも歌舞團長（コリファイオス）として舞臺に立つたり、或は踊りの振付けを行つた。舞踊家としても彼は非常な天才を持つてゐたと言はれる。

如何に澆季の世とは言ひながら、無學文盲の、藝道未熟の黄口の、一少年が、かゝる大天才の藝術家の作品を演出しようとは我ながら餘りにも無謀とも不遜とも言ひやうがない事だ。永遠の詩聖ソフォクレス先生の靈よ、御身を冒瀆したるわが罪を許し給へ。

『養父』演出覺書

竹中莊一

大槻憲二氏の『養父』が非常に傑れた作であるから是非上演するやうにと、最初に私に勸めたものは友人の伊福部隆輝氏であつた。彼は『養父』が書下ろされた當時（昨年末頃）これを作者から讀み聞かされて、非常に感動したのであつた。その時彼はまた大槻氏に私の劇團を推薦したものであつたらしい。フロイド喜壽祝祭劇が催されることに定まつた時、大槻氏が太陽座を想起され、また松居先生に推薦されたのは、さう云ふ因緣に基くのである。

愈々祝祭劇は催されることになり、松居先生父子の「エディポス」演出を向ふに廻して、私が『養父』を演出することになつたが、實は私は三重の意味でやり難くさを感じた。一つには松居先生は劇團の耆宿であるし、自分は一小研究團体の統率者に過ぎない。相手にとつて不足はないが、少々肩が張らないこともない。第二に、劇團の者等も私の演出には慣れ飽きてゐるが、先生の監督は珍しいし、また從つてそこから何か新しいことを學び知る好機であるとしてその方により多く興味とエネルギーを集注しようとする傾きが見える。第三に、『養父』は精神分析劇と銘打つてあるが、精神分析の何物であるかに就いては私は殆ど何の豫備知識もない。從つてこれをどう演出すれば、この劇の趣旨に協ふのであるかに就

いても見當がつかない。が、松居先生も大槻氏も、そんなに心配することはない、ストリンドベルク劇を演出するつもりでやればよいとの事で、自分も漸く腹を定めることが出來た。

始めて本讀みをした時には、作者にも立合つて貰つたが、作者が居ると誠にテレ臭いものである。殊に對象は分析劇と來てゐる。誠に具合の惡いものである。併し、本讀み終了後、作者は私の演出振りの細緻であり、心理的の呼吸がよく呑込めてゐて感心したと云つてくれたので、私は安心もし、得意にもなつた。殊にピストルを放つ前に、主人公庸藏が獨白の後に一笑するやうに俳優が科白を云つたので、『そこで笑つたのではピストルは打てんぞ』と私が云つたのは、誠に分析的にも當を得てゐると云はれたので、自分はそれ見ろと云ふ氣になつた。併し庸藏がふみ子を捕へて抱くところでは芝居が大袈裟になり過ぎることを心配したが、作者も異存を唱へなかつたので安心した。あのところは娘の科白が長いので、あゝするより外なかつたのだ。

配役に就いては主人公に紛する山村君が實際にはまだ若いので老役はどうかと思はれたことゝ、女主人公に紛する小森孃に少し『色氣』が足りないのではなからうかと作者が懸念したことゝに、自分の心配もあつたが、舞臺に出して見ると、兩方とも殆どそれ等の點に就いては全く申分がなかつた。その點は作者も認められた。この演出に就いては、自分ではなほ不滿の點もあつたし偶然の不首尾も多少あるにはあつたが、大体に於いて好評であつたのは、私の深く喜びとするところである。

最後に、編輯者の諒解を得て、當日のプログラムと配役とを記念のため左に掲げておく、何かの——多分演劇史上の——材料として珍重せられる機會のあるであらうことを信ずるからである。

(A) 講演 (第一日)精神分析の話……長谷川誠也
(第二日)フロイド博士會見の印象……矢部八重吉

同 『エディポス』の演出に就いて……松居松翁

演出 竹中莊一

装置照明 松居桃多郎

(B)『養父』(一幕)

―配役―

判事人見庸蔵……山村聰

その娘ふみ子……(藤田・堺・舞踊團)小森梢

音樂學校學生山名篤……小坂眞敏

女中はま……浦川榮子

(C)『エディポス王』(二幕)

装置、照明、演出 松居桃多郎

同 助手 遠藤市郎

舞臺監督 松居松翁

合唱團 オリオン・コール

作曲並指揮 山崎祐康

―配役―

エディポス王……山村聰

ゼウスの祭司……藤田芳蔵

クレオン……鈴木博夫

豫言者チレシアス……九島健兒

歌舞團長……金田眞生

王妃ヨカスタ……水野サワ子

コリントよりの使者……大槻修三

老羊飼……石村浩一郎

王の侍臣……岡田順

エディポスの従者……永井二郎、柳文哉

ヨカスタの侍女……土方かすみ、小森梢、浦川榮子、田方梢子、宮城靜江

クレオンの従者……戸並二郎、島暉夫

チレシアスの手を引ける少年……關口八重子

アンチゴーネ、イスメーネ(エディポスの王女)……鹽井マリ子、諏訪京子

テーベの市民たち……田方梢子、宮城靜江、土方かすみ、浦川榮子、小林直子、小森梢、水野サワ子、石村浩一郎、東日米雄、山本權、瀬浪潤

內外彙報

ベーンのエディポス論

ジイグフリード・ベーン Siegfried Behn はその好著『美と魔術』（一九三二年）の中で、ソフォクレースの『エディポス王』に就いて次のやうに云つてゐる。誠に銳い見方である。

『……で、エディポスの忍從したことは總て意味深き運命である。彼が何事かを意味せんとする限りにおいての彼の運命である。……それ以外にまた、總ての人間は（惡魔のために罪惡の深淵に陷れられるが）母を護るために父を殺さうとの深き衝動を藏してゐる。その事は精神分析學者フロイドが、判然と見屆けたところだ。假定に依つて構造されてゐる精神分析から一つの形面上學的な世界觀を作り上げると云ふことは不適當であるが、併し精神分析の確にそこゝに見られる銳い洞察が分析者の先入見から出たものだと蔑視することは當を得ない。現實の人間がエディポス的な行動等實際に行はないと云ふことは、必ずしもさう云ふ可能性が彼の內に潛んでゐないと云ふことを意味しはしない。ゲーテは一切の罪惡の話を聽いてその可能性が自分の內にあることを認めざるを得ないと告白してゐるが、フロイドがソフォクレースと共に正しいと云ふことを認めるには、このゲーテ的な自己認識を持たねばならないのである。十九世紀の善良な市民たちは、エディポスの場合を狂暴な、病理的な、特殊の事件とし、そんなことは一般の人類には無緣なことだと論じたが、それは根據が薄弱である。中世の價値ある文藝はこの點に於いて全く意見を異にしてゐる。ハルトマン・フォン・アウエ Hartmann von Aue の『石上のグレゴリウス』を見るがよい。これは全然エディポス的主題を取扱つたものではないか。さうしてハルトマン・フォン・アウエは正しいのだ。何となればエディポスは文學の永遠の主題だからだ。』――（『分析運動』一九三三年

一・二月號所載。）

フロイド博士の新著

フロイド博士から本研究所の大槻氏の許へ最近著『精神分析入門續篇』"Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse." を送つて來たのは（大槻氏が落掌したのは）本年一月十七日であつた。大槻氏は當時『フロイド全集』最後の卷『總論』の飜譯に沒頭してゐたし、その後祝祭劇、雜誌創刊の劇務のために、同書を學界に紹介するの機會を持たなかつたが、最近著の『分析運動』誌を見ると、ヰインのリヒヤルド・ステルバ R.Sterba 氏が同書を批評してゐるので取敢へずその書の内容だけでもこゝに紹介しておかう。

ステルバ氏も云つてゐる通り『フロイドのこの新著は二重の意味に於いて「續篇」である。多くの點に於いてこの書は新版であるが、また別の點に於いては以前の講義の内容の連續である。』で、第一章となるべき筈のところが、第二十九章となつてをり、これを以て始まつて第三十五章に及んでゐる。つまり全部七章から成つてゐる内容を表示すると左の如くである。

第二十九章　夢の說の再考
第三十章　夢と靈知術
第三十一章　心理的人格の分裂
第三十二章　不安と本能生活
第三十三章　女　性
第三十四章　啓蒙、應用、治療上の注意
第三十五章　或る世界觀に就いて

舊入門發行以後の發見にかゝることが多く書込まれてあるやうである。

『分析運動』三、四月號內容

一、音樂家ブラームスと女達（エドゥアルト・ヒッチュマン氏稿。）

二、皮肉家の心理（前號からの續論）（F・ベルグラー

氏稿。）皮肉の幾多の種類を擧げて分析的に論じてある。

三、牧歌的の分析、I・フィエルリヒト氏稿。（ドイツ文學に於ける牧歌的作品は村落生活と共に終熄したのではないとの建前から論を進めたもの。）

四、フロイドの『入門新續篇』批評。（R・ステルバ氏稿。）

五、ロンドンに於ける犯罪科學研究所。（E・グラヴー氏稿。）昨年ロンドンに犯罪科學研究所が、心理學者、社會學者、法醫學者等に依つて創設され、創立されたが、精神分析學者もこれに參加し、フロイド敎授、ジョーンズ博士、グラヴー博士等も重要なる役員となつてゐる。創設總會は一九三二年十一月二十九日ユニヴシティ・カレッヂに於いて、グラヴー博士司會の下に開かれ、出席者三百餘名、その時の演說がこゝに紹介してある。

グロデックの新著

『エスの書』の著者として分析學界に著名なグロデック G. Groddeck はこの度新著『象徵としての人間』"Der Mensch als Symbol" を公にした。著者はこの書に於いて、人間は現實に就いては何も知らず、たゞ象徵の世界にのみ生きてゐると云ふことを示さんとしたのである。人間とは男・女・兒の三位一体の象徵的な形に於いてのみ解されてゐるので、總てはさう云ふ形で体驗せられてゐる。グロデックは例に依り眞面目な反語的な書き方を以てこの困難な材料を扱つてゐる。

ベルグソンの新著

ベルグソンは本年七十四歲であるが、最近に彼の『道德及び宗敎の二つの源泉』てふ書の獨譯が公刊された。彼はこの興味ある書に於いて、倫理的な方面からの彼の人生觀を明かにしてゐる。この書の取扱つてゐる諸問題は、フロイドがこの數年間に『宗敎論』や『文明論』などの中で取扱つて來た問題と同じところが多いので、殊にベルグソンは『夢』を論じてフロイドと似た見解を示

してゐるので、兩者を比較して見ると非常に興味が深からうと思ふ。佛原文のは何時頃出たものか知らないが、昨年中であるらしい。獨譯文はイエナのEugen Diederichsから出版されてゐる。

『發明と無意識』との關係

Invention and Unconscious. By Joseph-Marie Montmasson. Translated with a Preface. by H. Stafford Hatfield. (Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd, London 1931, PP. xxiv+338. Price 15s.)

此書は、創造的思考、又一般思考が概ね無意識過程により支配され、創造され得ることを證明せんとする意圖からものされたもので二部より成り立つてゐる。第一部に於て著者は、創造的思考の働く原因を見出し、分類せんとする見地から一般知識の世界、數學、物理學、生理學、倫理學、工學上の發明に關する過程の精密な研究を與へてゐる。幾多の發明は意識の力の相互的働きより結果すると著者は結論する。創造の作業は四段階に區別される。即ち準備と潛伏期と新觀念の發出と證明とである意識と無意識の相互作用は汎ての段階で起り得るが、概して意識は準備と潛伏期に於て相對的に著しい。併し突然の啓示か、或は除々と解き明されてゆくかうした形態を示すところの新觀念の發出に由來する潛伏期は絕對に無意識であつて、即ち眞の創造的合成は無意識の作用なのである。

第二部は、此の研究から得た材料に基いて、完全な知識を學說に組織化せんとしてゐる。完全な知識は「發明の大作用を結合する汎ての心理的活動力の總和である」無意識は三つの等級に頒けて考へられる。即ち自働的、力學的、美學的のそれである。自働的無意識は經驗を記錄し貯藏する。「科學的發明の準備はかくて最初は自働的無意識によつて結果される。」潛伏期を通過する過程と新しい基礎的觀念の顯現に到るのは力學的意識によるこの力學的無意識は驚くべきことに暗示（サゼスション）として定義してゐる。併し著者が暗示を考察するにそれ自身行動の裡に

實現する自然的傾向を有する本質的な觀念であると說くに及んでその驚きは解けるであらう。次に美學的無意識は全過程を形成し支配に導く功果的なもので、これは單に發明に於ける特有でなく、全思考の特質である。『併しこの創造的作業の大低の場合は漠然として名狀し難いそれは充分高い段階に達しないからで、眞の發明は最高點を示し發明者は眞理の英雄である。』

　精神分析に關與する讀者は著者が發明に於ける無意識の實在とその極めて重要なる指摘に同意するであらう。そして力學的、功果的な起因についての認識をも諒解し得やう。併し又一面それらは無意識の概念と定義では不適應であることも感ずるであらう。Montmasson氏によれば、意識は『或程度の集中、即ち注意』に現れる。『意識は注意を向けられた部分のために汎ての段階を通じ、こゝより零を通過するであらう……要約すれば、この意識は零によつて計算せられ、注意は無意識になる。』この嘗に於ては注意の配列を規定する勢力の性質について暗示がないし、抑壓乃至變位の過程の存在に關してもそれがない。著者は廣汎に主としてフランスの文献によつて示してゐるが、必ずしも Dwelshauvers や Jastrow 以上に精神分析學に通じてゐるとも思へない。彼は事實發明家の定位をオリジナルな無意識衝動に關して特異な視野を展開してゐるが汎ての經驗に先立つ個人的屬性や遺傳によつて得らるべき例外については述べてゐない。

　飜譯は良くなし遂げられ、特に Stafford Hatfield の興味ある序文はその方面に於ける精神分析的事業の重要なことが認められてゐる。たゞ、人間の發明は、"the Psychical Counterpart of the modification of structure,instet habbit by which living species have been produced" といふ暗示された假說は現在の生物學や心理學の知識では證明も不證明も可能ではない。

Cf. *The International Journal of Psycho-Anclysis.*, vol XIII, 1932. p. 233

（荒川龍彥）

『精神分析總論』の完成

フロイド精神分析學全集の第十卷（最終卷）として春陽堂から最近刊行された表題の書は、本誌末尾廣告欄の如き內容を具へてゐるが、殊に譯者大槻憲二氏が序文の末に『本全集讀み方手引』を、卷末に『本全集總索引』（件名、人名、書名）――原稿紙八十餘枚――を添へてゐるので、愈々『總論』の名實を完全にするものとなつてゐる。わが國に於けるフロイド研究はこの書の出現に依つて非常に容易に、簡便になつたと云つて過言でない。

シェイクスピア第四回記念祭

日本シェイクスピア協會の主催に懸る、本年度の記念祭は四月二十八日午後三時から神田一ツ橋帝國教育會講堂に於いて催された。その出演者及び演題左の如し。

一、開會の辭……………會長…市河三喜氏
一、思ひ出…………………松本幸四郎氏
一、マクベスの精神分析的鑑賞……大槻憲二氏
一、上演されたシェイクスピア劇…福原麟太郎氏
一、ルネサンス人としてのシェイクスピア………
　　　　　　　　　　………西脇順三郎氏

四月中の分析學的記事及び放送

一、ゴールズワーヂの最後の小說（「藝術殿」）…
　　　　　　　　　　……長谷川誠也氏稿
一、犯罪の精神分析に關する檢討（「腦」）……
　　　　　　　　　　……吉益脩夫氏稿
一、深部心理學の生理學的基礎（「腦」）………
　　　　　　　　　　………小沼十寸穗氏譯
一、精神分析の父フロイド（信濃每日、四月廿九日、三十日）………………大槻憲二氏稿
一、精神分析學より見たる子供の嘘（四月中、名古屋放送局より）…………伊福部敬子氏談

五月號諸雜誌中の分析學的記事

一、ファッシスモの精神分析とその批評(有斐閣「國家學雜誌」)……京城帝大教授……戸澤鐵彦氏稿

一、野球ファンの心理分析(三省堂「エコー」)……大槻憲二氏稿

一、アムビヴレンス(梓書房、「藝術殿」)……長谷川誠也氏稿

一、「政治學と精神分析」の紹介(思想)……

一、本誌所載稿に就いては「編輯後記」參照。

本研究所研究會四月例會

に就いては既に先號に大体の報告をしておいたが、こゝに詳錄しておく。七日夕、アメリカン・ベーカリで催し、松居松翁、同桃多郎、長谷川誠也、江戸川亂歩、海野十三、棚谷伸彦、時平さきを、小林五郎、小松德、長崎文治、荒川龍彦、大槻憲二、伊東豐夫、小山良修、田内長太郎、の諸氏が出席したが、祝祭劇の前のことゝて、その準備や經過報告、新計畫の打合せ、入場券販賣の相談などにて研究談を交す餘裕は殆どなかつた。たまにはから云ふ事もよからう。

同研究會五月例會

五月六日(土)午後五時半から例の如く萬世橋驛前アメリカン・ベーカリにて催す。當夜は祝祭劇慰勞會を兼ね、研究所からさゝやかな酒肴を供してつゝましき歡びの宴を張つた。食後、祝祭劇終了に就いての挨拶と雜誌についての相談とが一幹事からあり、次に祝祭劇收支決算報告が會計係と書記長とに依つてなされて、研究談に入つた。當夜は祝祭劇の餘勢を受けてか、お酒のせいであつたか、話者諸氏に大層元氣があり、殊に松居松翁氏は盛んなる猛勇を振つて會を活氣づけた。が、酒を愛し

て酒にもろき田內長太郎氏は、その以前ギリシア人に退行し、(この言葉はいさゝか樂屋落ちだが)座を外して了つたのは遺憾であつた。即ち話者は左の五氏であつた。

一、人相學の話……………吉村森三郎氏
一、吸血願望の分析的觀察……………矢部八重吉氏
一、吉村說の批評……………大槻憲二氏
一、吉村、大槻兩氏への批評……………松居松翁氏
一、言語學への分析的興味……………小野田幸雄氏

出席者は右の五氏の他に、長谷川誠也、長崎文治、時平さきを、松居桃多郎、齋藤長利、小林五郎、大村曉、伊東豐夫、小松德、原次雄、荒川龍彥、田內長太郎、松田俊武、江戸川亂步、奥村博史、長谷川浩三の諸氏であつた。なほ萬已むなく缺席の挨拶のあつたのは、武田忠哉、永田道彥兩氏であつた。

祝祭劇印象

五十嵐力

大層面白く拜見感激して歸りました、大槻君の御作の方は大膽な新しさに驚き足許を顚みさせられるやうな氣がいたしました、ソフォクレスの方はやはり或大きなものに威壓されて、人間の見窄らしさをまざまざ見せられるやうな心地が致しました、精神分析の方の知識がさつぱり無いので、相當の御苦心を拜見しながらその方の感想を申上げかねるのを遺憾とします。草々

海野十三

フロイド祭を、大變樂しく共にさせて頂いて有難う存じます。フロイドものが芝居になつたといふだけでもあの日の演劇の價値は十分にありませう。『養父』にかける大槻さんの御手腕には敬服の外ありません。『エディポス王』については松居さん御親子のはたの目も羨しい御睦しい協力と超人的な御蔭で大いに感激しました。この次の芝居が樂しみです。

通信と寄書

滿洲國から

研究所員・農學士
千　葉　廣　洋

拜啓　久しく御無沙汰致しました。新聞(東京朝日)で我等の機關雜誌の出來を知つて前から御祝の手紙を差上げ、兼ねて會費を納めようと思つてゐましたが、若干公務を帶びて、出張致し、無事歸任致した日に、小生と同日に異方面へ出張出發した同仁一名、吉敦線で遭難殉職して遺骸となつて冷く歸つて來、其よりは、內地なる父の到着迄、同仁一同で御通夜をなし、一昨日やつと告別式を行つた所です。さう云ふ譯ですから、何卒御諒恕願上げます。

先生、奧樣並に諸兄方、御變りはないものと存じます。東京も櫻は散つた頃でせうか。當地は漸く昨今、最低もプラスの五度を下らざる程度になり、晝間はポカ〳〵するのですが、夜分は一寸氣を付けないと風を引く位です。其の證據に小生は現在風を引いてゐます。

フロイド喜壽祝祭劇は大變だつたでせう。其れにまた、全集の完成、機關誌の創刊と重つて、實に斯學の發達普及に盡力下さる御熱意、感佩の至りです。文化の中心を遠く離れて窒息に瀕してゐる小生、何とか早く又研究會にでも奔せ參じたいものです。然うかと云つて、農會の法規を起案させられたり、殉職する者が出るとやはり一段と緊張を覺えます。小生の居る農務科は科員の三分の二は殆ど代る〳〵出張不在と云ふ觀を呈してゐるので何時殉職の榮に當るも知れ難い所ですからね。(後讀時註、此のパラグラフの言ひ方、たしかに、アンビヴアレントですね。)

先日思ひ掛けない所より左の書籍入手致し、小生には到底、利用の時間的餘猶なく、もし御高覽下さるならば、御一報次第、直ちに、御郵送申し上げます。

Dr. Pierre Janet: L' État mental des hystériques
(Études sur divers symptômes hystériques)
(3me Edition 1931, avec gravures dans le texte)
(Travaux du Laboratoire de Psychologie de la Salpêtrière, 5me série)

序文を讀んで見ますと一九一一年同研究會より發行された論文第五輯は次の三部より成つてゐたが、

第一部：L' État mental des hystériques に關する Janet の諸論文の reproduction を收め Janet の "thèse de doctorat en médecine" であり、1893—94 年頃のものである。

第三部：Janet の Traitement psychologique de l'Hystérie に就ての論分を收め、1892年頃のもの。

本書は即ち其の第二部を收めたもので他の二部は現在何れも絶版となつてゐるが、第二部を特に重要と認めて飜刻する云々と次の樣に書き加へてゐる。

J' attache une importance plus grande aux travau qui étaient conctenus dans la deuxièmes partie. Il s'agit là d' observations et d' interprétations qui peuvent

encore aujourd' hui être uti les non seulement pour l' études des névroses, mais aussi pour les études psychologiques. Les sept chapítres de cette deuxième partie contiennent des obser vations relatives à la localisation des troubles hystéri ques sur le côté droit ou le côté gauche de corps, sur l'hémaniopsie et les troubles de la vision biuoculaire, sur le rythme de Cheyne- Stokes, sur le phénomène des apports Chez les mediums et surtout sur les modifications des souveuirs par l'émotion et sur les doubles personalités à propos dune félida artificielle. Ces deux dernieres études sont trés souvent utilisées dans mes lecons sur la miemoire

最後の二節を讀んで見たいと思ひ乍らもつい に暇がないもので其儘になつてゐます。歴史的に面白いかも知れません。所員の内で何方か御利用下さる人はないでせうか、ありましたら、何卒御遠慮なく御申越下さい。

研究會では、近頃、色々書籍を購入されましたか？ 會員共同で利用することを許されてゐるのですから、もう一つ慾を張つて藏書の目錄を、暇がありましたら、作つて頂き度う御座います。無理な願ひかも知れませんが。

又會員の藏書で、此れは比較的に珍しいと思はれるのがあります時は、雜誌の何處かに一欄を設けて、披露させては如何なものせうか。

では先生、奥樣、諸會友方々の御健鬪を祝して擱筆させて頂きます。亂筆多謝

五月三日（大槻氏宛）

エディポスの事

則近保良

フロイド敎授に據つてエディポス・コンプレクスが明らかにされて以來、エディポス傳說に就て精神分析に關心を持つ人々の考察は旣に可成の數に識つてゐる。それらの驥尾に附して、私は二、三の解釋を試みる事に據り先蹤諸氏の御鞭撻を仰ぎ度い。

エディポス傳說の最も重點をなすは、キタイロン山中の三岐の道、即ちフォーキスと稱するデルフイ街道とドーリー街道との三岐の辻である。道や三なる數字は常に何物かを象徵してをり、密林の幽谷は性器を、雜木林は陰毛を指示する事は此處に言を俟たない。（フロイド『夢の註釋』參照。）

此の三岐の相會する地點に於てエディポスが、その父ライオス王を殺害することに據り、ア・プリオリに呪はれたる彼自身の再度の誕生を自らの手に據つて行つたと見るべきである。

更らに私にとつて興味ある點は、エディポスの足である。足（踝、手、指）はペニスの象徵である。しかもエディポスの踝を幼時に於て傷破したのはヨカスタであつた。此の悲劇エディポス傳說のエピロオグに於ける悲慘へのプロセスとして旣に妃ヨカスタは、彼女の子供である。エディポスの童貞を破るべく此の一事に於てその未來の暗示が爲されて居る。

長谷川誠也氏は本誌の創刊號（十二頁九——十二行）に於いてエディポスなる語原學上の意味を聰明の義に解してをら

れるが、私は寧ろ此のエディポス傳説一篇の内容より推して、一般の説を揷つて『腫れたる足』の意味に解したい。何故なら足がペニスの象徴であるとすれば、腫れるとは即ちペニスの勃起(性慾衝動)を指してをるものであり、エディポス傳說一篇を通じてのリビドー纒綿のクライマックスを克く表現してをるからである

また國は女性、特に女性の子宮を象徴するものである。此のテーベなる國がスフインクスの謎に苦しめられる一事は、それがライオス王死後の出來事であり、ヨカスタの寡婦である期間の事であるだけに、孤閨を守る女の性的苦惱を意味してをると解釋するのは、果して無理であらうか。

最後にエディポスが再びキタイロンに住みたいと願ふ意味には、胎内的象徴の含まれてをる事は勿論である。

以上私は簡單に二三の考察を試みた。私自身は斯道には未熟である。然し少しづゝ此の方面を勉强してをるものである而してエディポス劇讀後に於て感ずるところあり、此處に不遠慮を敢てする次第である。幸に大方の御敎示を期待する。

★

少し解釋が形式主義的になり過ぎてゐます。殊に『腫れた足』を勃起とのみ解せんとするのは無理かと思ひますが、密林や幽谷の解釋は伊東豐夫氏も指摘してゐました。御說に贊成します。ダンテ神曲の地獄の入口と比較研究して下さい。かゝる象徴が世界の文豪に依つて無意識に用ゐられてゐる事は、何たる大事實でせう。(記者)

仙臺から　木村廉吉

拜復、御書面有難く拜讀致しました。多年孤立的に精神分析學研究に從事致しよき學友の乏しきを遺憾に存じ居りましたところ、此度御同志の諸賢相共に研究所御創立、機關誌の發行、其の他の御活動の御樣子承り、誠に斯學の爲めによろこばしき事と存じます。當敎室業報は純粹に研究的のものに限つてゐます故、其の中には又是非拙稿の御登載を御願ひ致す事もあらうと存じます。なほ業報に就いても何卒御好意ある御批判又は叱正を御願ひ申しあげます。たゞさし當り病後のため充分の勉强を致し兼ねてゐる事を殘念に思ひます。

御申越の古澤平作君はしばらく消息がありませんが、たしか近日一度來仙のはづですから、その折貴意御傳へ致しますなほ當敎室の早坂博士、山村學士も此度の快報をよろこんで相携へて研究に勵み度き意志ですから、右御紹介申しあげます。

何れ學會にて上京の折にても是非御高說拜聽致し度く樂しみ居りますが、何卒貴所員各位にもよろしく御傳へのほど御願ひ致します。

編輯後記

前號の本欄に豫告しておいた通り、愈々本研究所客員の芳名を卷頭に發表することが出來るやうになつた。『……創刊の辭にも書いておきました通りの趣旨にて編輯いたしますにつき、舊時代のコムプレクスなる學閥意識の如きは分析に依つて御互に發散（アブレアギーレン）せしめわが國學界の、殊に心理、哲學、醫學、敎育、社會、文學、民俗その他精神科學一般の權威を客員に迎へて御協力の榮を得たく……』云々との趣旨を述べ六ヶ條の項目を擧げてその內可能なる條々をとつて貰ふことにして、かく目ざましい反響を得た。このやうに超學閥的の協同事業は、恐らくわが國に於いては未曾有の事で、たゞ僅にこれに類するものは日本シエイクスピア協會の事業のみであらう。來月號あたりから着々その實を擧げて行きたいと考へてゐる。當研究所の勸請を快く容れられた諸賢に對して玆に厚く感謝の辭を述べておきたい。

×

矢部八重吉氏は米國コロムビア大學にてBAの稱號を得て歸朝し、永く鐵道省に囑託として勞働心理の研究と調査に從事し、數年前渡英してグラヴァー博士の分析を受けて歸朝後は國際學會の支部を創設してゐる人。

長崎文治氏は東洋大學印度哲學科昭和三年の出身者。神經病者を、分析以外の方法にてゞはあるが多少取扱つた經驗もある人。また現に經驗を積みつゝ愈々分析學の主張の正しきを認めつゝある人。

高水力太郎氏は帝大精神科を家庭の事情にて中途退學し、目下當研究所にて分析學を研究しつゝある若い學徒。

×

『心理學研究』四月號誌上に於ける佐藤幸治氏の論に對して大槻、矢部兩氏の反駁を時評欄に揭げたが、實は佐藤氏の論の前半（精神分析學の全般に對する批評）に對する反駁はこれを大槻氏に托し後半（矢部氏著書に對するもの）はこれを矢部氏に囑する筈であつたが、矢部氏の論もその題目を主として前半にとられることになつたので、かう重複するやうになつた。併し兩氏の反駁文は、全くその方法と態度とを異にしてゐるので、二つ並べておくことは必ずしも無意味でないと信ずるので、そのまゝ並存せしむることにしたのである。佐藤氏並びに一般讀者諸氏、乞ふこれを諒せられよ。

×

來月號には

一、長谷川誠也氏の敎育論
一、江戸川氏の續論
一、大槻氏の救助願望續論
一、中山氏の神前乘馬入禁止に關する大論文
一、山路太郎氏のリチヤーヅ論など雄篇が集まつてゐます。

讀者諸氏からも大いに御寄稿を歡迎します。夢の話、やり損ひの話。その他いろ〱の興味ある事實が幾らもあらうと存じます。大いに期待してゐます。

來月號にはまた講座と質疑應答とを盛んにいたします。文藝欄にも投稿を期待する。分析を意識したものでなくても差支ありません。

研究所事業案内

一、分析部

●神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症、その他）

●性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

●分析料、一時間一圓位。期間大体三ヶ月前後。

●客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には紹介の勞をとるべし。

二、教育部

●當研究主催の講演會、公開講習會、演劇その他。

●所員並に客員に對して他より依頼の講演又は講習會。

三、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會

毎月一回開催、その都度通知出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費及び誌代共月額一圓。（但し臨時出席者に對しては誌代を別に申受く。）

五、講習會

毎月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

本誌五月創刊號目次

臨時定價金六十錢

昭和八年五月二十日印刷
昭和八年六月一日發行
定價五十錢（郵稅四錢）第二號

編輯者 東京市本鄕區駒込動坂町三二七 大槻憲二
印刷兼發行者 東京市日本橋區通三丁目七番地 依田初男
印刷所 東京市日本橋區通三丁目七番地 不二印刷出版社

定價一部 五拾錢 郵稅四錢
半年分 參圓 送料共
一年分 六圓 送料共

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京三八六九〇番へ御拂込み下さい。
●郵券代用の場合は一割增に願ひます。
●本誌廣告に關しては、御照會次第社員を伺はせます。

發行所 東京市日本橋區通三丁目七番地 不二出版社
電話日本橋(24)四三四七番
振替口座東京三八六九〇番

藝術殿

坪内逍遙博士會號執筆

六月號（第三卷第六號） 要目

一部 定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯 財團法人 國劇向上會 東京市淀橋區戸塚一丁目 振替（東京二〇二九〇番）

發行 梓書房 東京市神田區駿河臺町一ノ八 振替（東京七八六四四番）

二、宗教の將來　第一章以下第十章まで
三、文明と不滿　第一章大海原のやうな感情、第二章宗教は幸福を與へるか、第三章文明とは何か、第四章文明の缺陷、第五章攻擊慾と文明、第六章エロスと死の本能との鬪爭、第七章良心の起源、第八章余論

（第四卷）快不快原則を超えて

定價一圓五十錢・送料十二錢　對馬完治譯

一、快不快原則を超えて　第一章以下第七章まで
二、强迫神經症の一例　一、臨床記錄の抽出（a治療の開始、b小兒の性感、c大强迫恐怖、d治療に誘導すること、e强迫觀念とその說明、f强迫神經症の起因、g父性コンプレクス及び鼠の觀念の解除）二、理論（a强迫形成の或る一般的特性、b强迫神經症の或る心理的特性、c强迫神經症の本能的生活及び强迫と疑念との根源）
附　錄　快不快原則に關する譯者の解說

（第五卷）性慾論・禁制論

定價一圓七十錢・送料十二錢　矢部八重吉譯

（口　繪）　原著者肖像及び筆蹟
一、性說に關する三論文　第一論文、性の錯誤（第一章性的對象に關する變態、同性愛、性的對象としての性的未熟者及び動物、第二章性目的に關する變態、解剖的違反、豫備的目的の定着、第三章あらゆる變態に一般的なもの、第四章神經症患者の性本能、第五章部分本能と性的帶域、第六章神經症患者に於いて性的變態が分見的には目立つ所以の說明、第七章幼兒性感について）第二論文、幼兒の性感（幼兒時代の性的潛在期間とその中絕、幼兒性感の顯現、幼兒性感の性目的、性的顯現としての自慰、幼兒の性研究、性組織發達の諸段階、幼兒性感の源泉）第三論文、思春期に於ける性感の變化（性器帶域の變化と豫備快感、性的亢奮の問題、リビドー說、男女の別對象發見）論旨要約
二、禁制と徵候と杞憂　第一章以下第十一章まで
三、附　錄　フロイド先生會見記（譯者）

（第六巻）分析藝術論　定價一圓九十錢・送料十二　大槻憲二譯

一、機智とその無意識に對する關係と（第一章以下第五章）　二、フモール　三、詩人と空想　四、レオナルドとモナ・リーザの微笑　五、原始語に於ける相反意義について　六、筥擇みの動機　七、ミケルアンヂエロのモーゼ　八、ゲーテの幼兒期記憶　九、氣味惡さ　十、夢と童話（挿圖十三枚――寫眞版七枚凸版六枚）

（第七巻）トーテムとダブー、自我とエス　定價一圓八十錢・送料十二　矢部八重吉譯　對馬完治譯

一、トーテムとタブー（一、近親姦恐怖　二、タブーとアムビバレンツ　三、アニミスムスの魔法及び思想の全能　四、幼兒に於いて復活するトーテミズム）
二、自我とエス（一、意識と主意識　二、自我とエス　三、自我と超自我　四、二種の本能　五、自我の從屬的關係）

（第八巻）分析療法論　定價一圓九十錢・送料十二　大槻憲二譯

（口繪）原著者肖像メタル寫眞

一、フロイドの精神分析法、精神療法について、精神分析療法の將來、分析の『仕荒し』について、精神分析に於ける夢の解釋の使用、轉嫁の動力性、分析醫に對する處置上の注意、精神分析操作中に於ける誤てる再認識に就いて、精神分析處置法、想起・反復・並びに徹底操作、醫者に對する婦人患者の轉嫁愛に就いて、精神分析療法の道、分析技法前史に就いて
二、非醫者の分析可否の問題、はしがき、分析は醫療にして醫療に非ず、分析療法の現論的根據、神經症の發生機制とその處置法、精神分析と性慾、精神分析技法の難點、精神分析への法律的干渉、精神分析への三種の興味、『非醫者の分析可否の問題』への附言
三、性格と肛門性感

（第九巻）分析戀愛論　定價一圓八十錢・送料十二　大槻憲二譯

精神分析學文献鈔

對馬完治氏著
フロイド派と文藝（絶版）
東京 天人社

長谷川誠也氏著
文藝と心理分析（定價二圓七十錢 送料十六錢）
東京市日本橋區通り三丁目八 春陽堂

大槻憲二氏著
精神分析概論（定價三十錢 送料四錢）
不二出版社又は當研究所（東京市本郷區動坂町三二七）取次

矢部八重吉氏著
精神分析の理論と應用（定價一圓三十錢 送料十二錢）
東京市牛込區 早稲田大學出版部

昭和八年五月二十日印刷納本
昭和八年六月一日發行
每月一回一日發行
精神分析 第貳號

I. Jg., Heft II, 1, Juni, 1933. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom
Tokio Institut für Psychoanalyse.

Mit 4 Kunstbeilagen (Szene aus "Ödipus" und "Pflegevater.")
2 Abbildungen (Szene dei der Freud-Feier.)

Inhalt

Preis des Einzelheftes, 50 Sen.

Fuji-Shuppansha Velrag,
Nihonbashi, Tohri 3 chome, 7.
Tokio Japan.

定價 金五拾錢 郵税四錢